
ワ　ルド・ザ・マジック

アニメ冒険家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールド・ザ・マジック

【Nコード】

N4987N

【作者名】

アニメ冒険家

【あらすじ】

ただの魔道士が様々な事に巻き込まれながら戦って行く。
その先に待ってる物とは？

彼は光ある未来を導き出す事ができるだろうか！

未来を守りし者（前書き）

初の投稿になります是非見てください

未来を守りし者

普通に魔力があつてそれで魔道士になった。そんな実力があるわけではない、偉いわけでもない。そんな魔道士が様々な事件に巻き込まれながら戦つていく物語そして、その中で様々な魔道士と出会い共に支えあい戦つて行く。彼はそんな物語の中で一体どうなるのか、どう変わつて行くのだろうか。それは誰にもわからない。光に行くか。

闇に墜ちるか。そんな狭間で彼はどんな答えを見いだして行くのだろうか。

起きる事件で彼は仲間達をどう助けるのだろうか。

未来を守りし者（後書き）

まだ初めてなのでわからないと思いますが次を楽しみにしてください

ワールド・ザ・マジック（前書き）

初めだからあえて短くしましたがよんでほしいです！

ワールド・ザ・マジック

暗い。何も感じない。何も聞こえない。何も見えない。なのに何故そう思うのだろうか？一体私は誰でここはどこともわからない。それなのに何でこんな思考が浮かんで来るんだろ。私には脳みそがあるのだろうか、だったら手や足があるのだろうか？だがわからない。手や足があるのなら動かせるはずだが、そんな感じはしない。何なんだ？私は人間じゃないのか？それもわからない。ただただそんな思考が繰り返されるだけだ。頼む！誰か私を教えてくれ。私は何なのだ！？そんな事を思ったのが最後だった。何かを掘るような音が聞こえたと思うと光が見えた。そこには謎の人影があった

「全員そろったか！？」

青い青空に大きな声が広がった。その声の主は威厳のありそうな顔をしており、目の前にいる人達に偉そうにしている。「では今から君達にはこの地域にある、ロストログアを搜索してもらいたい。」そう言う男は自分の持つ杖を掲げた。見ると目の前の人達も同じような杖を持っている。

「では、搜索開始！ロストログアを見つけた者は連絡をよこせ！」

「了解！」

男と共に声を挙げた者達は一斉に飛んでいった。

「あゝあ面倒だな。」

今度は大空に情けない声が広がった。声の主は若い男で魔道士の格好をして杖を持っている。

「せっかくの休みだったのになゝこんな暑い日にはプルに行って可愛い女の子の水着を見たいのになゝ。」

グダグダと喋りながらその男は森の中をさまよっている。

「それにしてもロストロギアを搜索するとはなあ…ヤダな…こんな仕事は優秀な魔道士にやらせればいいんだよな。」

さつきから愚痴の数が減らない。

よつぽどヤダみたいだとわかる。

「あ！そうだ今日は月刊誌エースオブメモリーの発売日じゃあねえか！！」

男は悲しそうな顔をしてがつくりと、肩を落とした。

「あれ人気だからすぐ売り切れるんだよな…しかも今日のトップページはあの人、高町なのは…あゝあ残念だ。」

男はより深く肩を落として唸った。

「しかしあの子１５歳とは思えないよな…あの顔立ち、そしてあの体！！やばいわゝ興奮して来た！」

男がそんな事を言っている時だった。

ゾクツと背中に寒気を感じた。

「な、なんだ？」

振り向くと後ろの地面から赤い線のような物が出ていた。

「な、何なんだこれは……。」

男は恐る恐るその場所を掘った。

「これは…まさか…ロストロギア！？」

男は驚いた。探してたロストロギアを言う物を自分が見つけてしまったのだから、

「やったぜ！まさか俺が見つけてしまったとは！よし早速…。」

ドクン！！

「があああ！？」

急に男が膝をついて苦しみ出した。

「な、一体…」

その瞬間、彼は意識を失った。

ワルド・ザ・マジック（後書き）

どうでしょう？まだいたらないとは思いますが出来れば感想下さい！

ワルド・ザ・マジック2（前書き）

2話目です。いきなり沢山の人に見てもらって嬉しいです。

ワールド・ザ・マジック2

「全く… 大変な事になったわね」

オフィスのような所で美しい緑髪の女性、リンディ・ハラウンが嘆いていた。

彼女は時空管理局に勤めていて、かなりの役職についている人物だ。そんな彼女を悩ませているとは、よっぽどな事件が起きたんだなと思う。

「失礼します。リンディさん。」

すると扉が開いて2人の若い女性が入って来た。

「あら2人共わざわざごめんなさいねえ」。

リンディさんは申し訳無さそうに2人の女性に謝った。

「気にしないでください。それよりも頼みたい事とは？」

リンディはどうやらこの2人に何やら仕事を頼んだようだ。

「それはねーとりあえず、この資料を目に通してほしいの。」

そう言うリンディは机から資料を出して、2人の前に置いた。

「これは…… 個人情報？」

1人がその資料を取ってそう言った。

「そう… 読んでみて。」

リンディが2人にそう言うのと、もう1人が資料を覗き見る感じで、資料持っている女性が始めた。

「ツカサ・ラグーン（18）空戦部隊107に所属。階級は三等空士。陸軍にも勤めていた事もある。魔力値はB-。任務や事務はそつなくこなす。」

これは明らかに普通の個人情報だ。誰が見てもそう思う。

「あの… これどう見てもただの個人情報では？」

読んでいた女性が少し遠慮がちにリンディに尋ねた。

「問題は次の資料よ。」女性はそれを聞くと、もう一枚あった資料をみた。

そこにはこう書かれていた。

「彼は今回ロストログアを搜索していたが、その時にある事件に巻き込まれた。」

同じ隊員からの証言だと謎の光が発生して、その場所に行つて見るとツカサ・ラグリーンが倒れており、彼の胸の辺りにロストログアが埋まつてるようになっていたのだ。と証言された。」

これを見た2人は信じられないという顔になった。

「リンディさん！？これって…？」

2人の様子を見てリンディはやっぱりかとつぶやいて、2人に説明し始めた。

「簡単に言つとその隊員がロストログアと同化しちゃったて事なのよ…」

リンディは静かにそう言った。

「ロストログアと…同化？…そ、そんな事が…」

信じられない状況は変わらず、さらに驚きを隠せない。

「まあ…そう言う事よ。今回の頼みは彼について。」

リンディの言葉に2人はサッと上司の前に立った。

「そんなに固くなくていいわ。詳しい事はア スラに居るクロノに聞きなさい。」

リンディはさっきの資料と他の資料をまとめて、2人に渡した。「じゃあよろしくお願いしますね。高町なのは。フェイト・T・ハラオウン。」

そう言うとなのはとフェイトはビシッと敬礼をした。

「お任せ下さい！！」

ある静かな部屋、中には消毒液の香りが広がってここが医務室だとわかる。

その医務室のベッドに寝ている一人の男がいた。

「う、うゝん。」

男は悪い夢でも見てるようにうなされいる。

「ツカサさゝん。起きてますか。」　　すると医務室の扉が開

いて、金髪の白衣を着た女性が入って着た。

「まだ寝てるわね…じゃあ今のうちに、状態を確認して起きましょ
う。」

そう言うとき彼女は様子を見ようと男に近づいた。

ムニユ……

だがその時に、効果的な音がした。

どうやら、寝ぼけた男性が女性の胸を触ったようだ。

「ほえ……?。」

女性は今の状況がわからず、放心状態だ。

「マシユマロ。」

男性は寝ぼけたまま女性を押し倒した。「キヤア!?。」

女性は声を出したが男は押し倒したまま、女性の胸をもみはじめた。

「ひゃう!…そ、そんな強く…ああん!。」

女性は足をピクピクと痙攣しながら、何とか這い出ようとしますが男はそれを許さず、さらに胸を強くもみはじめた。

「ら、らめえ…お、おかしくなっちゃう。」

女性は荒々しい息づかいで顔を赤くしてる。

もう抵抗ができる状態じゃあなかった。

「マシユマロ、マシユマロ。」

男は本当は起きてるように感じるが、正真正銘寝ぼけているようだった。

「おい。シャマル、あの男はどうだ?。」

そんな時おもむろに医務室の扉が開き、赤い髪の少女が入って着

た。

「ヴ、ヴィータちゃん！。」シャルは助けを求めるように、ヴィータに手を差し出した。

「な！シャル！？。」

ヴィータは今の状況を見て、驚きの言葉を上げる。

「んあ？……。」

そんな時だった。男が目を覚めたのだった。

男は頭が覚醒したらしく、周りの状況を見た。

（何これ？何で俺が女性を押し倒してるの？その女性は何故エロい声を出してるの？何故その横に少女が立ってるの？修羅場？）

男は混乱しながら何とか状況を頭の中で考えた。

「てめえ！シャルに何してやがる！！。」

だがそれよりも早く、ヴィータが怒りの形相で進みよる。

「な、何をつて……。」

男は弁解しようとしたが、ヴィータが思いつ切り男のことを殴りつけた。

「グビヤああ！？。」

男は吹っ飛んで壁に激突した。

「お、おい！大丈夫かシャル！？。」

ヴィータは心配そうにシャルに駆け寄った。「ハア…ハアち、違うのよ。ヴィータちゃん。」

シャルは息切れしながらも、ヴィータに説明し始めた。

「な、何が違うんだよ！。」

怒りながらヴィータは、シャルに聞いた。

「か、彼はワザとやったんじゃないの、寝ぼけただけよ。」

それを聞いたヴィータは目を大きく見開いて、吹き飛ばした男を見た。

「……マジ？。」

ヴィータはもう一回本当かどうか聞いてみた。信じられないようだ

った。

「うん…多分…」

2人はそのまま男を見て、一気に駆け寄った。

「や、やベー！シャマルとりあえず怪我の治療を！」

ヴィータがシャマルに治療を最速する。

「わかったわ！」

シャマルが急いで、治療魔法の陣を展開をした。

その時だった。

「な、なんだ！これは！？。」

驚いたヴィータの先には、男の胸辺りから光が出てる状況だった。

「こ、これはロストログア！？」

シャマルも続いて驚いた。どうやら男の胸に埋まってるロストログアが光だしたらしい。

「ぐわあああああああ！！！」

男は雄叫びに近い声を上げる。さらには身体中に赤黒い入れ墨らしき物が、浮かび上がった。

「やべえ！シャマル下がるぞ！」

この状況に危険を感じたヴィータが叫んだ。

「ぐがあああああああ！！！！！」

その叫びと共に男の身体に入れ墨が完全に回り、静かになった。だが2人はまだ緊張状態を解いていなかった。

「な、何？この禍々しい魔力は……」

シャマルは男から感じられる魔力に恐怖を感じた。

「シャマル…お前はクロノ艦長に通達。あと隊員を戦闘配置につかせる。」

ヴィータはシャマルにそう言つと懐から、小さいハンマーのようなキホルダーを取り出した。

「どうやらコイツ、やりそうな感じだ…。」

そう言つとヴィータの持っているキホルダーから、機械的な声が

でた。

「グラ フ・アイゼン！セツトアップ！」

そう叫んだヴィータの身体が赤い光に纏われ、光が消えたと同時に服がゴスロリのような服に変わっていた。

「鉄槌の騎士ヴィータ！行くぜ！」

手に持っているハンマーを男に向け叫んだ。

「グオオオ！」

男は叫んだ。今戦いが始まった。

ワ ルド・ザ・マジック2（後書き）

自分で自己満で書いてるので感想を書いてほしいです。

ワルド・ザ・マジック³（前書き）

³話目です。初めてのバトル入ります。

ワールド・ザ・マジック3

「ふう……。」

深い溜め息が大きなオフィスに広がった。

「全く…こんなに通さなきゃならない資料があるなんてね…時間が掛かるな。」

この愚痴を吐いている男性、クロノ・ハラウンは、どうやら束ねてある資料に嫌気を指してるようだ。

「えっと…あとはこの資料を読んで、上に報告して……」

資料を一つ一つ、纏めていく。見てるだけ大変そうだ。

「クロノ艦長……」

するとオフィスのドアが開いて、金髪の女性が入って着た。

「うん？どうしたんだシヤマル？そんなに慌てて。」

クロノは見えていた資料を置いてシヤマルにの方を見た。

「た、大変なんです！例のロストログアが埋まっているツカサ・ラグリーンが謎の暴走を……」そう言うクロノの様子が変わった。

「それは、本当か……」

クロノはつかみ掛かる感じで、シヤマルに言い寄った。

「はい！それでヴィータ隊員が戦闘に入りました！」

それを聞いたクロノが唇を噛んだ。

「わかった。シヤマルは結界班と医療班を呼んで配置につかせてくれ。」

それ言うクロノはコートをはおって立った。

「僕は指示を出す。」そのままクロノとシヤマルは急いでオフィスをでた。

「うらあああ……」

雄叫びと共にヴィータがハンマーを振りかぶった。

「グカアああ……」暴走した男はそれに合わせて拳を振りかぶっ

た。

火花が塵ながら男の拳とヴィータのハンマーがぶつかり合う。

「ウガアアア!!」しかし男の拳がヴィータのハンマーを押しつけた。

「ぬわぁ! まじかよ! 素手でアイゼンを弾き返した。」

ヴィータは吹き飛ばされたが、後ろにあつた壁に足をつけて男の方に跳んだ。

「まだまだ!! アイゼン! カートリッジロード!」

するとハンマーから拳銃の弾丸のようなものが、ガシャンと言つ音と共に出てきた。

「グオアアア!」

さつきとは逆の拳を振りかぶり、ヴィータを迎え撃つ男。

「くらえ! テートリヒシユラ クー!」

ヴィータはさつきよりも強くハンマーを握り、思いつ切り振った。

「グアアア!!」

さつきよりも強い衝撃に男は押される。

「おりやぁぁ!」

分配はヴィータにあがつた。暴走した男は後ろに吹き飛ばされた。

「よし! トドメだぁ!」

ヴィータはさらにハンマーを深く構えて

男の方に駆け出した。

「ギガアアア!」

倒れていた男が立ち上がり、向かってくるヴィータを睨みつけた。

「うおおおお!!」だがヴィータはそれに怯まず、ハンマーを振った。

ハンマーが男の顔に当たつた音が壁の反響で響いた。

「よし! 直撃!」

当たつた事にヴィータは確信したが、それは違つた。

「グルアア…。」

確かに男にハンマーは当たったが、全くダメージがないのだ。

「そ、そんな私の攻撃が効かない!?。」 ヴィータは攻撃が効かない事に驚いた。

男はその隙にヴィータの腕を掴んで投げ飛ばした。

「うわぁ!！」

投げ飛ばされたヴィータは何とか空中で一回転して、地面を滑った。

「く、くそ!まだ…。」 ヴィータは体制を立て直して前を見た。

「な……消えた?。」 だが目の前にさっきまで戦っていた男がいないのだった。

「どこ行っ……。」

ヴィータはそのセリフを言う前に地面に叩きつけられた。

「がはぁ!?!。」

いつの間にか後ろにいた男がヴィータの頭を掴んで、叩き落としたのだ。「グラアアアア!！」

男は雄叫びを上げて、さらに狂ったように暴れ出す。

「ち、チクシヨ!一撃でこれかよ。バリアジャケットが全然意味ねえ!！」

ヴィータは立ち上がるとするが、さっきの攻撃で軽い脳震盪を起こしたようだ。

「や、やべ!このままじゃあ…。」

ヴィータはこの状況を危険だと感じた。

その時反対側の廊下から沢山の足跡が聞こえた。

「いたぞ!みんな準備しろ!。」

どうやら隊員達が着たようだ。

そして隊長の言葉と同時に他の隊長が、杖を構えた。

「撃てええ！」

その言葉と共に隊員達が一斉に魔法攻撃を放った。

「よし！やったか！？」

隊長が全部の攻撃が当たった事を確認し、ガッツポーズした。

「ぐ、グオオオオ！！。」

だが男には効いておらずさらに雄叫びを強くした。

「な、なんだと！？」

隊長は驚きの声を上げた。

だが驚いている時間は男は与えなかった。

「ウガアアア。」

声を出すと共に左手に赤い魔力が集まる。

「な！？やべえ！！逃げろ！！。」

ヴィータは叫んだが、それは間に合わず砲撃魔法が隊員達に当たる。

「うわああああああ！！。」

隊員は防御をはっていたが、それでもかなりのダメージを負ってしまった。

「グルル……。」

男は砲撃魔法を放って黒こげにした廊下を進もうとする。「くそ！動けよ！私の身体！これ以上アースラで好き勝手に暴れさせるかぁ！。」

ヴィータはガクガクと震える手で立ち上がろうとするが、立ち上がる事が出来ない。

そんなヴィータの頭にポンと手が置かれた。

「え……？。」

ヴィータは驚いて上をみると、そこにはピンク色のポニーテールをした髪の女性が立っていた。

「待たせたなヴィータ。」

その女性は凜々しい感じでとても強さを思わせる目をしていた。

「し、シグナム!。」ヴィータは女性の名前を叫んだ。

「あとは私に任せろ。」

シグナムは鞘におさまった剣を抜いた。

「グルルル……」

男はシグナムに気づいたようで、こっちの方に向いた。

「行くぞレヴァンティン。カートリッジロード!!。」

今度はシグナムの剣から拳銃の弾丸がガシャンと言っ音と共に出てきた。

「グカアアア!!。」

男は一気にシグナムの所に走り出した。

「行くぞ……」

シグナムは突っ込んでくる男に対して剣を向けた。

「紫電……一閃!!。」

一瞬の閃光と共にシグナムの放った攻撃が男を吹き飛ばした。

「グカアアアアアアアア!!。」

男は回転しながら地面に叩きつけられた。

「……ふう……」

シグナムさんは息をはいて、剣を下げた。

「グカア……」

男は思いつ切り叩きつけられたはずだが、それでも立とうとしていた。

「……なんだ。まだやるか……」

シグナムは再び剣を構えた。

だが男から赤い入れ墨が消えて、元の状態に戻った。

「……終わったのか……?」

ヴィータはそう自分に言い聞かせる感じで、そうつぶやいた。

「そのようだ……。」「シグナムも剣を収めて言った。

これがこの戦いの最後だった。

ワ ルド・ザ・マジック3（後書き）

どうでした？初めてのバトルだったので、至らない事があつたら言
ってください。

ワルド・ザ・マジック4（前書き）

もうこの小説はエロのギリギリまで頑張っ
て行こうと思います。あ
と1000人以上も見てくれてありが
とうございます。

ワールド・ザ・マジック4

「あ！起きましたか、ツカサさん。」

穏やかな声が聞こえる中、ベットに寝ていた男性ツカサは目を覚ました。「えっと……ここは？……あなたは？。」ツカサはボーとした頭の中でシャマルに質問した。

「私はシャマル。ここは時空艦アースラで、今あなたがいる所は医務室ですよ。」

シャマルがそう言うのとツカサは、少し黙って考えた。そして思い出したように言った。

「確か……さっき……俺があなたを押し倒してたような……。」

それを聞いたシャマルが顔を赤くして、指をいじりはじめた。

「えっと……確かにそうですね……。」

シャマルの反応を見てツカサは驚いた顔をした。

「もしかして俺……あなたにエッチな事、してしまいましたか？。」

シャマルはさらに顔を真っ赤にして手をブンブン振った。

「そ、それはしていません！」

するとツカサは目を見開いてビックリした感じになった。

（何だと！あんな事になつていて何一つしてないだと！？こんな綺麗な人相手に、勿体無い！！。）

ツカサはそう思うとガバツと起き上がった。

「ど、どうしたんですか？。」

いきなり起きたツカサにシャマルは驚いた。

「シャマルさん………是非続きを！！。」

ツカサはそのセリフと同時にシャルルを押し倒した。

「ひゃあ！つ、ツカサさん駄目！」シャルルはツカサを何とか押し退けようとするが、ツカサはそれよりも早くシャルルの胸を揉みだした。

「ま、また！…あう！…。」

ツカサはもう目が何かに取り憑かれているようにしか見えなかった。（ぬわー！何という弾力だ！やべえハンパないっす。）

ツカサはそのままシャルルの服のボタンを取った。「な！そ、そこまで！？。」

ツカサはさらけ出しになった、シャルルの下着ごと胸をもんだ。

「あん！…や、やめて…！。」

シャルルは身体中がビクビクと震えて声も上手くでない状態だ。

「しゃ、シャルルさん、可愛い〜。」

この男には理性と言う物が無いんだろうか。

そう思わせるほど、今のツカサは本能が剥き出しだ。

「や、やだ…変な感じする…むぐ！？。」不意にシャルルの唇が塞がれた。

ツカサがキスをしたのだ。

ヌチャヌチャといやらしい音をたてながら、シャルルの唇を濡らしていく。

「んむ…ちゅる…じゅる…ぬちゅ。」

シャルルはツカサのキスに完全に力が抜けて、目がトロンとなってしまうた。

「シャルルさん……行きますよ？。」

ツカサは一旦唇を放すと、手を太もみに置きそのままスカートの中

に手を入れようとする。

「!?!?だ、駄目え〜〜!?!!。」

シャマルは最後の力を振り絞ってツカサを吹き飛ばした。

「ほげえ!?!。」

いきなりの事だった為に思いっ切り吹っ飛んでしまった。

「シャ…シャマルさん…?。」

ツカサは吹っ飛ばされた事にあっけにとられた。

シャマルは服の乱れを直して、恥ずかしそうに俯いたまま喋った。

「だ、駄目ですよ。私達はそ、そんな関係じゃないんです。」

それを聞いたツカサは目を点にして驚いた。

「え?で、でもあんな事になっていたから…エッチな事をしても良
いって事なんじゃ…」

その言葉にシャマルはブンブンと頭を振った。

「あ、あれはアナタが寝ぼけてなってしまった事故です!。」

それを聞いた瞬間ツカサはダラダラと汗を流した。

(え?...何?じゃあ俺は勝手にシャマさんが同意してたって勘違い
してたって事!?!。)

顔が真っ青になり、さっきしてしまった事をものすごく後悔した。

「すすすいませんシャマルさん!!勝手に勘違いして…本当にごめ

んなさい!!!。」

ガンガンと床に頭を打ちつけて、土下座をしまくる情けない男。みんなこんなふうになっちゃ駄目だよ?。」

「そ、そんなに謝らないで。私は気にしてないですから。」

ツカサが床に頭を打ちつけて、シャマルがそれをやめさせてる図式が完成してる時、医務室のドアが開いた。

「君達は何をやっているんだ?。」

入ってきたのはア スラの艦長、クロノ・ハラウンとその他の女性5人だった。

「あ、クロノ艦長!それにみんなも...。」シャマルもツカサも人が入って来たため、ドアの方を見た。

(うわゝ艦長ってここで一番偉い人じゃないか...それにしても後ろの女性達、可愛いな。)

女の子の事しか頭に入らなかったみたいだ。

(まで!?あの子はまさか高町なのは!?実物だぜ!すっげー可愛い!!!しかもその横の子は執務官の若手で優秀なフェイト・T・ハラウンじゃないか!やべー可愛いなゝスタイルめっちゃいい!触りてゝ。あとあの短髪の女の子可愛いなゝ小ぶりな感じがたまらわゝ。さらに後ろの女性はやばいなゝ美人な上にボインボインのおっぱいだ!揉み揉みしてゝ)

...お!横のチッコい子供!さっきの子か?よく見るとめっちゃ可愛

いぜ！ロリもいいよなロリも……ハアハア……）
ツカサがそんな事を考えて薄ら笑いを浮かべていると、クロノがゴホッと咳払いをした。

「えっと…ツカサ？話しても大丈夫か？。」

クロノの言葉にツカサは我に帰った。

「あ！…その…いいですよ。」

そそくさと前を向きクロノの話を聞く体制を取った。

「まず先に…君はさっきの事を覚えているか？。」

さっきの事と聞きツカサはシャルルを押し倒してた事を思い出す。

「あ、あれは事故なんです！ワザとじゃなくて、決してシャルルさんが美人で可愛くてスタイルもすっげー良いから押し倒したんじゃないありません！！。」

どうやらツカサはシャルルを押し倒した事を咎められるのではないかと思っただけらしい。

「いや…違うんだが…。」

クロノは頬をかきながら困った。
後ろの女性達も呆然としていた。

シャルルに至ってはツカサのセリフで顔を茹でタコのように真っ赤になった。

「えっと…違うのですか…？。」

それを聞いたクロノと後ろの女性達はコソコソと喋り出した。

「やはり彼は暴れてた時の記憶が無いようだ。なのは達はどう思う？。」

それを聞くとなのは達は手を顎に当てて考える仕草をとった。

「本当だと思うよ。」

嘘をついてるようには見えないし…。」

その言葉にフェイトがうなずいた。

「そうか？あたしは信用できないが？。」

そう言うのは、5人の女性の中で、一番子供のヴィータだ。

「駄目やろヴィータ。まだわかってもないのに人を疑うのわ〜。」
短髪の女の子は人差し指をヴィータに向けメツと言った。

「け、けどよ…はやて〜。」

ヴィータは顔を膨らませて、はやてと言う少女に訴える。

「まあ…今考えてもしかたあるまい。もし何かあったら私が何とかする。」

5人の女性の中で一番背が高い女性シグナムは言った。

（……一体皆さんは何を話しているんだ？。）

ツカサはコソコソ喋り出した5人を正坐しながら見ていた。

「なあ…もしかして君は今の自分の状況をわかってないのか？。」

そしたら突然にクロノが話しかけてきた。

「え？…状況…？。」

ツカサは言われた意味が解らず、首を傾げた。

「……本当にわかってないのか…。」

クロノは目頭を押さえて、ため息をついた。

「えっと…俺はどうなってるんですか？。」

ツカサはクロノの様子が気になって、恐る恐る聞いてみた。

「まず…君の胸を見てくれ。」

ツカサはそう聞かされるとYシャツのボタンを取って胸を見た。

「な、なんだ…これ？。」

ツカサの胸には赤い宝石のようなロストロギアがうまっていたのだ。

「君の胸にはロストロギアが埋まっているのだ。」

ガクツと膝をついてツカサはうなだれた。

（やっぱりショックは大きいだろうな…。）

クロノはツカサが落ち込んだので彼の精神が大丈夫か心配だった。

（くそおおおおお！こんなんじゃ女性を抱く時、キモイと思われ

る。どうしよう。これじゃあ一生、童貞だよ!!。」

彼は本当にこの状況をわかっているのかはわからなかった。

ともあれ、これから彼、ツカサ・ラーグンの物語が動き始めた。

ワールド・ザ・マジック4（後書き）

次からどうなるか、気になる人は聞いてください。

ワルド・ザ・マジック5（前書き）

取りあえず主人公がどうなるかです。

ワールド・ザ・マジック5

「さて…ではこれから君、ツカサ・ラーグン三等空士のこれからの待遇を教える。」

オフィスの執務室の中、ツカサとその他の女性6人と艦長のクロノ・ハラオウンが話を初めた。

「とりあえず、今の君の状態は把握したか?。」

クロノはツカサに今の状況を理解したか確認を求めた。

「えっと…とりあえず、俺がロストロギアを搜索していたらいつのまにかロストロギアが俺の胸に取り込まれて、そしてそれを調べるために俺はア スラにいますと…」

ツカサはオドオドとしながら、答えた。

「まあ大まかに言えばそうだろうが…細かく言えば…」
クロノは資料を手にとって説明し始めた。

「君に起きた事件…まあロストロギアと同化してしまった事だが、これはかなりの珍事件だ。時空管理局でもかなり問題になっている。そしてこのロストロギアは僕達、ア スラ組とそこに居るフェイト執務官がおっていた事件だったんだ。」

ロストロギアが発見されて終わったように思えたが、君がロストロギアと同化したため事件は継続され、ア スラ組とフェイト執務官は上の命令により、ツカサ・ラグーンを監視、調査対象に認定してこの問題を解決するようにと言われたのだ。」

はいはい。長々とした説明ありがとうございます。

つまりロストログアにまだ謎があるか、もしくはツカサに謎があるかわからないのであんだ達で調べて、危険かもしれないから監視も含めてね〜と言う押し付けだ。

ツカサに対しては研究対象、あとは危険物扱い。つまりはア スラはツカサにとって牢獄である。

「えっと…OKっす…理解しました。」

ツカサはなんか話を聞くのが面倒くさいなっいたらしくとりあえずうなずいた。

「さてと、そう言うわけで君は監視と調査対象者になっているが、表向きはア スラの一局員として働いてもらう。」

クロノはそう言々とシャルマルに何か指示を出した。

ペコと頭を下げたあと、シャルマルはツカサの所に向かった。

「その…っ、ツカサさん…コレを…。」

シャルマルは俯いたままツカサに袋を渡した。

（うつ…やっぱりシャルマルさん、あんな事したのまだ怒ってるのかな〜？）

ツカサはガクツと肩を落とした。

それと同時に貰った袋が気になった。

「あの〜クロノ艦長…この袋は何ですか？。」

袋を前にツカサはクロノに質問をした。

「その袋には魔力を抑える薬が入ってる。」

ツカサは袋を開けてみて確認した。
確かにカプセルらしき薬が入ってた。

「魔力を抑える薬ってどう言う事ですか?。」

クロノは一回息を調えて話をする体制をとる。

「君はさっき、暴走したんだ。多分ロストロギアの影響でね…そしてこれがその時の映像だよ。」

リモコンを出してピツと音と共にモニターが現れてた。

そのモニターには赤黒い入れ墨のがあるツカサが暴れている映像がながれた。

「えっと…マジで…?。」

ツカサはその映像に驚き、啞然としてしまった。

「まあ…そう言う事だ。ロストロギアが君のリンカーコアに影響して暴走したんだ。だからその薬は急激に上がってしまう魔力を抑える薬なんだ。」

理解した。簡単に魔力が上がってしまい暴走しないように飲めということだ。

喘息の薬みたいな物だ。

「わかりましたが…俺はこれからどうすればいいのですか?。」

その質問にクロノがうーんと考えた。

「問題はそこなんだ。監視なんだが君一人を行動させるのは危ない

し、かと言って見張りをつけてももし暴走した時に並みの魔道士じや 危険すぎる。」

つまりは、俺を監視したいけど危険だからどうすればいいかわからないと言う事だ。

「はいクロノ艦長。うちにいい考えがあるよ。」

すると後ろにいた短髪の少女が手上げて声を上げた。

「なんだい。はやて何か方法があるのか?。」

クロノは、はやての方を向き話を聞き始めた。

「彼、ツカサさんをうちの家で面倒みればええんや。」

はやては笑顔でそう言い切った。

「な!?!はやて、どういう事なんだよ!?!。」

その提案にヴィータが生きよいよく反論した。

「いい?ヴィータ。家ならア スラや他の人に迷惑掛からんやろ? それに何かあったらシグナム達もおるし、ツカサさんも家からア スラに出勤する形になるだろうしな。」

なるほど、すべての問題が解決された。だがまだツカサは少し困ってた。

「あの、はやてさん...? 本当にいいんですか? 家族の人達にとか迷惑は掛かりませんか?。」

はやてはニコツと笑顔で答えた。

「ええんですよ。うちの家族ならここに全員おるしな。」

そう言うその後ろにいた、ヴィータとシグナムとシャル、その横にいた犬が反応した。

（え…もしかしてあの人達が家族？……………じゃあもしかして、はやてさんの家でお世話になれば……ハレム？！！。）

ツカサはカツと目を見開いた。端から見るとキリツとしているが、ツカサの頭の中では裸になったシグナム達を想像…いや妄想していた。

「よろしくお願いします！」

とてもいい返事の敬礼だった。

「みんなもそれでええな？」

はやてが後ろにいるヴィータ達に了解を求めた。

「はい。主はやてがそう言うのであればそれに従います。」
シグナムははやての命令に従うように頷いた。

「……………」

ヴィータはムスツとした顔で認めないぞというオラを出している。

「は、はい…私は構いません。」

シャルは肯定はするものの、ツカサと顔を合わせず赤くなっている。

「じゃあ ツカサさん。これからよろしくお願いします。」

はやてはツカサに手を差し出した。

「あ！よろしくお願いします。はやてさん。」

ツカサは照れくさく手を差し出して握手をした。

「ははは。ええんですよ。ツカサさんは階級的には下ですけど、年上だから敬語じゃなくても。」

はやてはツカサに首を少し曲げ笑った。

「え…？でも。」

ツカサは戸惑ったがはやてはそのままの笑顔で言った。

「これから一緒に暮らすんですから、そんなに固くならなくてええんよ？。」

なんていい子なんだろう。

やばいな。なでなでして抱きしめたいな。

「じゃあ…はやて。」

これからよろしく!」

ツカサが改めて挨拶をした。

はやてはそれに笑顔で答えた。

「はい!こちらこそ。」

これで取りあえずこの問題は解決したようだ。

「じゃあ…そう言う事らしいし…あとは任せくれ。」

話が終わったタイミングでクロノはツカサに言った。

「あとは…この2人と自己紹介でもして今日は解散だな。」

クロノが言うとなのはとフェイトが前に出てきた。

「えっと…ツカサ・ラグーン三等空士です。よろしく願います
!。」

出て来た2人に反射的に敬礼をして自己紹介をした。

「航空戦技教導隊、教官。高町なのは一等空尉です。よろしく願
いします。」

それに合わせてなのはが挨拶し、

「本局執務官。フェイト・T・ハラオウンです。よろしく願
います。」

フェイトも続けて挨拶をした。

（うは！やっぱり可愛いな〜敬礼するところがまた、たまらんわ〜
なでなでして、お持ち帰りして〜）

ビシッと決めたはずだったが相変わらず考えてる事はこんな事だった。

まあ取りあえずこれから、ツカサのア スラでの生活とみんなとの
交流が始まった。

ワルド・ザ・マジック5（後書き）

最初はのほほんといきたいと思います〜

ワールド・ザ・マジック6（前書き）

いやゝ疲れました。少し更新が出来るかもしれません。

ワールド・ザ・マジック6

「いや、この味噌汁美味しいね。」

ツカサは味噌汁をすすって感想をのべていた。

今、食卓ではやて一家とツカサが料理を食べてたいるのだ。

「ありがとうございます、美味しくって言うってもらって嬉しいです。」

はやては料理の事を褒められて嬉しそうだった。

「いや、すごいよ、可愛いうえに美味しい料理も作れるなんて、はやてはいいお嫁さんになるな。」

ツカサの台詞にはやてはカアと顔を赤くした。

「そ、そんな事言われるんは恥ずかしいですわ。」

少し照れくさそうにはやては手を降った。

「照れなくてもいいよ、本当の事だしね。」

ツカサの真っ直ぐな褒め言葉にはやてはさらに顔が赤くなりうつむいた。

「もう、お世辞が上手いですな。」

照れながらも嬉しそうな感じではやては答えた。

この感じから食卓がいい状況であると思われるがそれは違う。

「……………」

ヴィータはムスツとした顔のままご飯をがつついている。

「……………」

シグナムはツカサの事をチラチラ見ながら警戒してる状態でご飯を食べてる。

「……………」

シャマルはツカサをチラチラと見ながら赤くなって黙りながらご飯を食べてる。

「……………」

ツカサの後ろにはツカサをジ　と見張っている犬、ザフィーラがいた。

簡単に言えば他のみんなは、ツカサの事を気にしたり警戒しりしでいてピリピリしているのだ。

ツカサとはやてはその中平然と会話をしているので驚きだ。

「あ！ツカサさん。お代わりはいりますか？。」

はやてがツカサにお代わりをいるか聞いてみた。

「おう！お願い。お腹すいててさ」

笑顔でお代わりを要求するツカサ、それは意外と子供っぽかった。

「わかりました。リインお代わりお願い」

すると奥のほうからスリッパのパタパタと言う音が聞こえて来た。

「はいです。ご飯のお代わり持って来たです」

奥からは青い髪をした女の子、リインが出て来た。

「おおーありがとうリイン！」

ツカサはリインがご飯を持ってきた事が有り難いと思い、頭を撫でた。

「あうーそ、そんなたいしたことはしてません。」

頭を撫でられて照れたのか、リインは顔を赤くした。

「いやいやーそんな事ないよー。」

可愛いといいながらさらにリインの頭を撫でる。
それに恥ずかくなったか、リインはパタパタと台所に行ってしまった。

（いやー最高だなー料理は美味しいし、可愛い女の子はいっぱいいるし、俺は今天国にいるよー母さん。）

全くもって幸せの真っ只中のツカサだ。

この状態はまだ続くだろう。

そして翌朝。いい天気の中、はやて一家とツカサはア スラに出勤した。

「いやー今日もいい天気だねーヴィータ。」

横にいたヴィータに話しかけたのだった。

「……………」

しかしヴィータはツカサの方に見向きもせず歩いている。

「あ、あれ？無視？」

ツカサは目を点にしてヴィータの様子に焦った。

「おい…。」

そしたらヴィータがツカサに呼びかけた。

「あたしはお前の事を信用した訳じゃあない。それに私は上司だ！敬語使え！」

そう言々とスタスタと早歩きではやての方に行ってしまった。

(……わ い…嫌われてるわ。)

心の中で泣いているツカサはさて置き、はやて達は自分達のオフィスにの前に来た。

「さてと、ここから別行動や。ツカサさんは局員扱いなので、アスラを普通に回っても構いません。」

はやてはそれだけを言つと、シグナム達と一緒にオフィスに入つた。

(…うーん…廻つてもいいと言われてもどうすればいいんだろ。まあ監視みたいのをつけれなかったただけマシかな？女の子の監視だったら大歓迎だけど…)

ここはアスラの中なので、クロノ艦長がせめて艦にいる時だけは監視をはずしてもいいと考えてくれたようなのだ。

(…考えても仕方ないか。取りあえずブラブラしよう。)

クルツと反対方向に向きツカサはゆつくりと歩きだした。

そして歩いているとある部屋から何だか爆発音らしい音が聞こえた。

「なんか凄い音だな……訓練室からだな。」その音は前にあった訓練室から聞こえてきたようだ。

「うん？音がやんだな…入ってみるか。」

少し音が止んだので好奇心からツカサは中に入ってた。

「うん？誰ですか？。」

中には頭をタオルで拭いている女性。白い魔道士の格好をした高町なのはがいた。

（うおおお！高町なのはだ！やったぜラッキー！。）

ガッツポーズを小さくやったツカサ。

なのははタオルをとって入って来た人を確認した。

「あれ？…確かツカサさん？。」

入って来た人が意外だったのか、首を傾げたなのは。

「あ…はい。すみません。凄い音が聞こえたので気になって…。」

ツカサは少し身を小さくさせて頭をかいだ。

「そうなんですか？別に気になくてもいいですよ。私はただ自主トレをしてたんで。」

どうやらこの訓練室で魔法の練習をしていたみたいだ。

「……えっと……なのはさん……」

するとツカサはなのはに訪ねるように話しかけた。

「何ですか？」

何かを訪ねようとするツカサに何だろうなと思いながら、聞き返した。

「その…良かったら俺に訓練をさせて貰いませんか？」

思いつきり言った気迫になのはが押されたが、その言葉にちょっと驚いた。

「ツカサさん？訓練って…いいんですか？」

確認を取る感じでツカサに呼びかけたがツカサはビシッと敬礼をした。

「構いません。俺なのはさんに憧れいたので！」

ツカサの言葉に少しニコツとなったなのはがタオルを置いて再び、ツカサに向き直った。

「わかりました。では準備をしますから、ツカサさんはデバイスを展開させてください。」

それを聞いてツカサは自分のデバイスを展開して、そのデバイスの

杖を握った。

（よっしゃ！！なのはさんの訓練を受けられる！しかも一対一で！
やっベーテンション上がってきた。そしてこのまま訓練をしていき、
危ない上司と部下の關係に：グヘヘ。）

まあこんな事だろうとは容易に想像できるな。

取りあえずそんな事でなのはの訓練が始まった。

「じゃあ：訓練はここまでにしますね。」

一時間ぐらいのあとその訓練は終わった。

ツカサはそれと同時にグタアと倒れた。

（つ、疲れた：まさかこんなに大変だったなんて：）

生気がぬけたぐらいになったツカサは足は生まれたてのバンビみたい
になっていた。

「じゃあ私は着替えて行きますから、これで。」

その言葉と共になのはが訓練室の奥にある着替え室に入ってた。

「……はあゝ本当につかれたな。」

ベタついた服をパタパタとさせる。

「そういえばここにシャワー室があったな：汗かいたし入るか。」

ツカサはゆっくり立ち上がり、シャワー室に向かった。

「さ〜とシャワーシャワー。」

ガラスと扉を開けてシャワー室に入る。

「うわぁ!。」

すると下にあつた石鹸に足を滑らせ倒れてしまった。

「…あいたた…あれ? 変だな。なんか柔らかい感触が…」

倒れたはずなのに柔らかい感触をツカサは感じた。
それもそのはず、倒れた先にはタオル一枚の高町なのはがいたのだから。

「……………はい?。」

さすがにこの状態にはツカサも驚き抜けた声をだした。

「……………。」

なのははこの状態に顔を真っ赤にして身体中がプルプル震えていた。

「あ、あはは…いい身体してますね…」

何故こんな時にそんな言葉を言うんだこの男は。

その言葉でなのはハッキリと意識を取り戻した。

「き、きやああああ!!。」

叫びをだしバシッとツカサに平手打ちを咬ましたのはは、そのま
まシャワー室から走って出てってしまった。

「……………まじかよ…………。」

ツカサは啞然とシャワー室に取り残された。

どうやらツカサはまた気まずい状態にしまったようだった。
一体どうなってしまったのか。

ワ
ルド・ザ・マジック6（後書き）

ツカサ

「あ あやつちまつた〜」

ワールド・ザ・マジック7（前書き）

更新早く出来ました。

ワールド・ザ・マジック7

「ツカサ…体調は大丈夫?。」

そうやってツカサを気遣うのは執務官のフェイト・T・ハラオウンである。

「はい!全然大丈夫ですよ!!。」

フェイトの気遣いに感動しながら敬礼を綺麗に決めるツカサ。

「良かった…じゃあ行こう。」

安心したように言うとフェイトは前に向いて歩き出した。

それに合わせてツカサも歩き出す。

(いや〜フェイトは優しいな〜それに可愛いし、あの黒に身を包んだ制服に綺麗な金髪、そして素晴らしいボディ!グへへめっちゃいいケツだな〜。)

前を歩くフェイトのお尻を見ながらニヤニヤするツカサ。
端から見たら単なる変態である。

「ツカサ!着いたよ。」

そのまま歩いているとある部屋の前で止まった。

「えっと……ここがそうですか?。」

どうやらこの部屋に用があるようだ。

「そうだよ。ツカサのロストロギアはまだ謎も多いし、身体だって

安全性も確かめないといけないしね。」

フェイトは優しい口調でツカサに問いかけた。
ツカサはロストログアと同化しているため、こうして定期的に検査をしなければならない。

フェイトはその付き添いである。

「じゃあ行ってきます!。」

別にいい事なのに、ツカサは敬礼をした。
その様子にフェイトは笑みをこぼす。

「ふふふ、行つてらっしゃい。」

フェイトはバイバイと手を振ってツカサを見送る。

その状況にツカサは、新婚夫婦みたいだなと相変わらず妄想前回であつた。

（へへへ〜フェイトが嫁だったら最高だな〜お帰りアナタ、ご飯にする? お風呂にする? それともワ・タ・シ? …グへへへへお前に決まってるだろー! キャーツカサのエッチ! とかになって、そのままズコンバツコン!。）

まだ自分の世界にいるツカサはヨダレを流しながら上の空になっている。

「あの〜ツカサさん? いいでしょうか?。」

その時に検査をしようとしている女性が恐る恐る話しかけた。

「あ! はい! すいません!。」

元の状態に戻ったツカサは、ヨダレを拭いてビシッと女性の方に向いた。

「じゃあ検査します。上だけ脱いでくださいね。」
ツカサはその言葉通りに上着をぬぎはじめた。

（いやゝ女性に見てもらうのは緊張するなゝでも…もしかしたら、いい身体ですね…私興奮してきました。とか言ってそのまま女性はおもむろに服をぬぎはじめ…ズッコンバツコンファイヤー!!!。）
またしてもツカサは妄想前回になってしまった。

この男は一日に何回妄想をしているだろうかと思う。

「そのゝツカサさん?。」

女性はまだ固まったツカサに声をかけた。
結局検査が終わる時間は、伸びてしまった。

「ツカサ…検査どうだった?。」

検査が終わわり部屋を出るとフェイトが笑顔でまっついていてくれた。

「いやゝ特に問題はないみたいですよ。」

その笑顔に心打たれたがそれを隠すように頭をかく。

「それじゃあ検査は終わったから…今度はこっちに付き合ってくれる?。」

検査の付き添いのフェイトだが他にも用事があり、この時空管理局の本局にある無限書庫と言う世界の全ての本がある所に行きたいようだ。

「はい!フェイトさんの願いなら銀河の果てまでも!。」

本日三回目の敬礼を決めるツカサ。

「ありがとう。じゃあ行こう。」

それで再び歩き出すフェイト。

ツカサもすぐ敬礼を止めてついて行く。

「あの〜フェイトさん…無限書庫には何の用事があるんですか?。」

歩き出した時にツカサはフェイトに対しての質問をしてた。無限書庫はかなり凄い場所だ。

行くなって事は何か重大な事があると思い、ツカサは気になったみたいだ。

「えっとね…無限書庫には知り合いが居てね、挨拶もしたくて…でも一番の用事はツカサのロストログアを調べるためかな。」

つまりはツカサに同化したロストログアを調べるために、無限書庫に行くが知り合いにも会いたいと言う訳である。別に説明はいらないが念の為に言います。

「なるほど…それにしても、ロストログアがどんな物がまだ分からなかったんですか?。」

ツカサのもう一つの質問にフェイトは困ったように答えた。

「うん…そうなんだよ。実際のところ、そのロストログアが一体どんな物かはまだわかってないんだよ…。」

頭をかかえながらその事を考えるフェイト。
本当に行き詰まっているようだ。

「まだ…何もわからないのか…何なんだろうな、このロストロギア。」

自分の上着を開けて胸を確認する。

ロストロギアは相変わらずツカサの胸に埋め込まれ鈍い光を発している。

「でも名称は…わかってるんだ。」

そう言つてフェイトはゆっくりとそのロストロギアの名称を答えた。

「通称… ビースト。」

ビースト。これがツカサに同化しているロストロギアの名称のようだ。

「ビーストか……。」

ツカサはロストロギアをに触れて言った。

そして二人はそのまま無限書庫に向かった。

しかし二人は知らなかった。

今、無限書庫は何者かに攻撃されているとは。

「ぐう……。」

お腹の血を押さえて倒れるのは無限書庫の室長、ユーノ・スクライヤだ。

周りは本が焼けていて、ユーノの以外の人が血をだし倒れている。

前には大剣を背中に背負ってマントをつけているギザギザ頭の男が立っていた。

「ふむ…これか…探していた本は…。」

男は落ちていた本を拾い上げた。

「く…君は何者なんだ！何故こんな事をする！。」

ユーノは立てない身体を引きずりながら、大剣を背負った男に言い放った。

「貴様に名乗る名前はない。俺はただ…ロストログアのビーストが書かれているこの本が欲しかっただけだ。」

男は本をしまつて無限書庫を出ようとする。

「ま、まて！逃がさないぞ！！。」

ユーノは倒れたまま手をかざした。

その手から魔法陣が展開される。

「チエーンバインド！！。」

そこから緑色の鎖が出てきて男を襲う。

「遅いな…。」

男は大剣をとり、向かってきた鎖を一撃でなぎはらう。

「な！?。」

ユーノは驚いた。自分の魔法がたった一撃でなぎはられた事に。

「ぬるい。ぬるすぎる……そんなんだから簡単な妨害魔法で無限書庫の状況にも管理局は気付かないのだ。」

管理局の情けなさに溜め息でもでたような感じだった。そして男は大剣を上に向いた。

「さて…その男…俺の名前をしりたがっていたな?。」

倒れているユーノに男は冷徹な目をしながら話かけた。

ユーノはその男の気迫に押されて声を出せずにいる。

「俺はエリア・スクアル。この世界全てを支配する男だ。」

その言葉と共に無限書庫に爆発が起こった。

ワルド・ザ・マジック7（後書き）

次は久しぶりに戦闘です。

ワールド・ザ・マジック8（前書き）

最近の評価を貰ったりして、とても有り難いですね。これから頑張っていきます！

ワールド・ザ・マジック8

「だ、大丈夫ですか!?。」

ツカサとフェイトの二人は慌てていた。無限書庫に向かっていた所、その近くで管理局員達が倒れていたのだ。

「大丈夫。みんな命に、別状はないみたい。」

フェイトは倒れてた局員達の脈を測って確認をとった。

「そ、それにしても一体何があったんだ?。」

混乱しながらもツカサは何とか冷静を保とうとする。

「わからないけど…きっと何かがあったんだ。」

顎に手を添えて考える仕草を取るフェイト。

「取りあえず…このままじゃマズい。連絡を…。」

フェイトが連絡をしようとした時、向こう側から爆発音が聞こえた。

「うわぁ!ば、爆発!?。」

急に起きた爆発にツカサとフェイトも驚きを隠せなかった。

「あ、あつちは無限書庫がある方だ!。」

確かに二人は無限書庫に行くはずだったため、場所は把握してある。

フェイトに至っては何回も行っているから場所を間違えるはずはない。

「行きましょう！フェイトさん！」

ツカサがフェイトに呼びかける。

その言葉にフェイトは頷いて、二人は駆け出した。

そして今、無限書庫はある男の襲撃にあい炎上していた。

「まったく…無駄な手間を掻かせるな…」

その男は大剣を背中にもどした。そして本をマントの中にしまい、そのまま無限書庫を出ようとする。

「まあいいだろう…欲しい物は手に入った。」

ニヤリと微笑んだ男は、そのまま無限書庫の扉を開けて外に出た。

「フォトンランサー……ファイヤツ!!。」

男は横から聞こえた言葉にバツと横を向くと同時に大剣を抜いた。

剣にバチィと電気が当たる音と共に爆発が起きた。

（うひゃあ〜フェイト容赦ないな〜出てきた所をいきなり攻撃とは……。）

ツカサは面を食らった。フェイトはデバイスを起動させてバリアジヤケットを展開、すぐに魔法を発動し、出て来た男に目掛けて攻撃したのだ。

「ツカサ！アナタもデバイスを展開。戦闘体制になつて！」
フェイトは急いだ口調でツカサに言った。

それに慌てたツカサはワタワタとしながらデバイスを起動させた。

「……いきなりの攻撃とは……やってくれるな公務員……。」

煙の中から男の声が聞こえた。

フェイトとツカサはその声と共に戦闘体制をとった。

「時空管理局、執務官のフェイト・T・ハラオウンです！アナタがこの惨状を？」

フェイトは厳しくも冷静な口調で男に確認をとる。

「……そうだ……俺がやった。」

悪びれた様子はなく冷静にフェイトの質問に男は答える。

「そうですか……では、アナタを器物破損と襲撃、殺人未遂の現行犯で逮捕します。」

「くく……やってみろ……。」

フェイトの言葉に大剣を構える男。

フェイトもそれを見て、デバイスを男に向ける。

(……これは俺、下がってた方がいいな……。)

この状態にツカサはコソコソしながら後ろに下がる。

「行くぞ……公務員!。」

先に動いたのは男の方だ。地面を蹴り、かなりのスピードでフェイトにせまる。

「ふん!!。」

接近した男はフェイトを大剣で切りかかった。

だがフェイトはその攻撃に反応して、大剣の攻撃を横に跳んでよけた。

(おお〜すごいなフェイト!あのスピードの攻撃をよけた。)

後ろから観戦状態のツカサはフェイトの速さに感激していた。

お前も戦えよと思う。

「甘いぞ……公務員。」

その言葉を言った男は大剣を床にさし、それを軸にフェイトに回し蹴りを喰らわす。

「あう！」

フェイトはデバイスで防御をしたものの蹴りの衝撃で吹き飛ばされる。

「あ！フェイト！」

ツカサは吹き飛ばされたフェイトを何とか受け止めた。

「う…あ、ありがとうツカ…！！？」

ツカサにお礼を言おうとしたフェイトだが急に顔が赤くなった。

「あ、あれ？どうし…。」

ツカサは気になってフェイトに訪ねようとしたが、今の状態に気がついた。

ツカサはフェイトを受け止めたがツカサの手が胸を鷲掴みにしていたのだ。

（ぬおおおお！！なんだとおお！フェイトの胸を鷲掴みにしてしまった！だが、ありがとう神様！。）

ツカサは涙を出しながら神様に感謝をした。

そんな状況じゃないのにこの男のエロさはすごいと思う。

「どうした？終わりか？」

だがそんな事は長くは続かない。

フェイトは男の声に我に返り、再び男の方向にむかい立ち上がった。
(うつゝこんな状態じゃなかったらフェイトの胸を揉みまくって、
挟んでもらって、吸いまくるのに。)

名残惜しそうに手をワキワキさせるツカサ。
この状況をわかってないのかこいつは。

「いくよ…バルディッシュ！ハ ケンフォーム！！。」

フェイトは自分のデバイス、バルディッシュに命じた。

バルディッシュは形が変わり斧の形から鎌のようになり、黄色い魔力刃が出ている状態になった。

「ほう……。」

男はそれを見てニヤリと微笑み、大剣を振り回して再びフェイトに向けた。

「最後に言います。アナタは何者で、何故こんな事をしたんですか？。」

男に質問するフェイト。少しの気を抜かず、大剣を構える男は目を細くした。

「……俺の名はエリア・スクアール…全ての世界を統一する者だ…。」

そう冷たくだがどこか熱いような感情でエリアは答えた。

「もつと聞きたい事があれば…俺を倒して聞くんだな…。」

そしてエリアは明らかにフェイトに挑発するようにそのセリフを吐いた。

「……分かりました。アナタを倒して詳しい話を聞かせてもらいます！」

言葉を言い切る前に床を蹴り、一気に男に向かうフェイト。

「…掛かったな…。」

「え…?。」

フェイトがエリアの言葉に疑問に思った時だった。

ビタツとフェイトの身体が止まり、手足に青く光った輪っかが巻きついたので。

「こ、これはバインド？アナタ魔道士!?。」

エリアが使ったのはバインドと言って、相手の動きを止めるたりする魔法だ。

フェイトの動きを止めたのものこの魔法であり、エリアはフェイトが通ると思った道に仕掛けたようだ。

「俺は魔道士ではない……そうだな…魔道騎士とでも言ってくれ…。」

「

「ま、魔道騎士?。」

聞き慣れない言葉にフェイトがその言葉を繰り返した。

「そうだ…公務員…お前が地獄に行く時にの手土産として、覚えておくがいい…。」

大剣の上に構えるエリア。剣は赤くなり、まるで炎をとっているようだった。

「爆龍撃・火炎の型!!。」

振り下ろされた大剣。その瞬間、戦っていた所は炎に包まれた。

ワ ルド・ザ・マジック8（後書き）

次回をお楽しみにしてくださいね！

また見てなのは（＾o＾）

ワールド・ザ・ミュージク9（前書き）

全開の戦いがきついつすが頑張って書きました！

ワールド・ザ・マジック9

やられた。フェイトは目の前が炎で包まれた瞬間、目を閉じてそう思った。

(……………あれ?。)

だが一向にフェイトに炎で焼かれた感じはしなかった。

フェイトは目を開けて驚いた。

目の前には大の形でフェイトを守るようにツカサがたっていたのだ。

「だ、大丈夫か?…フェイト?。」

「ツ、ツカサ!?。」

今にも声がかすれて聞こえなくなりそうだった。
ツカサはそのままフェイトの方に倒れ込んだ。

「あ!ツカサ!?。」

フェイトは倒れ込んだツカサを何とか抑えた。

その時ビチャと言う感触を感じた。

フェイトは手の平を自分の顔の方に向けた。

「!…!…血!?。」

抱えた時にツカサの背中に添えられた手は、真っ赤な血がベツトリとついていた。

「へ、へへ…俺のシールドじゃ防ぎきれないから…こ、こっつするしか…。」

ツカサはフェイトを守ったさいに背中に傷を負ったのだ。そしてその傷はかなり大きい。

「そ、そんな…しっかりして!。」

身体を支えながら、フェイトはツカサに呼び掛ける。

「は、はは…フェイトに抱き締められてるなんて…ゆ、夢のようだ…。」

その言葉を最後にツカサは意識を失った。

「ツカサ?…ツカサ!?。」

フェイトは何度も名前を叫ぶが、全くツカサの返事は返ってこない。

「…何だ…お前はそいつに助けられたのか。」

炎の中から声が聞こえた。それはツカサに傷を負わせた男、エリア・スクアルだった。

「く……………!。」

フェイトはエリアが出て来たためツカサを壁に寝かして、エリアの方を睨みつけた。

「何だ？その顔は……俺を許さないとも？。」

フェイトは睨みつけたまま、デバイスのバルディッシュをエリアに向ける。

「フン……いいだろう……こい公務員……。」

その瞬間に床を蹴る音が二つ聞こえた。

フェイトとエリアは声を出しながら、互いの武器をぶつけ合う。

「はああ!!。」

デバイスと大剣の鏝迫り合い、エリアは気迫の力でフェイトを吹き飛ばす。

「う……!。」

吹き飛ばせたフェイト。空中で一回転して何とか床に着地した。

「サンダー……。」

フェイトは着地した瞬間に魔法陣を展開、エリアに標準を定める。

（……魔法の展開が早い!!……。）

エリアは吹き飛ばされながら魔法を発動させたフェイトに驚いた。だがそんな暇はないエリアは大剣を前に出し、フェイトの魔法に耐える体制をとった。

「スマツシャ　！！。」

フェイトの手から黄色い閃光と共に砲撃魔法が放たれた。

廊下に広がる爆発音と煙、フェイトは息遣いを荒くしながらエリアの方に目を向ける。

（…煙でよく見えないけど…や、やったかな？。）

エリアを倒せたかと確認をするためにフェイトはゆっくりと爆発が起こった所に近づく。

「すきあり〜！。」

すると後ろから声が聞こえた。

フェイトはその声に反応したが、遅かった。

多くの布に近い物がフェイトに巻きついた。

「な、何！？これは！？。」

フェイトは今の状況が判らず混乱した。布の向こう側にはまだ幼さが残る女の子が立っていた。

「へへん。捕獲成功！。」

その女の子は背中から布のような物が出ていて、それがフェイトの動きを止めていた。

「あ、アナタは！?。」

「えへへへ私はプリス・キアルアだっよん！よろしくね！」

キヤピキヤピとした動きでウイंकをするプリス。
見た目は十歳ぐらいにしか見えなかった。

（そ、そんな…いつの間にいたの？バルディッシュの認識結界は発動したままなのに!?。」

フェイトは後ろから出て来たプリスに驚きが隠せない。
プリスはそんなフェイトを無視して声を上げる。

「おゝいエリア生きてる?。」
プリスはエリアの名前を叫んだ。
すると煙がブワツと晴れて、エリアが出て来た。

「なんだ…来たのかプリス…。」

（!?そ、そんな!あの攻撃で無傷!?。）

フェイトの言う通りエリアは砲撃魔法を食らったはずだったのに、
無傷だったのだ。

「だって〜エリア遅いんだもん！早くしないと他の管理局の人間が来ちゃうよ〜。」

ブンブンと頬を膨らませながらエリアに怒るプリス。
エリアは溜め息を吐いてプリスの方に向かった。

「わかった…だがその前に…。」

そう言うときエリアは大剣をフェイトに向けた。

「コイツを始末する。」

エリアは冷たくそう言い放った。
あまりの感情のなさにフェイトは寒気を感じた。

（マ、マズい…早くこの布から抜け出さないと！。）

フェイトは力を込めて布を破ろうとするが、全く破れない。

「無駄だよ〜ん！その布にはある工夫が施されているから、簡単には脱出できないよ〜！。」

プリスはクルクル回転しながら笑みを全開で答える。

「そう言う事だ…公務員…終わりだ…。」

大剣に再び赤い閃光が集まり燃え上がる。

「爆龍撃…炎閃の型。」

放たれた技は炎が巨大な斬撃となりフェイトに迫る。

（ ……！！。 ）

フェイトは当たると思い、目を閉じた。

しかしその攻撃がフェイトに当たる事はなかった。

「なん…だと！？。」

驚きのエリアの先にはフェイトを守り、エリアの攻撃を弾いたツカサがたっていた。

「…っ、ツカサ？。」

フェイトは目を開けて目の前にいたツカサに驚いた。
だがツカサは姿は変わっていて、以前の赤黒い入れ墨が身体中にできている状態だった。

「うがああああああああ！！！！。」

雄叫びを上げるツカサ。ビリビリとした空気が廊下を震わせる。

「うにゃ〜！何あれ！？。」

プリスはワタワタと手を降って取り乱している。

「…うおおああああ！！！！。」

ツカサはそんなプリスとエリアに向かい、口から砲撃を放った。

「……プリス避ける！」

エリアはプリスの袖をひっぱり避けさせた。

ツカサの放った砲撃はまるで灼熱のマグマのように当たった所を溶かしていた。

（……流石にこれが当たったら只じゃすまないな……。）

ジュウウウウウと音を鳴らしながら廊下は赤くなっている。

そんな状態にエリアやプリスだけではなくフェイトも恐怖を感じた。
（す、凄い攻撃だ……破壊したんじゃない……溶かしたんだ。）

フェイトがそう思った時、ジリジリジリと警報が鳴る音が響いた。

「ちい……流石に管理局が気付いたか……プリス行くぞ！」

「ラジャ……！」

プリスはビシイと敬礼をしたあと、魔法陣を展開して自分とエリアを包み込む。

「……さてと……まさかやられたはずのはずの貴様に邪魔されるとは思わなかったが……。」

エリアは大剣をしまい、プリスの肩に手を置いた。

「じゃあな……公務員……また会う時まで。」

その言葉と共に魔法陣が光だし、二人は消えた。

エリアとプリスが去ったらツカサは動きが止まり、元の姿に戻った。

「ツカサ!。」

解放されたフェイトはツカサに駆け寄った。

そのタイミングで他の公務員達が来たのであった。

ワ
ルド・ザ・マジック9（後書き）

ツカサが珍しくマトモだった（
）

ワールド・ザ・ミュージック10（前書き）

ちょっと長くなりましたが出来ました。

ワールド・ザ・マジック10

「…あれ？…ここは？」

ツカサがいた場所は辺りが薄いピンク色に包まれた空間だった。

おかしいとツカサは思った。

自分はフェイトと一緒に居て、時空管理局の本局にある無限書庫に向かっていたはずだ。

そして無限書庫には謎の男、エリアが居てフェイトと戦闘になった。それでフェイトがピンチになって、俺が盾になって…

ツカサはそこまで考えて急に背中を手を置いた。

（キ、傷がない！？。）

そうツカサはフェイトを守った際にエリアの攻撃で背中に傷を負ったはずだったのだ。

だがツカサの背中にはその傷はなかった。

（どういう事だ？…俺は確かに傷を負ったはずなのに…それにフェイトと一緒に無限書庫にいたはず……。）

頭を抱えて悩むツカサだったが、いきなりピタリと動きが止まり閃いたように手をポンと鳴らした。

「あー！…なるほど！きつとコレは夢だな。」

納得したような顔をして頭をかくツカサ。
いいのかよ。それで。

「いいえ…これは夢じゃありません。」

するとツカサの言葉を否定する声が後ろから聞こえた。驚いて後ろを振り返ると、赤い髪をして黒いワンピースに身を包んだ女性が立っていた。

「ここはアナタの意識内です。そして私の名前はトルンと言います。」

トルンと名乗る女性はゆっくりとお辞儀をしてツカサに礼儀を見せた。

ツカサはその女性を見てプルプルと震えた。
トルンはそんなツカサの様子に首を傾げた。

「うおおおおお！流石は俺の夢！可愛い女の子が来て来たぜ！
」

ものすごい盛り上がり方にトルンはビクッと身体が強張った。

「えっと…だ、だからこれは夢では…。」

「ひゃほう！いただきま す！！。」

トルンが何か言おうとするのを全く聞かず、ツカサはトルンに飛びつく。

「ひゃわう！い、一体何を！？。」

トルンは抱きつかれた事にビックリして、顔を赤くして慌てた。

「楽しい事だよー！。」

ツカサは後ろからトルンを抱き締め、手を後ろから回し胸を揉み始める。

「はあう！…や、やめ…。」

トルンはもがくが、ツカサが胸を強く揉んでいるために中々、力が入らない。

「はあ…あ、あん！…やあ…。」

呂律がまわらず、立っている状態が辛いのかトルンは足をガクガクさせる。

「あれ？辛いのか？まだまだなの？。」

ニヤリと微笑んだツカサはトルンのスカートを捲り、その中に手を入れた。

「ひゃう！？。」

スカートに手を入れられたために身体がビクンと上に跳ねた。

「いい感触だねーじゃあもつといくよー。」

グリグリと下着ごとお尻を揉みだした。

「そ、そんな…胸も…お尻も…もんじゃらめ…」

両方の方から攻められているトルンは嫌でも感じてしまうのか顔が真っ赤になって、ヒヨロヒヨロとした動きだった。

「じゃあ…そろそろ行きますか…ハアハア。」

ツカサは息遣いが荒くなりながら、トルンのパンツを脱がし始めた。

「!!!!????。」

トルンは脱がされる感触を感じてもう噴火する寸前だった。

「きゃああああああ!!。」

ドゴオと言う音が聞こえた。トルンは限界になったのかツカサの顎にエルボをかましたのだ。

「ガハア!?!。」

ツカサは空中に吹っ飛び、回転しながら地面に叩きつけられた。

「わ、私の話を聞いてください!!。」

トルンは服を戻しつつ、全力の声でツカサに言った。

「え……?。」

ツカサは状況がよくわからず、呆然していた。

取りあえず落ち着いた二人は向き合いながら、正坐して話を始めた。

「えっと…つまりここは夢の中ではなく俺の意識の内側何だね?。」

ツカサは今トルンに言われた事を繰り返した。

顎はエルボ を食らったため、赤く腫れていた。

「そうです……。」

トルンは顔が赤くなっているため、うつ伏せのまま喋っている。

「それで…君は?。」

ツカサは一体トルンが何者なのかと訪ねた。

トルンは顔をちょっと上げて、答え始めた。

「私はトルン。アナタの胸に取り込まれているロストロギアのビーストに取り込まれている精霊です。」

「…はい?。」

ツカサは聞いた事がすごすぎたのか変な声が出た

「簡単に言えば私はロストロギアです。」

トルンが自分に指を向けて、そうアピールする。

少しの沈黙が場を支配する。

「ええええええええええ！?。」

その沈黙を破ったのはツカサだった。

叫び声がすごかったのかトルンもビックリしていた。

「そ、そんなに驚かなくても…」

軽くあとずさったトルンはチョコチョコと元の位置に戻る。

「え?だってロストロギアが君で、君が精霊でアレ??。」

目が今にもグルグルと、回っている状態でツカサは答える。

「えっと…取りあえず落ち着いてください。」

手をブンブン振ってツカサをなだめるトルン。

その姿はまるで馬を鎮める人のようだった。

「わ、わかった。」

深呼吸をして息を調えるツカサ。

それを見て再び話を開始するトルン。

「いきなりで混乱すると思いますが、本当です。このロストロギアは生物を取りこみ、その生物の力を増殖させるんです。」

「…生物を取りこむ…それが本当だとして、何故そんな事を?。」

ロストロギア的能力が生物を取りこむ力だとしても、何故そうしたのかをツカサはその理由が気になった。

「単純に…力…人間を強くするために…。」

なるほど。つまりは人間が力を欲するためにそうしたらしい。拳銃や鎧を手に入れたいのと一緒にだ。

「それで私は実験でロストロギアの中に入れられて、人間の力を強くする為に同化しました…。」

どこか悲しそうな顔をして、答えるトルン。

「ですが…私の意識はロストロギアの奥深くに閉じ込められ…長い間、暗い闇の中に居ました。そんな時にアナタが偶然にも、このロストロギアと同化したのです…。」

ツカサはいちよう理解は出来てる見たいで、うんうんと頷いた。

「…それで私はアナタの意識内に出る事が出来たのです…。」ですがそれで、アナタに迷惑を…。」

花が枯れた見たいにシヨボーンとするトルンは、何だかほっとけない感じた。

「いや…気にしないよ。それで君が無事だったら、それで良かったじゃん!。」

笑顔で答えるツカサにびっくりした顔でツカサを見るトルン。しかし少し笑みを漏らし、微笑んだ。

「ありがとうございます…優しいんですね…何か…お礼がしたいです…。」

その言葉にツカサは目を見開き、俊足の速度で土下座の体制になった。

「え!?!ど、どうしました?。」

いきなりのツカサの行動にビックリとしたトルンだった。

「あの!?!…お願いがあります…お、俺と…エッチしてください!?!。」

ガンと言つ音を響かせ、盛大な土下座をかますツカサ。

トルンは言つた言葉に当然のように顔を赤くして、動揺した。

「えええええええエッチ!?!?。」

手で覆い隠した顔はあまりにも赤く、リンゴ見たいになっていた。

「俺!?!悲しいくらい女の子にモテなくて、現実ではきつと出来ない!?!だからせめて、俺の意識内だけでも夢を見せてください!?!。」

涙を全力で出すツカサ。

あまりに情けない姿に同情の念が出てくる。

「ででででも…そ、そんな事を…」

当たりを周りながら、ワタワタと迷っているトルン。
ツカサはまだ土下座をして、床に頭をぶつけている。

「……………わ、わかりました。いいですよ。」

トルンはツカサの前に止まり、答えた。

それを聞いてツカサはガバツと起き上がり、トルンの肩を掴んだ。

「い、いいんだね…ハアハア。」

ツカサは目を見開き、息をあらくして鼻の下を伸ばしている。

「は、はい…か、かまいません…」

目を上げて上目使いになるトルンは、ツカサの理性を破壊するには充分だった。

「じゃあ…遠慮なく…」

目をつぶり、キスをしようとするツカサ。
しかし、ツカサの唇はトルンをすり抜けた。

「あ、あれ?。」

急いで、トルンの様子を見ると彼女は透明人間みたいに薄くなっていた。

「これは…きつとツカサさんが目を覚ます合図です。意識内の私のリンクと外れようとしてるんですね…。」

それを聞いて愕然と肩を落とすツカサ。

「ま、また俺が寝れば会えるの!?!。」

必死に言うツカサ。端から見たらラブホテルの前で食い下がる悲しい男だ。

「さ、さあ…今回は偶然に私の意識がツカサさんの意識とリンクしたから…もしかしたら当分ないかと…。」

口をあんぐりと開ける。絶望しかツカサには待ってないようだ。

「いやああああ!!目を覚ますなあ俺の馬鹿やろおおおおお!!!!。」

叫ぶツカサだがそれは虚しく、そのまま目の前が真っ黒になった。

真っ暗の世界。目を開けると部屋の天井が見え、横には目が潤んでいたフェイトがいた。

「!…ツカサ!?良かった!…目を覚ましたんだね!?一日中寝てたから心配したよ!!。」

嬉しそうに答えるフェイトだけど、ツカサはゆっくりと寝ていたベッドから起き上がり、壁の前に立った。

「ど、どうしたの?。」

ツカサの様子にオロオロと心配するフェイト。
ツカサはプルプルと身体が震えていた。

「ぬわああああああ!嫌だああああああ!俺は夢の世界に戻るんだああああ!!!。」

頭を連続でぶつけるツカサはメツチャくちな形相で涙を撒き散らした。

「きゃああああ!?何をしてるのツカサ!!!?。」

あまりのツカサの状態に、急いでツカサを抑えるフェイト。

「離せええええ!俺は帰るんだああああああ!!!。」

暴れるツカサは手に付けられず、そのあと来たシャルも一緒になつて止めたのだった。

ワールド・ザ・ミュージック10（後書き）

またお楽しみにして下さい！

特別編・ツカサの妄想日記（前書き）

一万PV突破記念のお話です。

特別編・ツカサの妄想日記

「さて、今日も日記を書くか。」

ツカサは今、はやての家の小部屋を借りていて、そこで寝ている。

だがツカサは寝る前に必ず日記を書く。
しかしその内容は…

「今日はなのはとの妄想デートでも書きますかね。」

と言った妄想日記なのである。

これを日課にしていると、救いようがない。

「よし。執筆開始！」

その言葉と同時にペンを動かす。

さて、ここからはツカサの妄想をお楽しみ下さい。

八月七日

今日は雲一つない快晴である。

俺はソワソワしながら、公園の噴水でたっていた。

それには理由があり、今日は長年の夢であったデートをあの高町なのはとするのだ。

バクバクと心臓を鳴っているのを深呼吸で落ち着かせ、なかなか時

間になっても来ないなのはに、心配していた。

約束を破られたかなと、ガクンと肩を落とした。
だが不意に目の前が真っ黒になった。

ふわりと優しい香りが俺の鼻に伝わり、目には柔らかい感触を感じた。

「にやはは。だ〜れだ!。」

可愛らしい笑い声をだす女の子は、今まさに自分が待っていた子だった。

俺は目に覆い被さる手を取って、彼女の名前を呼んだ。なのはと。するとなのはが私の前に来て、正解と小さく答えた。

俺は小さくため息を吐いて、遅れて来たなのはに少し注意をした。シユンと顔を落として、ごめんなさいとなのはが謝った。

仕方ないなと思いながら俺はなのはの頭を撫でる。

「あう…にゃあ…。」

少し困ったように恥ずかしながらも、どこか嬉しそうな顔をするなのは。

その様子に俺は面白くなり、さらになのはの頭を撫でる。

「に、にゃあ…やめてよ〜私もう子供じゃないよ!。」

頬を風船のように膨らますのは。

俺はまだやりたかったが、流石にやりすぎると怒ってしまいかもし

れないので、頭から手を離した。

「へへ…じゃあ行こうか?。」

そう言うとなのはが、自分の腕にギュウと抱き付いてきた。

女の子の独特な香りと、なのはの柔らかい感触が俺の神経をゾクゾクとさせる。

しかもなのはが身体を腕に密着させている為に十五歳とは思えない、豊満な胸が当たっている。

俺はいつも通りに、大きな胸が腕に当たっているぞと指摘をした。なのはがそれを聞いて顔を赤くし、俺の腕から少し離れた。

「もう…エッチ何だから…。」

怒った口調をしながらも、どこか嬉しそうな顔をするなのはに笑みが出そうになるが、そこは我慢をする。

そして、なのはの手を取って俺達は歩き始めた。

「えへへ…冷たくて美味しいね。」

そう言うなのはの手にはアイスが握られていた。

基本的なソフトクリームであるが、とても美味しいと評判であり、俺の手にも握られている。

俺となのはの二人はベンチに座りながら食べている。

「人気があったから混んでいたけど、これぐらい美味しいとわかる

ね。」

笑顔で答えるなのは。
それに俺も笑顔で答える。

よく見るとなのは口にはアイスがついていた。

俺は周りに誰もいない事を確認したあと、なのはの肩を掴む。

「うん？どうしたの？。」

状況が分からないのはを後目に俺はそのままなのはを引き寄せ、唇を舐める。

「！！？？。」

ビックリした様子で後退るのは。その顔は赤くなっており、ムスツとした表情をしていた。

「い、いきなり何するの！。」

俺は誤解を解くようにクリームが口についていた事を言うと、さらに顔を赤くするのはだったが、笑顔で微笑んでくれた。

「もっ……ありがとう……。」

その言葉を聞いて、俺も優しく微笑んだ。

そして時刻は進み周りは街灯ぐらいしがなく、暗くなっていた。

「暗くなっちゃたね……。」

残念そうになのはが呟いた。

俺はそうだねとその意見に傾ける。

するとなのはがその場で止まった。

俺はそれを見て一緒に止まり、なのはの方を向いた。

「じゃあ……そろそろ帰るね。」

顔は笑っていたが、少し寂しそうに言うのは。

俺は何か言おうとするがなのはは、俺に背を向けた。

我慢出来なかった俺はなのはの手を掴んだ。

「何……んぐ!?!。」

なのはが振り向くと同時に俺は唇を奪った。

「んむ……ちゅる……くちゅ……ジュル……。」

舌を絡ませ、なのはを抱き締める。

最初は動揺していたなのはも、俺の腰に手を回しながら舌を絡ませ
てくる。

俺はそのまま木になのはを押し付けて、上の服をずらしはじめる。

「やあ……こ、こんな所で……。」

大胆な行動に流石に止めようとするのは。

しかし俺はそんな事で止まる事は出来ない。

服を上げたあと、真っ白なブラジャ　が見える。

それを外し、胸に顔をうもらせるいきよいで、乳首を吸う。

「ひゃあうーそ、そんなところ吸っちゃあ…。」

俺は無視しながらさらにそのままスカートに手を入れて、下着を下ろす。

そのまま……

ポタポタ…

ツカサが妄想日記をかきづづける最中に何かが滴る音が聞こえた。

「やああああ！！。しまったああああ鼻血がああああああ！！。

」

興奮し過ぎたツカサは鼻血を出して日記を汚しちゃいました

おしまい

特別編・ツカサの妄想日記（後書き）

やってしまった。

後悔はしていない…

ワールド・ザ・マジック11(前書き)

また長くなりました。

今回はちょっとシリアスです。

ワールド・ザ・マジック11

「で、コレがその報告書かね?。」

目つきを悪くさせた、中年男が持っていた紙を机に叩きつけ、声を低くして答えた。

「はい…その報告書は事実です。」

答えたのは、執務官のフェイトだ。

その後ろにはツカサとはやて一家のみんなが立っている。

今回フェイト達は、無限書庫でおきた襲撃事件を管理局の上層部に報告書を提出している所だった。

事件を直接に見たフェイトとツカサは、こうやってこの場所に来ていた。

はやては特別捜査官の肩書きもあり二人の付き添いであり、シグナム達は必然的に付いて来るわけだ。

(あゝやだな…早く終わってくんないかな…) ()

その中、ツカサは早く会議が終わってくれないかなと願っていた。

それもそのはずだ。

ツカサは怪我をしてからまだ二日も経たない内にここに立っていた。つまり完全じゃないと言う訳だ。

「それにしても、無限書庫を襲撃した犯人を取り逃がすとは、何をやっているのかね?。」

報告書を読んでいた男の隣にいたメガネを掛けた男がそう言った。

それを聞いたシグナム達は少し顔をしかめた。

それはツカサもだった。

フェイトや勿論ツカサも敵を逃してしまったが、それは管理局の対応の遅さにも問題はあったはずだ。

なのにこの上司は二人が逃がした問題にだけして、自分達に非がないようになすりつけているのだ。

「……すいません…。」

フェイトもわかっているはずだが、相手は上司であるために謝ってしまう。

（くそ…この野郎…フェイトと俺だけの責任ってか？……ふざけやがって…。）

ツカサは珍しく眉を強めてチィと舌打ちをかました。

ヴィータも睨んだような状態でイラついていた。

「それよりツサカ三等空士！」

すると報告書を読んでいた上司がツサカを呼んだ。
ビクツとしながら上司の方に顔を向けるツサカ。

「君はまた暴走したみたいだね…。」

上司は机をコンコンと指で叩きながら、ツカサを冷たい目で見据え

る。

あまりに嫌みっぽい雰囲気イラつくが、それを顔に出さずに上司を見る。

「全く…わかっているのかね？君は危険物何だよ？そんなに何度も何度も暴走してもらっては困るんだよ？」

（な！？。）

ツカサは拳を握り締めた。

あまりにも偉そうな状態に流石に頭に血液がたぎりそうだった。

そんな手をフェイトが握って下げさせた。

いきなりにされたので、ツカサも驚いた。

「…お言葉ですが、彼は危険物じゃありません。私は彼に助けられました。」

フェイトは真っ直ぐと上司に向かってキツパリと言った。

上司はそんなフェイトを睨みつけた。

「偉そうになんだね君は！！私は彼に話かけているんだよ！？。」

机に拳を叩きつける上司だが、フェイトは怯まず立っている。

それだけではなく、はやてもフェイトの横に立った。

「私もフェイト執務官の意見と一緒にです。彼は危険物じゃありません。」

はやてはそう言つとフェイトとツカサの方に向いてニコと笑顔で返した。

フェイトはありがとうと合図を送つて、ツカサは二人の優しさに感激して涙を流していた。

「…………ふん……」

上司はムスツとしながらも席に座る。

何も言い返せないと思つたが、横のメガネを掛けたもう一人の上司がニヤニヤしながらフェイト達に言い放つた。

「なるほど…彼みたいな危険物をかばうか……流石は元犯罪者達だな……」

その瞬間はやてとフェイトはビクツと身体を強ばらせた。

だが同時に後ろにいたシグナムとヴィータは拳を握らせて、前に出ようとしていた。

しかしフェイトはシグナムの腕を掴んで動きを止め、はやてはヴィータの前に手を出して制した。

シャマルはその様子にオロオロとしているのを、ザフィーラに止められていた。

「なんだね？…私は本当の事を言つたんだよ？。」

嫌みの笑みを止める事はなく、また上からの視線でフェイト達を見下していた。

フェイトとはやても何も言わず、シグナム達を制したままうつむいている。

ツカサも上司の言った言葉には少なからず驚いていた。

「全く…元犯罪者のくせに生意気なんだよ…」

上司の男はまだ口を止める事なく、さらにフェイト達に言い放つ。
シグナムとヴィータも更にギリギリと拳を握らせ、怒りをあらわにしている。

「君達みたいな人間が…管理局にいる時点でおかしいんだ。わかっているのかい?。」

二人は何も言わない。

ただ、黙って上司の言う事に耳を傾かしていた。

「いいか？君達が私達に反論するなんて出来ないんだ…元犯罪者は大人しく……。」

[illegible]

急に警報がなつた。

下を向いてたフェイトとはやては顔を上げ、上司もビックリしながら

らキヨロキヨロしている。

しかし別に敵が攻め込んで来たわけではない。

警報を鳴らしたのはツカサだった。

この部屋にある警報機のスイッチをガラスごと押したのだ。

手には破壊したガラスの破片が突き刺さっており、鮮血がボタボタと滴り落ちていた。

「き、貴様！ 一体なにをしている！！。」

上司がツカサに対して大きな声を出す、警報の音でかき消されてよく聞こえない。

「……手が滑りました。」

ツカサは小さな声でそう呟き、フェイトとはやての手を引っ張った。

「みんな…行こう…。」

警報が鳴り響く中、ツカサはフェイト達の耳元で声を出し、二人を引っ張って外に出た。

シグナム達もそれに付いて行く。

後ろでは上司達が何か言っているがそのまま扉を閉じた。

「……………ここまで来れば大丈夫か…。」

ツカサ達は部屋を出たあと、離れた廊下付近で止まっていた。

「…ツカサ……。」

するとフェイトが何か言いたそうにツカサを見た。
それはシグナム達はやてもそんな感じだった。

「あ…皆さんが言いたい事は何となくわかる……俺もビックリしちゃたし…犯罪者つてのは…。」

フェイトはシヨボンとしている。
はやて達も暗い顔になっている。

「でも…二人は俺を助けてくれた……それに女の子が苦しそうにしてるのはヤダからね…。」

そう言つてフェイトの頭を撫でた。

「あ……ありがとう…。」

フェイトは照れながらツカサにお礼を言う。

「私からも言うわ…ホンマにありがとう……。」

はやては深くお辞儀をした。

それに続いてシグナム達もお辞儀をした。

「…すまない…ラグーン…お前には感謝せねばいかな…。」

シグナムはツカサの名字を読んで微笑んでくれた。
それは今までの警戒した雰囲気はなかった。

「……あ、あんがと…。」

ヴィータは目を合わせないも、顔を赤らめてツカサにお礼を言った。

ツカサはその様子に微笑んだ。

その時にシャルはツカサの横に来て、ガラスが刺さった手を握った。

「怪我を治すわ…医務室に来て…。」

ツカサは怪我を思い出して、とりあえずシャルと一緒に医務室に向かう。

「あ…フェイト。」

とりあえず後の事は任せるよ…。」

ツカサは向かう前にフェイトに後の事を無限書庫の事だと思っが、それを頼んだ。

「わかった…任せて…。」

ツカサは良かったと思いながら、また何かを思い出したようにフェイトの方を向く。

「そ、そう言えば…俺いつの間にか敬語使ってないね…。」

ツカサは苦笑いしながらそう言ったが、

フエイトも横にいたはやてもクスクスと笑った。

「気にしないでツカサ。私だって年上のツカサにタメ口なんだから。」

「そうやで〜それにツカサさんはうちにもタメ口やんか。」

フエイトとはやてがそう言うてくれたのでツカサは笑顔になってシヤマルと医務室にむかった。

「じゃあ…はやて調べないとね…。」

「そやね。エリア・スクアルとプリス・キアルアやね…シグナムとヴィータも手伝ってや!。」

はやての言葉に敬礼をしたシグナムとヴィータは、

「了解!。」

と笑顔で答えた。

消毒液の香りが広がっているのは医務室。

ツカサはこれで三回目の所だった。

シヤマルは丁寧にツカサの手に刺さったガラスを取っていく。

「あはは…すいません。迷惑かけちゃて…。」

ツカサはシャルマルに謝ったが、シャルマルはゆっくりと首を横に振った。

「いえ… かまいませんよ… ツカサさんには感謝してますから。」

シャルマルは笑顔で答えてくれたから少し嬉しい表情にツカサはなった。

「あの事ですか？ …… 気にしないでください。俺も深く聞きません。シャルマルさん達に何があつたのかは……。」

ツカサの言葉に少し困ったように、シャルマルが顔を伏せる。

「でも…… 聞きましたよね？ …… 犯罪者って……。」

シャルマルはそう言った。

その声は今にも押しつぶれそうだった。

「…… 確かに聞いたよ… だけど… 聞いたただだよ。」

ツカサはそう言ってシャルマルの頭に手を置いた。

「俺が知っているのは… とても優しい人達って事だけだよ。」

シャルマルは驚いたようにツカサを見るが、そのまま目に涙を溜めたあとツカサに抱きついた。

「シャ、シャルマルさん？。」

ツカサは普段なら相手の女性から抱きつかれた事がないので、少し驚いたがすぐ心を落ち着かせた。

そしてシャルをベットの方向に押し倒した。

倒れたシャルはツカサと見つめ合うが恥ずかしさから、目を背けた。

しかし前みたいにツカサが押し倒した事に抵抗はしなかった。

ゴクツとツカサは生唾を飲み込んだ。

心臓はバクバクと鳴っていて、今すぐシャルを犯せと、脳から指令が伝わってくる。

その指令にツカサが逆らう事は出来はらずがなく、シャルの唇を奪った。

最初はただのキスだったが、途中から液が絡まる音が聞こえた。ツカサは舌を入れてシャルの舌に絡ませている。

シャルは勝手がわからないのかキツそうに顔を歪めていた。

それでもツカサの背中に手を回して何とか合わせようとしている。

しばらくしてツカサは唇を離れた。

シャルは次に何が来るかと、ドキドキしたが何も来なかった。

シャルは目をゆっくり開けると、ツカサは気絶していた。

「えっと……ツカサさん？」シャルは呼びかけたが反応がない。

完全に意識が無かった。

多分、怪我の疲労から体力の限界だったみたいだ。
シャルはクスと笑いながらツカサをベットに寝かした。

そのあとシャルは自分のしたことを今更ながら恥ずかしくなった
らしく、自問自答しながら机に突っ伏してた。

ワールド・ザ・マジック11（後書き）

あれ？主人公が違うのかな？なんかツカサぽくない。

彼は本当はいいやつです） （

ワルド・ザ・マジック12（前書き）

今回もシリアスはちょっと入ってます。
シリアスのかきなれてないから疲れた。

ワールド・ザ・マジック12

「……………はあ…。」

溜め息を吐いていたのは、はやて一家の一番小さい女の子ヴィータだった。

何故彼女が悩んだように、溜め息を吐いているかと言うと…

「いやっほううう可愛いいアイドル来たあああ!!。」

原因は今、はやて一家で世話になっている男、ツカサだった。

彼は前に上司に逆らったとして、今は仕事が出来ない状態なのだ。謹慎みたいな状況である。

クロノ艦長の計らいで、何とか短い期間だけの謹慎になったが、それが原因でヴィータが困っていた。

「おい…少しは静かにしろよ。近所に迷惑だろ?。」

「堅い事言わないでよ、今めっちゃ可愛い女の子が出てんだもん!。」

ヴィータはそれを聞いて溜め息をまた吐いた。

今、彼女は悩んでいる。

何故今の家にはこの男と自分しかいないのかと…

二人しか居ないのにも原因はある。

はやてはフェイトと一緒にになって襲撃事件の犯人達を追っている。
シグナムとザフィーラは、ロストロギアでの現地調査。
加えて、いつ襲撃が起きてもすぐ耐用出来るように待機状態。

シャマルは無限書庫の事件で、怪我を負った人の治療に駆り出されているため、今はいない。

なのはにも助けを出したかったが、彼女もシグナムと一緒に待機状態であり、それに加えて無限書庫で怪我を負った人に大切な友人がいたので、精神的に頼めなかった。

だからヴィータはツカサの監視兼お守りをさせられている。

「うお……でつかい胸だな……ヴィータもあれぐらいあったらいいの
にね?。」

「余計なお世話だバカやるおおおお!!!!。」

ツカサは一週間の謹慎なのだが、はやて達がゆっくりと家に帰れるのも一週間以上かかるのだ。

そのためにヴィータはテレビを見てテンションが上がってるツカサに大変困っている。

「まあ怒らないでよ……ヴィータはそのままでも可愛いんだから。」

ヴィータは可愛いと言われる事は男性からなく、物凄い早さで顔を赤らめた。

「そそそそそそんなわけないだろ！？あたしが、可愛いなんて…。」

可愛いと言っセリフだけがボソボソと小さくなるヴィータ。

よっぽど恥ずかしくなるようだ。

「そんな事ないよ！ヴィータはめちゃくちゃ可愛いよ?。」

それでもツカサはヴィータを誉める。

ヴィータは今にも沸騰しそうな顔になっていた。

「だあああああ！！もういい！！。」

そう言ったヴィータはボフンと音をさせてソファにあぐらの格好で座った。

ツカサはヴィータの様子に微笑みながら、再びテレビに顔を向けた。

そのまま二人は黙っていたが、ヴィータはツカサに何か言いたそうにチラチラ見ていた。

ツカサはそんなヴィータに気付いた。

「どしたの？ヴィータ?。」

ツカサが呼び掛けた事によってヴィータはビクと身体を動かした。

そして何かを言いたそうなヴィータは、決意したようにツカサの方をむいた。

「なあ…お前は本当に何も聞かないのか?。」

ヴィータが聞いたかった事は、前に上司に言われた事だった。

ツカサもヴィータが言いたかった事がわかり、ヴィータの方に身体を向けた。

「……あの、元犯罪者ってこと?。」

ヴィータは小さく頷いた。

ツカサはポリポリと頭をかいて、うーんと悩んだ表情をとる。

「……もし…ヴィータ達が犯罪をしたのが本当なら、確かに驚くけど…。」

ヴィータは下を向いた。

何かを思い出すように、何かを考えるように…

「……なあ…少しでも楽になるなら…話を聞かせてくれないか?…今のヴィータはすごくつらそうな顔をしてるから…何とかしたいんだ。」

ツカサは優しくヴィータの頭を撫でた。

恥ずかしくなったヴィータはツカサの手をよけた。

そして、ゆっくりと口を開けて語り始めた。

これからヴィータが話す事件は、資料に纏められた物である。

〔闇の書事件〕

闇の書とは、大昔に作られた魔道書であり、ロストログアでもあった。

闇の書は魔力を収集して絶大な力を、持ち主に与える。それに溺れた持ち主はその力を利用し、戦争などが起こった。

だが強すぎる力は身を滅ぼす。

闇の書の持ち主はその力に適わず死んだ。

さらに闇の書にはさまざまなプログラムがある。

一つは人格プログラムと言って、プログラムによって作られた人格を闇の書の持ち主を守る守護騎士として、召喚するプログラム。

もう一つは転生プログラム。

例えば闇の書の持ち主が死んでも、新たな持ち主を探してその持ち主がいる所に転生するプログラム。

転生プログラムによって長い時間、闇の書は多くの持ち主達に行き渡った。

そのたびに持ち主達は戦いを起こしていった。

そして、今の時代。新たな持ち主として選ばれたのが、八神はやてと呼ばれた少女だった。

彼女は絶大な力には興味がなく、人格プログラムとで生まれた守護騎士達と家族のように過ごしていた。

そのためこのまま、争いはもう起きないと思われた。

しかしそんな幸せは続かなかった。

八神はやては足に障害があり、闇の書の魔力によってそれがさらに強い障害を引き起こし、命の危険にまで発展した。

守護騎士達は闇の書のページを魔力を集めて埋める事をすれば、彼女を救えると思い、事件を起こした。

魔力のある人間や魔獣などを襲い、魔力の源リンカーコアを奪い始めた。

もし魔力が溜まり、闇の書が覚醒したら大変な事になる。

管理局の者はそれを防ぐために守護騎士達と対峙した。

戦いの中さまざまな感情がいれ違い、戦いは激しくなっていた。そしてついにその時が来てしまった。

闇の書は覚醒をしてしまい、八神はやては力を得て暴走してしまう。

管理局の者は苦戦をしながらも戦い勝利を掴んだ。

八神はやての暴走は止まり、正統な魔道師として目覚めた。

だが最後に防御プログラムと呼ばれた物が発動。
巨大な化け物を生み出した。

管理局は八神はやてと守護騎士達と協力をして、防御プログラムを完全破壊してこの戦いを終わらせたのであった。

「……………」

話が終わり、ヴィータは黙ってしまった。

ツカサもその話を聞いて静かになっていた。
そして顔を上げ、ヴィータを見た。

「闇の者の主…それがはやてで…守護騎士達がヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ、リイン何だね？」

ヴィータは頷いた。

「ああ…その通り…私達ははやてを助けるために罪を犯した。」

「で、でもヴィータ達ははやてを助けようとしたただけだろ！？それにはやては知らなかったんだろ？闇の書の力の事！」

ツカサは、はやて達に非を感じれず、ヴィータに訴えた。

「…ああ…だけど管理局の上の奴らは、はやてが命欲しさに行った犯罪だと言ってる。」

ヴィータは悔しそうに手を握った。

「はやては悪くないのに…あたし達のせいなのに……それでもはやてと一緒に罪を償ってくれている…だからはやてが犯罪者扱いされるのが悔しくて！」

プルプルと震える手。目には涙が溜まっている。

ツカサはそんなヴィータを抱きしめた。

「…ヴィータ達がした事は罪だ…でも俺は間違ってるとは思わない。」

「え?。」

ヴィータはツカサの言葉に驚いて顔を上げる。

「それにはやてが一緒に罪を償うのも間違ってるよ…ヴィータ達は大切な家族さ…だから守りたかったんだよ。」

一つ一つ優しい口調でヴィータに語りかけていくツカサ。

ヴィータはいつの間にか涙が止まっていた。

「もし…管理局の人がそう思っているとしても…俺はヴィータを…みんなを信じる。」

そう言ってツカサはヴィータを離して、目を見つめた。

ヴィータは目をグシグシと拭いて、ツカサを真剣な目で見た。

「……ツカサ…あんがと…お前のおかげで元気がでた…。」

ヴィータはニイといつも通りの笑顔になった。

ツカサは初めて名前を呼ばれた事に喜んだか、笑顔になった。

「へへ…しつかしお前…意外とすごい奴だな……関心し……」

ヴィータが関心したと言おうとしたが、ツカサの視線は下を向いていた。

「ほほ…ヴィータのパンツは可愛いしましまかあ…」

ツカサは鼻のしたを伸ばしながらそう言った。

ヴィータはソファにあぐらで座ったためにパンツが真つ正面からみると丸見えだったのだ。

「うへへ…ロリのしましまとか最高だな…俺の息子が元気になっちゆうよー。」

気味のわるい笑みを浮かべ、興奮しているツカサ。

その後ろにはヴィータが怒りのオラをだし、立っていた。

「やっぱり最低だあああああああ！！！」

このあとツカサがボコボコにされたのは言うまでもなかった。

ワルド・ザ・マジック12(後書き)

やっぱりツカサはツカサか(。 。 ;)

ワールド・ザ・マジック13(前書き)

二万PV突破！

これも皆さんのおかげです(^o^)/

これからもよろしくお願いします!!

ワールド・ザ・マジック13

暗くジメジメとした部屋の中、モニターだけが光を発していた。

そのモニターの前には一人の男が立っている。

「……………」

男は無限書庫を襲ったエリア・スクアルだった。

エリアが見ていたのは、無限書庫での戦いで暴走していたツカサの映像だった。

「やはり…これは…」

何か考えていたエリアだったが、後ろから誰かの足音が聞こえた為に、そっちの方に顔を向けた。

「ぶ…何を観てるの?。」

それは無限書庫でエリアと共に行動していた少女、プリス・キアルアだった。

「なんだ…お前か。」

エリアはプリスからまたモニターの方に顔を移した。

プリスはぶくと頬をハリセンボンのように膨らます。

「なに? 私じゃ悪い!? ……まあいいや…結局何観てるの?。」

「……前に無限書庫に攻めた時の映像だ……」

エリアの言葉を聞いたプリスはエリアの視線先にあるモニターを見た。

そこはさっきエリアが見ていた時と同じ、ツカサが暴走してエリアとプリスと対峙していた映像であった。

「あゝこれか……危なかつたよね。」

プリスは頭の後ろで手を組んで、クルクルと回転している。

「……プリス……あの男の胸をしてみる……」

「ほえ?。」

プリスは回転を止めて、エリアが言ったツカサの胸を確認した。

「……あれって……まさか……」

プリスは今までにないぐらいのビックリした顔をした。

その緊張感はいつものプリスでは考えられない。

「ああ……俺達が探しているロストログア……ビースト……かも知れない。」

エリアは確信がないために少し口ごもるが、そうプリスに言った。

「……本当に……?。」

いつものふざけた感じは消えて真剣な目でプリスはエリアに尋ねる。

「……まだ……わからない……。」

その言葉を聞いたプリスは、ショボンと肩を落とした。

エリアはプリスの横に来て、肩に手を置いた。

「安心しろ……それを確かめにアイツラが向かった……。」

そう……その言葉通り、ツカサの所に向かっていている者達がいたのだ。

だがその事にツカサも仲間達も気づいてはいない。

「はあ……やっとア スラに戻れたよ……。」

場所は変わって今は戦艦ア スラの中。

ツカサは謹慎が解けたために今日はア スラに出勤出来ていた。

「しっかし……どうしようかな……今日は余り人が居ないし……暇だな
」。

実は今日のアースラは余り人が居ない。

はやてとシグナムは聖王教会と言う場所に言っているらしく、フェイトは執務官が足りなかった為に現地調査に駆り出されているからいないのだ。

「あ……シャルさんの所行きたいけど……ザフィーラとヴィータがいるから……。」

ヴィータとは仲良くなれたと思ったが：パンツを見た事でヴィータが怒ってしまい、まだ気まずい状態が続いていたのである。

結局のところツカサは暇で、アースラの中をグルグルと回っているようだ。

「あ　暇だ。女の子成分がほしいよ。チクショ。やっぱりトルンとまた会いたい。」

トルンと会いたいと言っているが、それもない。

トルンと会えるのはツカサの意識内だけ、寝ている時や気絶してる時だ。

それにトルンと意識リンクしたのはかなり偶然らしく、今では寝ても全くトルンと会えない。

「はあ…考えても仕方ないか……。」

やる気が無いと思うほど、力の抜けたツカサはまた前に歩き出した。

するとある部屋から爆発音が聞こえた。

それはこの場所を通るとよく聞こえる音だ。

「ああ……なのはが居るのか……。」

ツカサはコソコソと怪しい動きをしながら、なのはが居る部屋、訓練室の扉を開ける。

（……どうやら…なのは…俺には気付いてないようだ…。）

ツカサは訓練室に入ったのだが、なのはツカサが入って来た事に気付いていない。

それほど集中していると思われる。

「……………」

一方のなのは、目を閉じ集中して、自分の魔力を高めていた。

魔力が高い為か、なのはの身体の周りにピンク色の魔力が覆われていた。

（すごいな……魔力がギシギシと伝わってくる感じだ…。）

しかしその魔力の光は消えた。

なのはが溜め息を吐いて目を開いた。

その顔は何やら深刻そうな顔をしていた。

「……………はあ……………」

今度ははつきりと聞こえる溜め息で肩を落とすなのは。

二回も溜め息を吐いたなのはに、ツカサはゆっくりと近づく。

「…さてと……………次は。」

なのはが次の練習をしようとした時、耳に生暖かい風が吹き渡った。

「ひゃわい!?!」

間抜けな声と共に身体が飛び魚みたいに跳ね上がるなのは。
正直言って面白い。

「あははゝすいませんなのはさん。余りに無防備だったのでゝつい…。」

笑いながら答えたツカサ。

彼はなのはの耳に息を吹きかけたようだ。

「つ、ツカサさん!?。」

パタパタとしながらツカサが来ていた事に驚いている。

なのはがよっぽど心ここに在らずの状態だったと感じさせる。

「久しぶりですねゝ前の訓練の時いらいで。」

その言葉を聞いて、何かを思い出すようになのはが顔を赤くした。

（あ…そういえば…前の時…なのはの裸見てしまったんだっとな…
…綺麗だったな…グヘヘ…。）

思い出し笑いをするなよ。

マジで気持ち悪い奴だと感じた瞬間だった。

「まあ…あの時はすいませんでした。なのはさんの裸を、見てしまっ
つて。」

我に戻ったツカサは前の事に非を感じてたらしく、ペコペコと謝った。

「いや!その…こちらこそすいませんでした!…は、叩いてしまっ
て。」

なのはもツカサと一緒になってペコペコし始めた。

まるで会社員の挨拶だよ…

「…えっと…取りあえず…座りませんか？」

「あ、はい…わかりました。」

その後、謝りまくった二人は訓練室のベンチ椅子に座る事にした。

「…なのはさん。あとこれを…」

そう言つてツカサは、ポケットからチョコレートを出し、半分にしてなのはに渡した。

「え…？いいんですか？」

いきなりチョコレートを渡されたなのは。

受け取つていいのか迷い、オロオロしている。

さながら野良猫に餌を与えた時の反応に似ていた。

「えへへ…気にしないで下さい。今日買ってきたやつなんで…それに疲れた時は甘い物が一番！」

困った顔をしながらも、受け取るなのは。

それに実際チョコレートは嬉しかった。

そしてツカサはチョコレートを受け取ってくれたなのはに笑顔で返した。

なのはもそのツカサの笑顔に少し笑顔になって返してくれた。

一つのチョコレートだが、それでも今の訓練室が明るく感じるもの

だ。

だが今この時、漆黒の闇から小さく…静かな足音が聞こえていた…その音は着実に、ア スラに近づいていたのだった。

「はあ…全く…正直この量の書類は、肩がこる。」

場所はア スラの艦長室の机。

大量の資料にかくれんぼ状態なのは、艦長のクロノであった。

目にはクマが少し出来ていて、もう勘弁してほしいというオ ラが出ていた。

「…これは執務官の任務調査の紙…こっちはロストログア追加調査資料…それに医療系魔道師の追加要望の紙…はあ…。」

クロノは一旦紙を置いて、ゆっくりと立ち上がる。

「仕方ないか…人手不足はいつもの事だしな。…取りあえず、コ ヒィ でも買ってくるか…。」

そう言つてクロノは艦長室から出ようと、扉に向かう。

しかしその足は、扉に着く前に止まった。

「……………一体…どこから入ったんだ？…普通は扉から入る物だが…」

明らかに誰かに話し掛けているクロノ。

それもそうだ。

今のクロノの後ろにはフ ドを被った三人組がたっていたのだから。

「……………この艦長ですね？…彼の…………ツカサ・ラグーンの居場所を教えてください。」

真ん中の一人がフ ドをとり、そう答えた。

水色の瞳の女性だったが、その目は海よりも深く、闇よりも暗く感じるものだった…

ワールド・ザ・マジック13（後書き）

次回…

旋律と共に暗黒の闇が、空に広がる

ワールド・ザ・マジック14（前書き）

ね：熱がでたり：色々大変で更新遅れました。すいません！
ただ俺は負けない！みんなオラに元気を分けてくれ！！！

ワールド・ザ・マジック14

「彼の……ツカサ・ラグーンの居場所を……教えて下さい。」

ア スラの艦長室。

謎の女性の言葉が静かに、部屋に響いた。

「ツカサの？……悪いがそれは出来ない相談だな……。」

クロノが言うと三人組の中で、フドを唯一とっている女性がマントから手を出した。

「仕方ないですね……では、力づくで……聞かせて貰います。」
そう言う女性の手はグローブがはめられていて、呪文のようなのが刻まれている。

「力づくか……ならこちらでもそれに答えてあげよう。」

クロノはポケットからカードを出した。

そのカードは急に光だし、一瞬で杖の形に変わった。

「……さて……君の後ろにいる二人は戦う気がないようだが……一人で戦う気かい？……」

そうクロノが言うように、相手の内二人は全く動こうとせず、戦えようとする意志は感じられない。

「……この二人は戦いません…私だけで充分です。」

戦う意志がある女性がキツパリとそう言った。

クロノは構えを崩さず、二人にも警戒心を無くさないようにしている様子だった。

「そうか…わかったよ。だけどそんなふうには余裕を持っていれば、足下を掬われるよ?。」

女性はクロノの言葉に全く反応せずに、戦闘態勢を崩さない。

「…それはアナタにも言える事ですよ。私を甘く見ていると…痛い目に合いますよ?。」

女性はその言葉と共に手を上げた。

「精神操作発動……マインド・コントロール…開始。」

「!?!?…なんだ…?。」

女性の言葉が聞こえた瞬間、クロノの目の前が真っ暗になった。

「さようなら……記憶の闇に溺れなさい……。」

ガクツと膝をついたクロノは、そのまま力なく倒れた。

「さて…アナタの記憶からツカサ・ラグーンの居場所を探しましょう

う……。」

女性は倒れたクロノの頭に手を置いた。

そしてそのまま目を閉じ、動きを止める。

数分して、女性がクロノから手を話し立ち上がった。

「……詳しくは知らなかったようですが、この艦の中にいるようですね……仕方ない……探しましょう。」

女性の言葉に後ろのフードを被った二人は頷いた。

その頃なのはとツカサは訓練室のベンチ椅子に座ってチョコレートを食べていた。

「モグ……モグモグ……。」

チョコレートの端を持ちながら、小さく食べているなのは。その姿はリスに似ているようだ。

「美味しいですか？なのはさん。」

ツカサは今のなのはを思い切り襲いたい衝動に刈られながらも、我慢して平常心を保つ。

「ひゃい…とっても美味しいです。」

口元を手で隠しながら、ツカサに笑顔で答えるのは。

（ぐは…！何て可愛いんだ…！ヤバス…抱きしめたい！ナデナデしたい！キスしたい。舐めたい！息子を秘境に入れたい…！。）

何かもう訳のわからない事しか考えられないようだ。

わからない人には意味不明である。

「えっと…ツカサさんは食べないんですか…？。」

ツカサは全くチョコレートを食べずにニコニコしていたので気になったのは。

「あゝいいんですよ！俺はなのはさんの笑顔でお腹いっぱいです…」

ツカサの恥じらいもない言葉に顔を真っ赤にして下を向く。

そんな状態のなのはに更に妄想を繰り広げるツカサ。

顔がとても気持ち悪い。

しかしツカサは感じた。

まだなのはの表情はどこか暗い事に…

「……………なのはさん…何か、あったの？。」

自分の元気が無いことがバレってしまったのはは、ツカサの方を見て今すぐ叫びたいように口を開こうとするが、ピタリと動きをやめて下を向いた。

「……その…前にツカサさんとフェイトちゃんがはち合わせた、無限書庫の襲撃事件がありますよね?。」

うつむいていたのはだったが、そのままツカサに対して同意を促すように喋った。

ツカサは取りあえず同意するように頷く。

「…その襲撃事件で無限書庫にいた私の友人が、大怪我をしてしまい…今も意識不明なんです…。」

なのはが友人の部分を重く喋ってる事から、とっても危ない状態と心配している様子が見てとれる。

「…その時に私が居たら…そんな事にならなかったのかなって…考えてしまっ…。」

思ったより考えすぎてしまっているようだ。

「取りあえず…気にしすぎだああああ。」

そんな様子のなのはにチヨップを食らわすツカサ。

威力は弱であるから痛くはない。

「はっ…ッ、ツカサさん?。」

チヨプされた頭を押さえる。

痛くはないが、いきなりなのでなのはもビックリしたようだ。

「確かに友達や大切な人が傷付いたり、大変な事になったら心配はしてしまっ…だけど…それを足枷にしちゃいけないんだ…友達もそんな事、望んではない。」

ツカサの言葉にきずかされたようになのはが目を見開く。

「ツカサさん…ありがとうございます!。」

「へへ…元気になって良かったっす…。」

ツカサもなのはも笑顔になった。

さっきまで少し暗く感じた訓練室も明るくなったように感じる。

「見つけましたよ。」

この声が聞こえるまでは…

「!?!?…誰!?!?。」

なのはとツカサはいきなり聞こえた声に、後ろを振り向いた。

そしてそこにはまるで闇が纏っているように暗く、深海にでも居るような感覚を持たせる、水色の目の女性とフードを被った二人、計三名が立っていたのだ。

「…アナタ達は何者ですか?。」

なのはは、三人を警戒し杖、レイジングハトを出した。

「アナタには用はありません…後ろの男性…ツカサ・ラグーンを出して下さい。」

人差し指でツカサの方に指を向ける女性。
注意・人に指は向けちゃ駄目だよ？

「ツカサさんに：？。」

用があるのはツカサだと知ってツカサの方になのはが顔を向ける。
なのはの顔は知っている人達ですか？と質問しているような事が書いてあるだった。

ツカサは三人に知り合いはいないために、なのはに違つと顔を横に振った。

（知らないよ！だれだよアイツら……しかしあの女性……美人だな……
……もしかして俺を好きで告白しに！？……後ろの二人は女性の友達で
告白に自信ないから付いてきて……みたいな今時の女子高生的なノリ
か！？。）

ツカサの思つた事に一体何人の人間が、違つと思つただろうかな。

「さあ……ツカサ・ラグーン……アナタの胸にあるロストロギア……調べ
させて貰いますよ……。」

女性の言葉を聞いた瞬間にツカサも杖を展開、なのはと一緒に杖を
三人に向けた。

「アナタ達は……ツカサさんのロストロギアが目当てですか？。」

なのはの言葉に目だけを向ける女性。
そしてマントから手を出した。

「アナタも邪魔です……記憶の闇に溺れなさい……。」

この瞬間、一瞬だったが、闇が訓務室を包んだようだった。

ワールド・ザ・マジック14（後書き）

更新頑張ります。

バトル頑張ります。

ワルド・ザ・マジック15（前書き）

バトル全力全開！

久しぶりに書いたので至らないかも知れませんがお願いします。

ワールド・ザ・マジック15

「記憶の闇に溺れなさい……。」

女性の言葉に訓練室の空気が変わった。

「！？させません！アクセルシュタ……シュトオオ！！。」

女性が何かをやるうとした瞬間、なのはが魔法を発動。

桜色の球体が魔力弾となって女性に放たれた。

「……甘いですよ……。」

しかし女性は怯まずに、もう片方の手を出しシルドを発動させる。

放たれたなのはの攻撃は女性の出した、シルドによって防がれた。

「……デイベイン……。」

だがなのはは、攻撃を防がれる事を想定して、一瞬で砲撃魔法を発動させようとしていた。

「バスタ……！！。」

放たれた桜色の砲撃。

しかし女性も後ろの二人も全く動かずに慌てても、いなかった。

直撃……なのはのレイジングハトからの砲撃は訓練室を揺らし、女性達の所は煙が上がった。

「……………」

ツカサもなのはも煙が当たった所を見つめながら、デバイスを強く

握りしめ、緊張を現している。

「……………なかなかの砲撃ですね…。」

煙がはれて、女性の顔が見える。

後ろの二人もフードを被ったまま、全くさっきの場所からは動いていなかった。

しかもさっきの砲撃は、かなりの威力だったが、女性のシールドによつて全くの無傷である。

（嘘だろ！？あのなのはの撃った、砲撃でダメージを全くうけないなんて…。）

ツカサは敵がそこまでの強さを持つ連中だと理解し、汗が全身を支配した。

「……………もしかして…アナタ達は、襲撃事件での人達の仲間ですか？。」

なのはの間に三人は答えない。ただの無口なのか、それとも肯定してる黙りなのかは分からない。

「……………もし、そうだとしたら…どうしますか？。」

女性の言うセリフも挑発なのか、はったりなのかも理解出来ない。しかしなのはの目はさっきより鋭くなり、レイジングハートを強く握りしめた。

「…だつたら…全力でお話を聞かせて貰います!。」

瞬間、なのはの周りに桜色の球体が九つ出来た。

最初に撃った魔力弾だが、数は明らかにさっきより増えていた。

「アクセル…シュ トオオ!!。」

そのまま、魔力弾は放たれた。

女性はシルドで三度防ぐ。

しかしその魔力弾は三つだけだ。

残りの六つは途中で三つずつに分かれ、軌道を変えて後ろの二人に襲いかかる。

後ろの二人は素早く魔力弾を避ける。

スピードは人間離れしており、足に魔力を込め、高速移動をしたようだ。

しかしなのはは、敵を見失わず魔力弾を操り、二人が移動した方向に再び魔力弾を放つ。

ツカサは驚いていた。

魔力弾は誘導弾のようにピッタリと二人を追いつく。

だが、二人も負けていない。

高速移動は更に加速し、訓練室の壁を滑るように、逃げ回る。速すぎる。

ツカサは必死に状況を見失わないように目を配るだけで汗がダラダラだ。

それでも、ツカサはいつもより覚醒した目で今の状況が見えていた。

そう…シ ルドで魔力弾を防いだ女性が、なのは目掛けてチャージを仕掛けてようとしている姿までハッキリと。

「あの二人だけに気を配ると…痛い目に遭いますよ?。」

ドン!と地面を蹴る音が響く。

女性の加速は早く、今にでもなのはに激突する活きよいだ。

でも、なのはに焦りはない。

気づいているからだ。

今この場所には、もう一人がいる事を。

「させるかあああああ!!。」

それはツカサだ。

叫び声と共に、ツカサはなのはの前に立ち、女性をデバイスで殴り掛かる。

女性は慌てずに手のグローブでガードをする。

「…そう言えば…アナタもいましたね…。」

「へへ…忘れるなんて酷いね、綺麗なお嬢さん…。」

ツカサは少し余裕を持つが、女性はそれ以上に余裕であった。

女性は小手を返してツカサのデバイスを掴む。

「い!?!しまった…。」

ツカサはそのまま強烈なパンチを腹に受ける。
痛みはある。

だが一瞬の出来事だ。

ツカサは痛む間もなく、訓練室の壁に飛ばされ、激突した。

「ツカサさん！！！！」

なのはがツカサの心配をし、叫ぶ。
女性はその隙を見逃さない。

「食らいなさい……」

一瞬でなのはにつかみかかる女性。

「く……！」

なのはは何とか反応をし、レイジングハトを構える。

ガシツと女性はレイジングハトをつかみ、もう片方の手を上に上げる。

「精神操作開始……」

直感だが、なのはは理解する。
ヤバい物がくると。

その為、残りの二人に放った魔力弾を一つずつ女性の方に目掛けてコントロールし、背後を狙う。

なのはの魔力弾が女性の後頭部に当たるのが先か、女性が何かを仕掛けるのが先か、スピード対決であった。

「はあああああああ!!。」

なのはの叫ぶ声が響く。

それと共に女性が口を動かし始める。

「マインドコントロール…開始。」

女性が言葉を発した瞬間、なのはの目から輝きが消えた。

「あ……あ……。」

なのはの途切れ途切れの声。

女性の後頭部を狙っていた魔力弾は当たる寸前に消えてしまった。

そしてそのまま、力なく倒れるなのは。

女性は、倒れるなのはを冷たい目で見ていた。

「残念でしたね…私の方が早かったです……。」

なのはが倒れる瞬間に、ツカサは目を覚ます。

驚いたろうな。

自分の意識が飛んでしまった内に、一体何があったんだろうと。

「な、なのはああああ!!。」

叫ぶ。

だがツカサの声に、倒れたなのははピクリとも動かない。

「さて…邪魔者はいなくなりました……次はアナタですね…。」

女性はツカサの方に歩き出した。

なのはの魔力弾に追われていた二人も、なのはが倒れた為に、魔力弾は消え、女性の後ろに戻る。

「チクシヨ……なのはに、一体何をした!!。」

ツカサの叫びに三人は止まらない。
でも女性は口をひらく。

「…彼女は闇に堕ちました…記憶の中にある…暗く…絶望に満ちた記憶にね…。」

そう言っつてツカサに近づく女性。

「では……アナタのロストログア…調べさせて貰います。」

「ぐ……………」

絶対絶滅だった。

ツカサは目を閉じた。

しかし…女性はずかさに触れようとしたが、それは叶わなかった。

「シュワルツフリーゲン！！」

ゴウオオ！！。

風邪を切る音。

それが女性の方に向かう。

女性は後ろに飛んで避ける。

女性の居た場所は鉄鋼みたいな玉が当たり、陥没していた。

「誰ですか…？。」

女性は攻撃が来た方向に顔を向ける。

訓練室のドアの前、立って居たのはツカサが知っている者だった。

「大丈夫か？ツカサ！」

鉄槌の騎士と呼ばれる少女ヴィータ、湖の騎士シャマル、盾の守護獣ザフィーラである。

ワ
ルド・ザ・マジック15（後書き）

ヴィータ達来たあああああ（
。 。 ）

ワルド・ザ・マジック16（前書き）

ちょっと難しい所だったので更新遅れました（T|T）

取りあえず見て下さい（*^o^*）

ワールド・ザ・マジック16

「ヴィータ！シャルさん！ザフィーラ！」

ツカサは叫んだ。

絶対絶滅の状態に今、希望の光が舞い込んだんだ。

それほどヴィータ達の救援が頼もしかった。

「へ…まさかア スラに、何の反応もなく忍び込むとは驚いたぜ…」

ヴィータはそう言ってハンマーを三人組に向ける。

「よくもなのはとツカサをやってくれたな……覚悟は出来てるよな？。」

仲間がやられた為にハンマーを強く握り、怒りを表すヴィータ。

「…お前こそ…私の邪魔した事…覚悟は出来ているか？。」

ヴィータは女性達がこっちに目が向いている事を確認し、ツカサにアイコンタクトをした。

（…！ヴィータが俺にアイコンタクトを！？……まさか、愛してるのサイン！？。）

ザフィーラが吠えた。

同時に地面から白色の突起物が女性達に襲った。

「!!!。」

女性達達は当たる前に後ろに飛んでよけたが、そのお陰でツカサはなのはを助ける事に成功した。

「おい！なのはさん！しっかりして！」

ツカサはなのはを抱き抱え、なのはに呼びかける。
しかし返答はない。

なのはは、ぐったりしたままで目の輝きは消えていた。

「ツカサ！取りあえずなのはを運んで後ろに下がれ！」

ヴィータは女性に攻撃を仕掛けながらツカサに命じた。
シヤマルとザフィーラも残りの二人に捕縛と攻撃を仕掛ける。

「わかった！ヴィータその女性のグローブは危険だから警戒しろ！
！」

ツカサはヴィータに助言を残し、なのはを連れて訓練室の隅に向かった。

ヴィータは頷いて、再び女性の方に顔をむけた。

「……いくら警戒しようが無駄ですよ？」

「へ！…言っじゃねーか…悪いがあたしも負けらんねー…なのはの借り…返してやるぜ！！。」

ヴィータはハンマーを強く握りしめ女性に立ち向かう。

「あたしは時空管理局の空戦部隊所属のヴィータだ！お前の名前は？。」

「……………ライン・レイフォード……………」

女性、ラインはそう答え、ヴィータを向いて構えた。

「しっかりしろ！目を覚ませ！なのは！。」

その頃ツカサは、訓練室の隅でなのはを起こそうとしていた。それでもなのはに意識はない。

「く……………」

ツカサは唇を噛み締めた。自分は何も出来ないのか。なのはを助けられないのかと。

「くそ！……………目を…目を覚ましてくれよなのはあああああ！！。」

声が聞こえた気がした。

荒々しくどこか優しさが入っている声が…

ただ何故か何も感じない。

私はどうなったんだろ…

「……………ここは?…。」

目を覚ましたようになのはが目を開けた。

しかしその目に映った光景は、訓練室ではなく、真っ白な空間だった。

「あ、あれ?…ここはどこ?…私は何を…。」

なのはが辺りをキョロキョロと見渡すが何もない。

そんな状況に理解出来ないのはの耳に、声が聞こえてきた。

『この怪我じゃ…空は飛べないかもしれません。』

「!?!だ、誰ですか?」

いきなり聞こえた声。

その声に更に辺りを見渡すが、人はいない。

だが、沢山の違う声がなのはには聞こえていた。

もう魔道師としては駄目です。

「リハビリは苛酷ですよ…」

「空は飛べなくなる可能性があります。」

「痛いよ……苦しいよ……」

「君はもう何も出来ない…君は全てを失ったんだ…」

動かない……全然足が動かない。

「君は何も…守れない…」

沢山の言葉が一斉になのはに届く。

そのたびなのはの胸が締め付けられ、頭がズキズキとひび割れる痛みが襲う。

「あ……ああ……やめて……やめてええええええええええ！！」

なのはが頭を抱えて張り裂ける勢いで、声を出す。

それでも沢山の声は消えない。
より多くの声がなのはに響く。

「いやあああああ……だ、誰か……誰か……助けてええええええ！」

「!!。」

苦しい。

耳をふさいでも消えない。

頭を抱えて身体を小さく掲げても、声は聞こえない。

「あ……あ……いやああ……やめてええ……。」

もう聞きたくはない。

やだ、やめて。

誰か……誰か助けて。

なのはは、もう涙で顔は、グチャグチャになっている。

「いや……もう……聞きたくない……。」

丸くなって、全てを拒絶するように……なのはが固まる。

『……しろ……な……は……。』

しかし聞こえる声の中で、一つだけかすれた声が聞こえた。

「え……?……」

今までハッキリと聞こえていた声なのに、それだけが途切れ途切れなので、なのははその声に驚く。

『お……ろ……めを……ませ……な……は……。』

更に聞こえる、途切れた声。

なのはは、その声に集中した。

何故その声を他のと違うと感じたから、わからない。

だがなのははその声に耳を傾ける。

『め…あけて…れ…たの…なのは！！。』

聞こえた。

最後の言葉がハッキリと、自分の名前を呼ぶ声が…

「あ……………ああ…！」

なのはは、その声をする方に手を伸ばし、身体を動かす。

わからない。

何故、この声が他の声と違い、苦しく感じないのか、何故荒々しくも優しく感じるのだろうか。

わからないが、それでもその声に向かい身体を動かす。

ゆっくりとゆっくりと、動かす。

進んでいるのかもわからない身体を、ただ動かす。

苦しい…身体が動かない。

それでも動かす。

今のなのはにはそれしか出来ない。

その声にすがりたかっただけかもしれない。

苦しくない、優しいその声に……

『目を覚ませ！！なのはああああああ！！！！。』

今後はハッキリと、声が聞こえた。

その瞬間、心に大きな衝撃が走った。

「……………ツカサさん…？。」

白い世界が終わり、目の前に映ったのはツカサの姿だった。

「な、なのは…？…。」

ツカサは笑顔になに、なのはに微笑んだ。

「良かった……本当に良かった！」

なのはは、そんなツカサを見た瞬間、涙が出た。
なんで出たかはわからないが、そのままツカサに抱きつく。

「う……うわああああああ！！！！。」
そして泣きつく。

大きな声で、苦しかったものを吐き出すように。

ツカサは最初戸惑ったが、それでも優しく抱き締める。

「安心して…もう…大丈夫だから…。」

そんな様子にヴィータは微笑んでいた。

ラインは今まで無表情だった顔が、変わり、かなり驚いていた。

「ば…馬鹿な…私のマインドコントロールが…破れた!?!。」

「へ…どうやらそのマインドコントロールとやらで、なのはを倒したらしいが、残念だったな…。」

ヴィータはハンマーを構えた。

そのハンマーは形を変わってジェットエンジンがついていた。

「あいつら…ツカサとなのはを…甘く見るからだ…くらいな…ラーケテン…ハンマーアアアア!!!!。」

ジェットエンジンから炎が噴出。

ヴィータは回転し、その勢いでラインに突っ込む。

「く……。」

ラインは慌てながら、シールドを展開する。

「あたしは鉄槌の騎手ヴィータ!壊せないものなんてねえええええ

「!!。」

シルドとハンマーが激突した。

「うおおおおおお!!!!。」

ヴィータの叫びと共にシルドにヒビが入る。

「な...!! バカな...。」

バキンとガラスが割れようにシルドが割れ、そのままヴィータはラインに、ハンマーを打ちつける。

「がはあ!!!!。」

「ぶっ飛べえええ!!!!。」

ヴィータの痛恨の一撃。

ラインはぶっ飛ばされ、そのまま壁に激突した。

「!!!! ライン!。」

すると、フードをかぶっている二人の内の一人がシャマルから離れ、ラインの方に駆け寄った。

声からして女性だと感じる。

もう一人の方は無言のまま、ザフィーラから離れラインの方に駆け

寄る。

「ぐ…………仕方ありません…ここは引きましょ…。」

ラインは二人に支えられながら、立ち上がる。

「では…また会いましょう…………皆さん…そして…ロストロギアの男よ…。」

「まで!!逃がすか!。」

ヴィータは加速して、ライン達に突っ込むが、遅かった。

魔法陣が展開され三人の姿は消えた。

「ぐ…………チクシヨ　!!。」

ヴィータの悔しい叫びだけが…訓練室に響いた。
戦いが終わる音に感じられた瞬間だった。

ワールド・ザ・マジック16（後書き）

取りあえず一つの戦いが終わった（＾Ｏ＾）

ワールド・ザ・マジック17（前書き）

戦いが終わって、新たな始まり。

これからお願いします！

ワールド・ザ・マジック17

「うん…大丈夫ね。なのはちゃんに異常は見当たらないわ。」

ピーと、機械音がしている。

場所は医務室、そこにはツカサとシャル、そして検査を受け終わったのはがいた。

「にはは…ありがとうございます。シャルさん。」

なのはは、頭に着いていた装置を取って頭をかいた。

「まあなんにせよ…なのはが無事で良かった…」

ツカサは横からなのはに笑顔で言った。

「あ、ありがとうございます…。」

照れながらツカサにお礼を言うなのは。

若干顔が赤いように感じる。

「さて…なのはちゃんの検査は終わった……次は……。」

シャルはそう言って、もう一つのベットを確認する。

そこにはア スラの艦長である、クロノが眠っている。

彼もなのと同じ、ラインと言う女性にマインドコントロールうけ、意識を失っている。

「…シャマルさん…クロノくんは、大丈夫なんですか?。」

なのはが心配そうに、横で寝ているクロノを見る。

「ええ…一応大丈夫…脳波は安定してる……けどなのはちゃんが話をしてくれた…自分の記憶の中にある闇がまとわり付くのだとしたら、クロノ艦長も回復するのには…時間が懸かるかもしれないわね…。」

そうシャマルが宣告すると、肩を落としなのはが暗い顔になる。

「心配すんな…クロノ艦長なら大丈夫だよ…だからなのはもしっかり休みなよ?。」

ツカサはめげているなのはの頭に、手を置いて撫でる。

恥ずかしいのか、顔を伏せるなのは。

「なのは!!クロノ!!。」

その時、医務室のドアが開き、大きな声を出しながらフェイトが入ってきた。

「フェイトちゃん!?。」

なのはがいきなり入って来たフェイトに驚く。

フェイトは一目散になのはに駆け寄って、なのはに抱きついた。

「良かった……心配したんだよ!?。」

言葉を震わせながら、涙をポタポタ流すフェイトになのはは微笑みをみせ、抱きしめる。

「ありがとう……フェイトちゃん……。」

その様子にツカサはゆっくりと椅子から立ち上がって、医務室のドアに向かう。

途中でシャルさんに、お疲れ様と言われて喜んだのか、シャルに笑顔で手を振って、医務室を出た。

医務室を出て、目の前の壁にツカサは持たれ掛かる。

「はあ……。」

……俺は……何をやっているんだろう……

いくらなのはを救えたからって、少し調子に乗って……

俺は弱いのに……

只の魔道師で、大した実力もないのに。

強かったら……

俺がもっと強かったら…

フェイトだって泣かないで済んだかも知れないのに…

強くなりたいな…

「……………」

背を壁に預けながら、ツカサは考えていた。

強くなりたいと…

強くなって、人を守りたいと、考えていた。

だけど、いくら考えても分からない。

どうすれば、強くなってみんなに…なのは達の実力にたどり着く事が、出来るんだろう。

ツカサは悩む。

時間はどれくらいたったか分からない。

いつの間にか、背中を預けた壁からずり落ちたように、座りこんでいた。

「どうしたの?…ツカサ?。」

そんな時、声が聞こえた。
聞いた事のある声。

顔を上げるとフェイトが立っていた。

なのはとの話が終わったのか、医務室から出てきたみたいだ。

目が赤くなっていて、さっきまで泣いていたのがわかる。

「……………どうしたの？…何か悩み事？…………ツカサが良かったら、私…話を聞くよ?。」

「はは…ありがとうフェイト…ちょっとね。」

ツカサは立ち上がって、フェイトの前に立った。

「なあ…………フェイト…強くなるには、どうしたらいいと思う?。」

「え?…………強く?。」

疑問に思ったフェイトにツカサはさっきまで思った事を、説明した。

「……………そうか…ツカサ…強くなりたいんだね…………。」

「うん…フェイトやなのはみたいに…………なって…強くなりたいんだ…………。」

そう言った言葉に、フェイトは否定するよつに首を降った。

「私は…弱いよ…つよくなんてない…ツカサの方が、私よりずっと強いよ…。」

「な、何言ってるんだよ！俺がフェイトより強いわけないだろ！？。」

フェイトの言った事に全力で否定する。

当たり前だ。

俺がフェイトより、強いわけがない。

「ううん…ツカサは強いよ…私は脆いから…すぐ泣き言を言っちゃうし、今回だってなのはとクロノを守れなかったし…。」

そう言っているフェイトには、再び涙が零れそうになる。

ツカサはそんなフェイトの肩を掴んで、落ち込むフェイトの顔を上げた。

「違う！フェイトは弱くない！無限書庫の時だって俺を守って戦ってくれた！それに俺が上司から責められたら時、俺を庇ってくれた！そんな優しくて強いフェイトが、弱いなんて事はないよ！！。」
ツカサがフェイトにそう叫ぶ。

フェイトは優しく微笑み、肩に置かれたツカサの手を取った。

「やっぱり、ツカサは優しいね…。」

「え?…フェイト?。」

「ツカサは強いよ…今みたいに人の事を見れて、私の事を慰めてくれた…それになのはから聞いたの…ツカサさんが私を助けてくれたって…。」

ツカサはフェイトが言う事を黙って聞いている。

「ツカサは心を…人の心を直してくれる…そんな優しさと、強さがある…だから弱くないよ…私達だってツカサに助けられたんだから…。」

そうか…

何でこんなに落ち着くのかかった。

嬉しかったんだ…

フェイトが俺の事を見て、

言ってくれた事が…

ツカサはさっきまで悩んでいた事が、馬鹿らしくなった。

ただただ嬉しかった。

フェイトの優しさが握られた手から伝わる。

それと同時に、フェイトが愛くるしく感じた。

それを思った瞬間、ツカサはフェイトを抱き締めていた。

「え…？。」

いきなり抱き締められたフェイトは驚いた。

そのため、身体は硬直して手は空をさ迷っていた。

ツカサはそんなフェイトの状態にお構いなしにフェイトの顎を手で上げる。

「あ…ツ、ツカサ……ん…。」

キスをした。

優しく…だけど、激しく。

フェイトは流されるまま、ツカサにキスをされる。

「んちゅ…くちや…ツ、ツカ…ちゅる。」

舌を入れるツカサ。唾液が線のようになって、二人の舌が繋がっているように感じさせる。

「くちや…ちゅ…あん…。」

更に激しくキスをする。

ツカサはフェイトの頭の後ろを手で押して、押しつけるようにキスを続ける。

フェイトは身体が震えていた。

身体と脳が、状況についていけないようだった。

「んちゅ……ぷはぁ…ハア…ハア。」

やっと、ツカサは唇を離した。

フェイトは顔が赤くなっており、呆然としている。

ツカサはフェイトを抱き締めたまま、キョロキョロと辺りを見た。

そして、何かを見つけたように目線を止めた。

目線の先には、資料室と書かれた部屋があった。

フェイトを引っ張って、ツカサが資料室の部屋に入ろうとする。

「…え？…ツカサ？」

まだ、意識がハッキリとしていないフェイトは、ツカサを止める事は出来ずに、そのまま資料室に入ってしまう。

ドアを閉めて、ツカサは奥の方にフェイトを連れて、壁に押し付けた。

「あ……んん！」

そして、再びフェイトにキスをする。

その様子は獣のように、荒々しかった。

「…ん…ちゅる…ぐちゅ…んちゃ…。」

舌を絡ませるスピードは上がる。

フェイトは立っているのがつらくなっている為に、足が震えていた。

「ちゅ……ッ…ツカ……！！？。」

フェイトがツカサの名前を呼ぼうとした時だった。

ツカサの手が、フェイトのスカートの中に侵入したのだ。

「んん！…んん！」

流石に抵抗をしようとするフェイトだが、今のツカサを止めるには力が無さすぎた。

ツカサの手はお尻の方から前に回り、下着の中に入った。

「！？んん！！。」

身体を跳ね上げて、今まで感じた事のない感覚に、更に震える。

それでもツカサの手は、休まない。

フェイトの下着の中を掻き回す。

「ん　！ふう！！んん！！。」

口が、キスによって、塞がれている為に声は出せない。

もしかしたら、ツカサが声を出させないように、考えていたのかも知れない。

フェイトは内股に成りながら、ツカサの行動に耐える。

だが、足はさつきよりも震えていて、本当に限界に近かった。

「ふう…んん…。」

フェイトの声はさつきよりも弱々しいなっていた。

ツカサはそれでも手を緩めない。

もう片方の手で、フェイトの制服のボタンを外し、胸の下着をあらわにした。

「　　！？。」

それに気付くフェイトだが、遅い。

その下着ごと、フェイトの胸を揉み始めた。

「んんん　！！？。」

更なる感覚にまた身体が反応する。

ツカサはそんな反応が目に入っていないように、両手を動かす。

「……ん……。」

目が半開きの状態のフェイト。

赤い顔はもう沸騰したような状態になっており、涙が目に溜まっていた。

しばらくして、ツカサは唇を離した。

「……ハア……ハア……。」

フェイトは目の焦点が合っていなかった。

「フェイト……いくよ?。」

ツカサも口を開くが、まるで意識が無いようにつぶやいた。

そして、ズボンのベルトを取る。

そんな時、資料室のドアが開いた。

二人はビクツと身体を動かし、意識をハッキリさせた。

資料室に入って来た人は近くにあった紙を取って、そのまま出て行く。

フェイトはその男性が出ていったタイミングを計らって、ツカサを押しつけて、資料室から出て行ってしまった。

「あ…!。」

ツカサは止めようとしたが、間に合わず手が空を切った。

そして、資料室にツカサは取り残された。

「あああああああ!! やっちゃったあああああ!!。」

冷静な状態に戻ったツカサの叫びだけが、資料室に響いた。

最近マトモだった為に、性欲が溜まっていたから暴走しちゃったのさ…

b y ツカサ

ワルド・ザ・マジック17（後書き）

久しぶりのエロ全開

至らないかも知れませんが、宜しく願います。

また見てなのは（＾Ｏ＾）

ワールド・ザ・ミュージック18（前書き）

ツカサの悩める現状…

始まります。

ワールド・ザ・マジック18

澄み渡る、綺麗な空。

今日は快晴である。

「じゃあ、お茶を入れるから待っててね、ツカサくん。」

そんな晴れ晴れとした日。

はやての家にはソファで寝っころがっているツカサと、お茶を入れようと台所にいるシャマルがいた。

「あ……ありがとうございます……シャマルさん……。」

今日はアースラでの仕事はなく、のんびりと家で過ごしていた。

こんな状態なのはクロノ艦長が、意識を失っているのがあるからでもある。

艦長の身動きが取れないのなら、流石に艦は機能が低下してしまう事が一番の決め手ではあった。

クロノが動けない今は、とりあえず我慢するしかないが、一応代わりの艦長が必要なので、はやてがその代わりをやる事となった。

そのため、はやてはシグナムと一緒に艦長代理の許可を貰うために、本局に行っていた。

ヴィータはザフィーラと一緒に近所に散歩に出ている。

そんな訳で、今の家にはシャルとツカサしか居なかった。

だが、今のツカサにはこの状況はまずかった。

（ああ、シャルさんのエプロン姿、可愛いな……やばいな……ムラムラしてきた……。）

このように、前の時にフェイトを襲ってしまってから、ツカサの性欲が殆ど限界状態に近い形に……つまりは性欲が、更に激しく強くなってしまったのだ。

そのために、最近では少しでも女性が近くに感じると、急激な性的欲求に駆られてしまうのだ。

しかも今回は二人つきりな状況な為、更にツカサの欲求は強くなってしまっているのだ。

（くそ！……勘弁してくれ……前のフェイトの時みたいにはなりたくない！……だけど……チクショ……。）

ソファアを握りしめ、下唇を噛んで自分の欲求と戦うツカサは、顔が真っ赤になって耐えていた。

「ツカサくん！お茶もうすぐだからね、待っててね。」

そんな時にシャルがツカサに微笑む。

シャルからは、ツカサがお茶を待ちれないように見えたんだと思える。

ただ今回はまずかった。

そのシャルの笑顔がツカサの、最後の理性を破壊してしまったのだ。

「……………」

ツカサは無言で立ち上がり、シャルの居る台所に向かった。

「ん？…どうしたの？ツカサくん？」

いきなり台所にツカサが来たので、シャルは手を拭いてツカサの方を向いた。

「お茶ならもうできるから待つ……………ん！？。」

シャルの言葉を遮るようにシャルの唇を奪うツカサ。

そのまま手を腰に回し、シャルのお尻を触り始める。

「ん……………ぶはあ！……………だ、駄目……………いきなりこんな……………」

シャルは抵抗をしようとするが、ツカサに台の上に押し付けられ、身動きが取れなくなる。

「シャ、シャマルさん…俺…我慢出来ない。」

息を荒くしながら、シャマルの上着を上によらずらし始める。

「きゃあ!。」

小さな叫びを上げて、身体をビクと震わす。

ツカサはゆつくりと、上着をずらす。

白く、みずみずしいシャマルの肌が露わになっていく。

そしてツカサは、胸の辺りに近づいた上着を一気に捲った。

黄緑色のブラジャ　が、ツカサの目と鼻の先に現れる。

「…やっぱり…シャマルさんの胸…大きい…。」

「うゃ……ツカサくん…恥ずかしいよ…。」

シャマルは赤くなった顔を隠すように、両手で覆う。

それでもツカサはお構いなしに、シャマルのブラジャ　を外す。

「綺麗だ……。」「そう呟きながらツカサは、シャマルの胸を揉み始める。

「あう!…そ、そんな強く揉んじゃ…。」「

シャルは必死に、出てくる喘ぎ声を抑えながら喋る。

「…素直じゃないですね…シャルさんは…。」

耐えている状態のシャルに、更に興奮を感じたツカサは笑みをこぼしながら、シャルのスカートのチャックを外す。

「あ!…。」

ツカサの素早い行動に、止める間もなくシャルはスカートを脱がされてしまう。

「…可愛いパンツですね…。」

ツカサの笑みは先程よりもいやらしくなり、指でパンツをなぞるように触る。

「あ!…!…やん!…。」

可愛い声あげるシャルに、ツカサは悪戯心を刺激されたように目を細めた。

「あゝ…もしかしてシャルさん…感じちゃいました?。」

ツカサの言葉にシャルは真っ赤になった顔を手で隠し、首を横に振った。

「ふふ…嘘が下手ですねシャルさん…本当は気持ちいいんですよ?。」

そう言いながら、シャマルの秘部をなぞる指を強める。

「ひゃうん!!..」

声を強く上げるシャマル。

ツカサは唾を吞んで、鼻息が荒くなる。

そして本能のままに、シャマルの足を掴み、シャマルの股を広げる。

「やあ!そんな広げちゃ駄目!!」

シャマルは声を大きくするが、ツカサには本当に嫌がってるようには見えない。

「へへ...本当は...俺のが欲しいんでしょう?」

ツカサはシャマルの広げた足を身体で抑えながら、自分のズボンのベルトを外して脱いだ。

「だ、駄目...そんな大きいので...入らないわ...」

シャマルは顔を横に振って無理だと、答える。

「大丈夫...優しくしますよ...」

ツカサは笑顔でシャマルに返し、ゆっくりと下着をおろそうとする。

「ただいま。」

そんな時だった。

ヴィータとザフィーラが帰って来たのは…

（ぎゃあああああ！！嘘だああ！！ヴィータ達ただけタイミングいいんだよ！！。）

そしてツカサは思った。

もし、ヴィータが今の状態を見たら……

殺される…

ツカサは素早くシャルを立たせ、ズボンを掃こうとする。

シャルも慌てながら、スカートを掃き上着を元に戻す。

「シャル、ツカサ居るか。」

そしてヴィータが台所に入ってきた。

「やあ！ヴィータ！お帰りなさい！」

ギリギリセ　フだった。

息を荒くしながら何とかヴィータと話す。

シャルマルは顔を赤くしながらも、笑顔でヴィータを迎える。

「ああ……た、ただいま……」

ツカサ達の雰囲気になんとなく押されるヴィータだが、一応返事をする。

「あ……そうだ……ツカサ！」

するとヴィータはツカサに何かの紙を渡す。

「ん？…ヴィータ…何これ？」

「それは前に訓練室に、敵が攻めて来た時の報告書だよ……なのはが忙しいから、お前が変わりに出してほしい……補足付きでな。」

ツカサはあんぐりとして、その場に崩れ落ちた。

（……まじかよ……それじゃ…シャルマルさんとエッチの続きが出来な

い…。」

落ち込む理由はもうだれもが想像出来る。

頼むからまともな考えをしてくれと思う。

とりあえずツカサは落ち込みながら、ア スラに行く為に家を出る。
シャマルはそんなツカサを見て、苦笑いしながら手を振って、見送った。

そして場所は変わり、現在ツカサが居るのはアースラ。

「はあ、全く補足するのに質問しすぎだよ…。」

ため息を付きながら、廊下を進む。

報告を終えたらしいが、結構掛かってしまったらしくツカサは面倒くさそうにしているのだ。

「まあいいや…早く帰ろう…。」

そう言って、背伸びをしながら進む。

だが、ツカサは動きを止めた。
ツカサの目線の先には、訓練室があつた。

「あれ…？…訓練室に灯りがある…誰か居るのか？」

珍しいなと思った。

今のアースラは殆ど人が居ない。

気になったツカサは訓練室の扉を開けた。

「ん？…ツカサさん？」

中に居たのはジャ　ジ姿で、柔軟体操をしていたのはだった。

「あれ？なのは？…もう体調はいいの？」

「にやはは…何とか大丈夫です…それに身体を少しでもほぐしておきたいので…」

そう言って再び、柔軟を開始する。

「まあ…あんまり無茶は駄目だよ？」

「は〜い……。」

柔軟体操をしながら、返事をするなのは。
見ると以外と身体が堅そうであつた。

「……なのはって…身体堅いの?。」

「うにゃ!?!…そ、そんな事ないですよ!。」

ワタワタと慌てながら、なのはが否定を始める。

「じゃあ…手を床につけてみてよ。」

ツカサが挑発じみた事を言った。

ちよつとムツとしたなのはは、手を床につけようとする。

だがつかない。

「あはは駄目じゃん!。」

ツカサはなのはを笑つたが、急に笑いを止めた。

（な!…前屈みになつてゐる為になのはのお尻がいやらしく突き出
てるだど!?!?。）

コイツは何を見てるんだ。

だがなのはが前屈みになっているので確かにお尻は突き出てはいた。

ツカサはさっきのシャルとの状況を思い出す。

しかも二人つきりだとも気づいた。

（駄目だあああああ！過ちを再びやる気かあああああああ！！。）

ツカサは手をつねり、何とか耐える。

「はう…やっぱり駄目だあ」。

なのはは、届かなかったらしく諦めた。

（た…助かった…。）

さっきまでの体勢だったらツカサはもう理性がなかっただろう…

深呼吸を済ませ、心を静める。

「あ！…ツカサさんケーキが有るんですけど、食べます？。」

なのはは、そんなツカサの考えている事はいざ知れず、笑顔でケーキの箱を出す。

ツカサは思った。

自分の今の、精力欲求全開状態を何とかしないとこの先、フェイトにも謝れないし、もしかしたら捕まってしまうぐらいヤバくなってしまっかも知れないと…

ワルド・ザ・マジック18（後書き）

さあツカサは溢れる性欲を押さえる事が出来るのだろうか!？

ワールド・ザ・マジック19（前書き）

ガンダムの映画見てきました。

面白かった（。。。）

まあとりあえずワールド・ザ・マジック始まります。

ワールド・ザ・マジック19

「あゝ…地獄だあ…。」

壁にもたれながら、進んでいるのは、ツカサだ。

彼は今、精神的にかなり辛い状況に立っていた。

ツカサは今、性欲全開状態を完全に抑えこもうとしている。

だが、それは簡単ではなかった。

はやての家の住民は殆どが女性だ。

そのためツカサは毎日、耐えなければいけなかった。

だから家で二人っきりの状態の場合は、自分の身体を痛みつけても我慢するしかなかった。

危ない時は風呂上がりだったヴィ　タを襲いそうになってしまったのだ。

ギリギリで理性を保ち、何とかあったが…

部屋に居る時は、妄想だけで何とかしのいでいた。

考えるだけで、自分の大事な所が大きく破裂しそうだったのが、一

番大変だった。

（へへ…でもお陰様で、前みたいにすぐ暴走しなくなったぜ…。）

まあとりあえず、今では耐えているのに慣れて、女性と二人っきりでも理性を保つ事が出来るとこまで、戻った。

（……でも問題は…まだ有るんだよな…。）

そつ…この俺、ツカサ・ラグーンは必死の努力を重ね、すぐ女性を見ると襲い掛かる衝動を押さえる事に、成功した。

自分でも成長したもんだ…

とまあ、結局エロくて、妄想する所は変わらないけどね…
前の俺に戻っただけだ。

つまり、サ ヤ人のようなものだ。

スーパーエロイ人からエロイ人に戻っただけである…

いや…こんな解釈はどうでもいい。

それより俺が困ってるのは、フェイトに謝れない事だ。

せつかく謝ろうとするが、フェイトは俺の姿を見ると素早く逃げ
しまう。

あれは泣いた。

俺が悪いのはわかっているが、流石に心が折れそうだ…

（はぁ……俺、一生フェイトに嫌われたままなのかな…。）

ツカサは黒いオラを出しながら、ブツブツと呟く。

そんな時、いつもの部屋……訓練室に明かりが付いていた。

「…なのはか？」

自分でも、訓練室に来るのは日課になっているようだ…

そう思いながら、ツカサは訓練室に入る。

「あ！…ツカサさん。」

そこには案の定、ジャージ姿のなのが、柔軟体操をしていた。

「今日も柔軟体操か…真面目だななのは。」

「やっぱり、毎日やらないと駄目ですからね。」

なのはは、体操を終えてゆっくりと立ち上がった。

「さてと…休憩なんですけど、ツカサさんも座ります?。」

ベンチに腰かけて、ツカサの座れるスペースを作る。

「ありがとう…座らせてもらうよ。」

空けられたスペースにツカサは座る。

「…ツカサさん…元気がないようですが、大丈夫ですか?。」

ツカサの顔をなのはが覗き込んで、尋ねる。

「あ…ちょっとね…。」

言える訳がなかった。

高まった性欲を押さえこんだ為に、精神的に参っているのと、フェイトに避けられていている事がとても堪えているなんて…

「…もしかして…フェイトちゃんの事ですか?。」

凶星をいきなり突かれた。

ツカサは焦ってなのはから顔を背ける。
それが肯定している事になってしまう。

「……やっぱり……最近、フェイトちゃんがツカサさんを避けているように感じたので……。」

なのはの言葉に、ツカサに矢印のようなものが刺さっているように感じる。

「ツカサさん……フェイトちゃんと何があつたんですか?。」
心配した様子でツカサなのはが、理由を聞こうとする。

しかし、言える訳もなくツカサは顔を下に向けて、黙り込んでしま
う。

「……言いたくないなら構いませんが……ツカサさんはどうしたいん
ですか?。」

「……俺が悪い事した……だから、謝りたいと思っている……。」

小さく呟きながら、ツカサが答える。

「それなら…そのまま謝れば大丈夫ですよ。」

「……だけど…フェイトは俺から逃げちゃんうんだ……。」

ため息を吐いて更に肩を落とす。

「だからって…諦めちゃうんですか?。」

ツカサは苦い顔をした。

そのまま諦めてしまうのはヤダ……

だけど……

「大丈夫ですよ。」

心配しているツカサに、優しくなのはが呼びかけた。

「諦めてないなら、謝れるまで頑張ればいいんですよ。」

頑張れか…

確かにそうだとツカサは感じた。

「言葉は伝えないと、絶対に伝わりません…嫌な事、楽しい事、悲しい事、友達になりたい時…そして、謝りたい時もです… ツカサさんが謝りたいのなら…やっぱり伝えないと、フェイトちゃんにわかってもらえませんよ?。」

笑顔で答えてくれたなのはに、俺は安心したのだと思う。

さっきまで不安だった気持ちには、少なくなっていた。

「…そうだな…なのはの言う通りだぜ!諦めてないで…フェイトに謝ってくるよ!。」

そう言ってツカサはベンチから立ち上がり、駆け出した。

「頑張ってくださいね…。」

なのはは、駆け出したツカサの背中を見送りながら呟いた。

「よし！フェイトを探すぞ！」

とりあえず廊下に出た俺は、フェイトを探す事にした。

キョロキョロと辺りを見ながら、廊下を進む。

スークになった気分だぜ。

ダンボールがあつたら完璧だな。

などと馬鹿な事をほざきながら、前に進む。

そして、前方に書類を抱えて歩いている、フェイトを見つけた。

「フェイト！」

俺はその瞬間にフェイトを呼んだ。

案の定、フェイトは俺の姿を見たら、全力で逃げ出した。

「逃がすかああ!!。」

しかし俺は、そのまま逃がす事はさせない。

フェイトが逃げ出した方向に向かって走りだす。

流石に男性のスピードには適わないようで、差はどんどん縮まってい
いく。

だが、フェイトは諦めずに加速する。

でも問題がある。

フェイトが履いている靴は、ハイヒルなのだ。

そんな靴で加速なんてしたら…

「あ!…。」

そりゃ転けてしまいますよ。

「危ない!フェイト!。」

俺は跳んで、フェイトを抱きかかえた。

背中de滑りながら、何とかフェイトを助ける事に成功する。

「良かった…怪我ないか？フェイト？。」

「あ……うん…。」

フェイトは顔を赤くした。

もしかして前の時の事を思い出したのかもしれない。

俺は一旦フェイトを、立ち上がらせてそのまま頭を下げた。

「ごめん！！……あんな事をして…フェイトの気持ちを何も考えないで…俺最低だった……許さなくてもいい…でも謝らせてくれ！！。」

今、ツカサに言える最大限の謝りであった。

「………………。」

フェイトは黙って謝っている姿のツカサを見ていた。

そしてその顔は笑顔になった。

「…許すよ…ツカサが、私の気持ちを考えて謝ってくれたんだから。」

そのままツカサの手を優しく握った。

温かく…柔らかい優しい手であつた。

「…ありがとね…謝ってくれて…あとごめん…ツカサを避けて…。」

フェイトは申し訳ないようにツカサに謝る。

「……いや…ありがと…フェイト。」

嬉しかった…

フェイトが許してくれた事が…

自分を嫌ってなくて…

笑いながら二人の声が廊下に響いて、穏やかな雰囲気包まれた。

そんな時に、二人の笑い声を消す放送が流れた。

緊急警報！緊急警報！……管理内09地区にて、ロストロギアの反応を感知！…ロストロギアの通称は………【ビースト】！。

警報が鳴り終わった時には、フェイトとツカサの笑い声は消えていた。

ワールド・ザ・ミュージック19（後書き）

次回から新展開（＾Ｏ＾）

ワールド・ザ・ミュージック20（前書き）

これからの展開…どうなっていくのか！

更新遅れてすいません（ ）

ワールド・ザ・マジック20

「ほな…とりあえず書類は終わったな。」

今、現在の場所はア スラ。
その食堂で書類を見ているのは、艦長代理の八神はやてだ。

「はあゝ疲れたわ。」

はやてはぐぐつと背伸びをした。
彼女は、食堂で書類の整理をしていたのだ。
横には食べ物が乗っていた食器があり、食べながら仕事をしていた
と考えられる。

食堂には彼女しかない。
他の人はすでに食べ終わっていて、居なくなっている。

はやては食事の時間も仕事しているのは、仕事におわれているからだ。
だ。

その理由はロストログアである。
ツカサの胸に埋め込められている、ロストログアのビーストが他に
発見されたのだ。

現段階では、三つ見つかっている。

その前ではツカサのビーストだけだと思われていた。

そのため、管理局は混乱していた。

とりあえず、見つかったロストロギアは今、調べられていて一週間後に本局に運ばれるようだ。

その時、ア スラも、護衛の為に人員を出す事になるだろう。

だからこそ、今の艦長代理のはやても苦労しながら、いろいろな事を考えていた。

（…もし…ロストロギアを警護する時は、やっぱり彼らの存在が不安要素やな…。）

そう言うはやての横には三枚の書類があり、一つ一つに違う人の名前が書いてあった。

前に無限書庫を襲い、フェイトとツカサと対峙したエリア・スクアル、プリス・キアルア、それに訓練室で、ツカサを目的に侵入してきた、ライン・レイフォードの名前が記されていた。

（彼らの存在は未知数… 実力ではフェイトちゃんとなのはちゃんに
ほぼ互角以上……。）

目頭を抑えて、ため息を吐く。

食堂がガラガラな為に、ため息まで大きな声のように響いている。

（しかし… 何者なんやろうな… 名前を管理局のデータベースで調べたのに、全く出てこなかったし… 監視カメラの映像で、顔からも調べたけどそれさえもデータベースは見つけられなかった…。）

顎に手を当てて難しい顔になる。

最近のはやては、考え事だけが頭の中でグルグルと渦巻いていた。

コレだけの事を考えているはやては、自分が艦長代理と言う立場であるので、休むことはほとんどない。

クロノ艦長もコレだけ苦労をしていたんだなと、実感できる。

（はあ… ホンマに疲れるな…。）

テーブルに頭を乗せ、グダアとただれる様子のはやて。

そんな時、はやての横に、トンと言う音がした。

はやてが横を見ると、カップに入ったコ ヒが置かれていた。

「疲れた顔をしてるね…これでも飲みな。」

そしてコ ヒが置かれると同時に、男の声が聞こえた。

はやてが顔を上げると、ツカサが笑顔で立っていた。

「あれ？…ツカサさん…なんで食堂に？」

はやては机に突っ伏しながら首を傾げた。
食堂には自分しかないと思っていたからだ。

「いやゝはやてが食堂で一人だけで書類を見てたから気になって…。」

そい言いながらツカサははやての隣の席に座る。

はやてはゆっくりと背伸びして、ツカサの方に顔を向けた。

「いやゝ仕事が大変なんやよ。それに今はライン達も居らへんし、一人でやるしかないんや。」

困った顔をしながら、ツカサから貰ったコ　ヒイを飲む。

「そつか……まあ無理は良くないよ。だってこんなに肩こってるだしさ。」

いつの間に移動したのか、ツカサははやての後ろに居て、肩をもみはじめた。

「うひゃ！つ、ツカサさん！？。」

いきなりに肩を揉まれたので、ビクツと身体を跳ねさせる。

「あゝあ、若いのにこんなにこつちゃてゝ。」

「あ、やん！く、くすぐりたい！。」

身体をクネクネさせて、ツカサの肩揉みから逃れようとするはやてだが、ツカサは逃がさない。

「はは、可愛い反応だな。ふうゝ。」

ツカサはイタズラ心を刺激されたか、はやての耳に息を吹きかける。

「ふぁ！？何すんや　　！！。」

はやてはいつもの大人しい状態から、珍しく叫んだ。

「もう！ツカサさん仕事の邪魔するなら、やめて下さい！」

頬を膨らまし、ツカサを睨みつける。

しかし怖くはない。

むしろ可愛い。

「あはは、ごめんな、はやて。じゃあ俺は行くわ。」

ツカサは手を振って、食堂をあとにした。

「もう……。」

ムスツとしながらも、はやては書類の方に向いて、再び仕事を再開する。

しかしはやての顔は笑顔になっていた。

「さうて、はやてには食堂を追い出されちゃい、どこに行こうか。」

一方のツカサは、まるでアルプスの少女さながらのスキップをしながら、廊下を移動していた。

そしてある場所で、足を止める。

そこは訓練室、もう完全に学校に行くように習慣になっている。

「なのはが居る?。」

ツカサは訓練室に入って、なのはが居るかどうか確認する。

案の定なのはは、魔道師の格好して、訓練室にいた。

「あ!ツカサさん。」

なのはも入ってきたツカサに気付いて、手を振った。

「今日も訓練、大変そうだね。」

「まあそうしないと、駄目ですからね。常に万全じゃないと!。」

そう言つて、両手でギュツと拳を握つて、なのはが微笑む。

ツカサは可愛らしい顔のなのはに、内心悶える。

「それに、ロストロギアの護衛もあるしね…気を引き締めないと…」

「

そう言うのはだったが、どこか不安そうな顔になる。

やはり護衛の事が心配なのだろう。

ロストロギアのビストとなれば、やっぱり前にツカサを目的にしていた連中と、再びあいまみえる事になる可能性は高い。

なのはは、その連中の一人に負けてしまった。

だから、少し心配になっているんだろうと思う。

ツカサもそれがわかつている為、なのはの心配が理解出来ていた。

「安心しなよ、なのは。護衛にはフェイト達もつくんだらう?。」

ツカサは笑いながら、なのはの頭の手をおく。

「仲間の存在だけで、安心がある。仲間の数だけ、強さがある。仲間の心だけ、勇気がある。だからお前もそうしろ。それが仲間ってもんだよ。」

ポンポンと頭な手を叩いて、なのはの目を見つめる。

なのはは、顔を赤くしながらも、ツカサの言葉で笑顔になる。

「にはは…ありがとう。ツカサさん。」

さっきまでの不安そうな感じは、なのはからは、消えていた。

ツカサはそれが確認出来て、安心した面もちになる。

「じゃあツカサさん、またケ キあるから食べます?本当はフェイトちゃんと食べる予定だったけど、フェイトちゃん仕事で本局にいるから。」

そう言って、袋に入っていたケ キの箱を、取り出す。

「おう…ありがとう。」

ツカサとなのはは、ベンチに座り、ケキを食べる。

ツカサは思っていた。

みんな、ロストロギアの事で困っている。

だから少しでも、みんなの心を休めて、安心させたいと。

今の自分には…それしか出来ないから………そう思いながら…

「みんな、集まったか?。」

暗い部屋、男の声が響く。

その声の後に、奥から四人の人影が、姿を現す。

「…集まったか…」

人影を確認して、男は前にあるモニターの前に立つ。
モニターの光で、その男…エリア・スクアルはハッキリと姿を映し出す。

「ぷーちゃんとみんな集まったよ。」

手を広げながら、軽い感じで答えるのは、プリス・キアルだ。

「さて…全員集まったならば…話を進めましょう。」

それに続いて、水色の瞳をした女性、ライン・レイフォードが言葉をだす。

「わかっている…あと、レイスとギルク…お前達の準備は出来ているか?。」

エリアはまだフドをかぶった、二人にそう言った。

そして二人はエリアの言葉にゆっくりとフドを取った。

一人は金髪のロングで、どこかキツそうな目をしているが、何故か優しいそうに見える女性だった。

「ええ…大丈夫ですよ、エリア…準備は出来ています。」

女性の名前は、レイス・バルコニー。
と言っ名前だ。

「……………こつちも出来ている……………」

静かに答えたのは、黒髪にサングラスをかけた、静かな男性。
名前はギルク・ナルタ ジである。

「そうか…わかった。」

エリアは二人の言葉を聞き、モニターの方に顔を移す。

モニターには、地形図のような物が、映し出された。

「さて…ロストログニアは三つ見つかった。これは予想通りだ…管理局が見つけてくれるのを計算に入れていたからな。」

説明をしながら、エリアは地形図の場所を指差した。

「そして、ロストログニアは現在、施設で調べられている。だがその場所は、転送装置がなく、転送装置がある場所まで、車とトラックで移動するだろう。」

エリアの説明を、四人は真剣に聞いていた。

「そして…護衛付きのトラックの通り道はこの場所だ…。」

指で通り道の所を表す。

「……………いいな？…これはロストログアを奪うチャンスだ…絶対に成功させる。」

エリアの静かに言うと、四人は頷いた。

「奴ら、管理局が動くのが四日後…その時……………作戦開始だ……………。」

ワールド・ザ・ミュージック20（後書き）

奴らは動き出す。

さあ一体、どうなるか。

お楽しみに！

また見てなのは（＾Ｏ＾）

特別編・ツカサの妄想日記2（前書き）

第二弾ツカサの妄想日記始動！

あと七万アクセス突破！（
）
ありがとうございます。

特別編・ツカサの妄想日記2

「よし。今日も日記を書くか!。」

ツカサはペンを手に取り、日記を書き始める。

これはツカサが寝る前に、必ず書く日記である。

「じゃあ、今日はフェイトの妄想でも書くか!。」

しかしその内容は妄想日記と言う、とても馬鹿げた日記であった。

「レッツゴー妄想の世界へ!。」

さて、ここからツカサの妄想が始まります…

十月十二日

俺は今、フェイトの部屋の前に立っていた。

手に滲んだ汗を服で拭い、息を吐く。

目の前の扉に立つだけで、こんなに緊張するとは思わなかった。

中ではフェイトが、俺の事を待っている。

俺は緊張しながらも、ゆっくりとドアを叩いた。

少しして、部屋の中から、スリッパのパタパタと言う音が、ドアに近づいてきた。

そして、目の前の扉はガチャンと音と共に鍵が開き、中からエプロン姿のフェイトが出て来たのだ。

「ツカサ！待ってたよ。」

フェイトは俺の姿を見ると、待っていたと言わんばかりに、笑顔で迎えてくれた。

俺は礼をして、フェイトの部屋に入った。

「じゃあ、お茶を持ってくるから、ツカサはここに座っててね。」

フェイトはそう言うと、台所に向かう。

俺は言われた通りに、ソファに腰掛けた。

自分とは違う、女性の匂いがする部屋。

思わずキョロキョロしてしまい、明らかに挙動不審な感じであった。

しかも、フェイトのエプロン姿はかなり可愛く、そっちの方にも視線がいつてしまう。

「はい、どうぞツカサ。」

俺がそんな事を考えてる内に、フェイトはお茶を持ってきてくれた。

とりあえず俺は、さっきまで考えた事を忘れ、出されたお茶を飲む。

味は結構濃い方だったが、なかなかいい葉を使われているのがわかる。

「…どうかな？新しい葉を使ったんだけど…。」

フェイトは指をモジモジさせながら、俺に味を聞いてきた。

俺は、結構いけたよと答えると、フェイトは笑顔になって喜んだ。

「良かった！味の方心配だったんだ。」

胸に手を置いて、一呼吸するフェイト。

どうやら心配していたのが、とれたようだ。

俺はそこまで考えてくれていたフェイトが、可愛く感じて頭を撫でた。

「あう…。」

恥ずかしかったのか、フェイトは顔を赤くして伏せる。

「と、とりあえずアップルパイもあるからもってくるね！」

フェイトはツカサの手をどかして、再び台所の方に行ってしまった。

俺はそんなフェイトに微笑みながらも、台所から匂ってくるアップルパイの匂いにお腹を反応させていた。

「はい、アップルパイ。焼きたてだよ。」

アップルパイを笑顔で持ってくる、フェイトはさっきの事があるの

かまだ顔が赤かった。

俺は置かれたアップルパイを前に、手を合わせて、いただきますをした。

そして、一口。

パイのサクサクとアップルのトロリとした感じがマッチしている。

「どうかな?。」

フェイトが聞いてくる。

俺は素直に美味しいと答えると、フェイトが良かったと喜ぶ。

「初めて作ったやつだったし…お茶よりも心配だったんだ。」

そう言いながら、アップルパイを切って俺に渡してくる。

フェイトは食べないのか?と聞くと、頭を縦にふった。

「私はいいの。ツカサが全部食べて。」

俺はそう言われて考えた。

そして俺の頭の中で、フェイトに対するイタズラかスケベ心が目覚めた。

まずアップルパイを口に含み、そのままフェイトの顔をこっちに向

けさせた。

「え?。」

驚くフェイトを無視して、唇を奪う。

「むぐ!。」

俺はそのまま、フェイトを抱きしめてアップルパイを口に流し込んだ。

「ふぐ…ちゅ…じゅる!。」

フェイトは訳がわからないのか、俺に何の抵抗も出来ないままアップルパイを、流しこまれた。

「ん…………ふはあ!…ゲホ!…な、何をするのツカサ!!。」

フェイトは赤くなっただまま、俺を睨みつけるが、今の俺にその表情は更に興奮させるだけだ。

「っ、ツカサ?。」

俺が何とも言わず、フェイトの前に立ち上がる為に、フェイトは少し体中を震わす。

それにより、更にフェイトに対する興奮を上げてしまった。

俺はフェイトの目の前で、ズボンのチャックを下ろして、ある物を出した。

「!?!?そ、それは...」

フェイトは赤くなり、顔を隠すように手を出す。

でも、俺はその手をどけて、自分のある物をフェイトの顔に近づけた。

「はっ!...や、やめ...んぐ!」

そしてフェイトの顔をつかみ、口に物を突っ込んだ。

「ん!...ぐちゅ...ちやく!」

俺は腰を動かし、そのまま口に出し入れを繰り返す。

苦しそうな表情のフェイトが、また俺の性欲を高める。

「んぐ!...ぷっは!」

少しして、俺は物を抜き、フェイトを押し倒した。

「ひゃあ!…っ、ツカサ…。」

目がとろんとしていたフェイトに俺はもう我慢出来ずに、物をそのまま…

ハックション!

ベリベリ!

しかしその前にくしゃみと何かが破れる音が聞こえた。

「ぎゃああああ!…!日記iiiiiiii!。」

ツカサは日記をくしゃみの拍子でやぶってしまいました。

おしまい。

特別編・ツカサの妄想日記2（後書き）

ふう またやっちまたぜ！

でもまたのごとく、後悔はしてないぜ！

ワールド・ザ・マジック21（前書き）

更新しました。いやゝ寒くなりましたね。これから頑張ります。

ワールド・ザ・マジック21

「…ロストログアの護衛まで、あと三日か…。」

カレンダーを見上げているのは、ヴィ　タだ。

いつも以上に目を細め、ヴィ　タは気が入っていた。

今でも、空気がピリピリ感じる。

それはロストログアに対する護衛の重大性と、危険性をヴィー　タ自身が表しているようだ。

それもそのはず、もうすぐロストログアの運搬を、護衛する大事な任務をやるからだ。

その為、他の者達も準備をし、その日に備えて動いていた。

「よし…アイゼンの手入れでもするか…。」

ヴィ　タはため息を吐いたあと、ソファ―に腰をかけてデバイスの

様子を見始めた。

「おはよ、ヴィ　タ。」

その時、部屋からツカサが出て来た。

起きたばかりなのか、髪はたっていて目はショボショボしていた。

「おはよ。早く顔洗え、ひどい寝癖だぞ。」

ヴィ　タがそう指摘すると、ツカサはゆっくりと洗面所に向かった。

ツカサに言い聞かせたあと、ヴィ　タはデバイスの整備に戻った。

水の流れる音が止まり、ツカサは洗面所から出てくる。

「ふう… すつきりした〜。」

そう言いながら、ツカサもヴィ　タの腰かけてるソファ―に座る。

「ん？デバイスの整備をしてるの？。」

ツカサが質問をすると、ヴィ　タは振り向いて頷く。

「そつだよ。もうすぐ、大切な任務があるからな…気をひきしめないと。」

ツカサはそう答えたヴィ　タに、少し困ったような顔をした。

「…まあ、ヴィ　タの言うとおりなんだけど、そんなにピリピリしてたら疲れちゃうだろ?。」

その言葉を聞いたヴィ　タは眉間にシワを寄せて、ツカサを睨んだ。

「あのな…任務があんだし、仕方ないだろ!それに私はピリピリ何てしてねー!。」

ヴィ　タの言い分にツカサはため息を吐いて、頭をかいた。

「いいや、してる。空気がピリピリしてるほどにな。俺が言ってるのは、空気まで重苦しいのじゃ駄目だって事だよ。」

「う……………」

ヴィ　タは言葉に詰まり、ツカサから顔を背けた。

一方のツカサは指をおって、何かを数えてた。

「それにヴィ　タだけじゃなく、なのは、フェイト、はやて、ザフィーラ、シャマル、シグナム、リインもみんないつも通りのようにピリピリしてるじゃ。」

そう言って、ヴィ タの身体を自分の方に向ける。

「な、なにすんだよ!?!。」

ヴィ タはツカサに抵抗するが、簡単に身体を向けられてしまう。

「だから…詰め込むなつての。俺も任務の時、仲間がガチガチの奴いてさ…そう言った連中は怪我だったりしていたぜ? ヴィ タ達もそんな目にあってほしくない…。」

「……………」。

ツカサの言う事に、ヴィ タは無言になって、俯いた。

そして、ため息をはきながら、顔を上げてツカサを見た。

「あ わかったよ!。」

そう言ったヴィ タに、ツカサは笑顔になって頭を撫でた。

「良かった良かった。ありがとうなヴィ タ。」

ヴィ　タは撫でられた事が恥ずかしかったからか、顔を赤くしてツカサの手を払った。

「やめろ！べ、別にお前の為じゃねえ！！。」

「何だよー！そんな事を言うヴィ　タにはこれだ！」

ツカサはイタズラ小僧のように、ヴィ　タの身体をくすぐり始めた。

「ひゃーば、馬鹿！やめろ！」

ヴィ　タは必死にもがいて、ツカサに抵抗する。

「あははゝ逃がすか！」

ツカサはそれに応戦して、くすぐるスピードを早めた。

「おらおら！どうだゝコチヨコチヨ。」

「あはははははは！ーや、やめ……あ！」

すると、ヴィ　タはバランスを崩して、倒れる。
ツカサもそれに引っ張られ、倒れてしまった。

「うわ！……いつてえ。だ、大丈夫か？ヴィ……。」

目をあけて、ヴィ タを呼ばうとしたが、目の前にヴィ タの顔があり、ツカサは言葉を失う。

「……………」

「……………」

ツカサもヴィ タも、無言のまま見つめ合った。

ツカサは一瞬だけ頭の思考が止まり、衝動のままに顔を近づけ、口づけをヴィ タにした。

「！？。」

ヴィ タは目を見開いて、ツカサの行動に驚く。

ツカサはその後、ゆっくりと唇を離す。

それと同時にツカサは、思考を回復させた。

（な、なにやってんだ俺！こ、こんな事をしたら…ヴィ タに殺される…！。）

ツカサは目を閉じて、これからヴィ タにボコボコにされるのを覚

悟した。

だが、一向にヴィ　タからは、パンチやキックがとんでこなかった。

(……………あれ？…何もこない……………)

ツカサが目を開けると、顔を真っ赤にしたヴィ　タがいた。

「……………。」

ヴィ　タはツカサに顔を向けずに、身体をプルプル震わす。

そのヴィ　タの状態にツカサは驚きながらも、確かめるように再び、ヴィ　タにキスをした。

「ん！？。」

ヴィ　タはまた身体を硬直させ、ツカサのキスになすがままにされる。

ツカサはそれを見て、ヴィ　タの太ももを触り始める。

「ひゃう！な、なにすんだよ！」

ヴィータはツカサを叩いて抵抗するが、あまりに弱々しくて、抵抗にはなっていないかった。

「ん！…っ、ツカサ…や、やめ…んちゅ！」

ツカサはヴィータの声を無視して、動きを早める。
息使いは荒く、衝動に駆られながらヴィータの体をなでまわす。

「ふにや！…ああん！…。」

いつもの強気のヴィータではなく、ツカサの行動に体がついていかなかった。

薄れていく意識の中、ヴィータはツカサにこれから何をされるんだ
と思いつつ、謎の快楽が頭を埋め尽くしいった。

そして、ツカサはヴィータから唇を離れた。

「…あう…ツカサ？…。」

ヴィータはしどろもどろになりながら、ツカサを呼ぶ。

返事はない。

ゆっくりと、ヴィータに近づく。

「！！！！！！！！！！」

ヴィータは目を閉じて、覚悟を決めた。

だが、ツカサはそのままヴィータを通りこして、床に落ちた。

ゴォン！！

ツカサの頭が床に当たる音が響く。

「え？・・・・ツカサ？・・・・・・ツカサ！！。」

ヴィータはすぐ、ツカサに駆け寄って様子を見る。

「おい！！しっかりしろ！！ツカサ！！目をあける！！！！！！。」

ヴィータの声だけが家に聞こえる。

今日、この日にツカサ・ラグーンは原因不明のまま、意識不明となつた。

ワールド・ザ・マジック21（後書き）

ツカサの身に一体何が！？
次回に続く！。

また見てなのは。

ワールド・ザ・マジック22(前書き)

始まります

皆さん読んで下さい！

ワールド・ザ・マジック22

「さて、みんな揃ったな!。」

ア スラの艦長室で、八神はやて艦長代理の声が響く。

はやての前には、左から、シグナム、フェイト、ヴィータ、なのが並んでいて、その斜め後ろにはザフィーラとシャマルが立っていた。

「では、そろそろ護送の時間や。みんな気を引き締めてな。」

はやての言葉にみんなは敬礼をして、ドアから出て行った。

しかしなのは達の顔には緊張などの気持ち以外に、心配をしているような雰囲気があった。

はやては、シャマルだけを自分の場所によんだ。

「どや? シャマル…ツカサさんの様子は。」

真剣な表情でシャマルに言葉を投げかける。

シャルは目を細め、とても悔しそうに首を振った。

「駄目です。魔力値は平常、身体に怪我はなく…内部の臓器などにも異常は見当たりませんでした。なのに、意識は戻らず今も意識不明な状態のままです。」

シャルの答えにはやては、頭を抱え大きな溜め息を吐いた。

「わかったわ…シャルありがとうな。このままシャルも、なのはちゃんの方に向かってな。」

はやてはそう言うと、イスの背もたれに身体を預けた。
ギシイとイスが音を立てる。

シャルは心配そうにはやてを見るが、現場に行く為に敬礼をして、速く艦長室から出て行った。

「はあ…まだ治らんか……。」

はやては目頭を抑えて、悔やむように嘆いた。

ツカサ・ラグーンは三日前に意識を失い、ここまで調べても原因はわからなかったのだ。

はやてやなのは達もそれが心配だった為に、暗い面持ちだったのである。

「……………ツカサさん…一体、どうしたんや？……………」

この部屋にツカサはいない。

でもはやては天井を見上げ、ツカサに問いを聞くように呟いた。

暗い闇が広がった場所、周りは何も見えない。

ただただ黒い世界が広がっている。

周りに何も無いように、手を伸ばしても空振りするだけだ。

それに存在までもが、その中にあるのかどうかもわからない。
本当に自分がいるのかもわからない。

何もかもが、わからない。

暗い闇はすべてを包む。

だが、その暗い世界に光が差し込んだ。

どこから来た光とはわからないが、そも光の存在が自分の存在を、思い出さしてくれる。

そして、ツカサ・ラグーンは目を覚ました。

「……………どこだ？ここは？…。」

ツカサが目を覚めた場所は、医務室ではなく、まるでとても幻想的な空間だった。

星のようなキラキラした物が浮かび上がっていて、ピンク色のような空気が流れていた。

「あれ？…………この場所、見た事があるような…。」

ツカサが、辺りを見ながら考えていると、どこからか足音が聞こえてきた。

「お久しぶりです。ツカサさん。」

足音が聞こえてきた方にツカサは顔を向けると、そこには黒い服を着て赤い髪をなびかせながら、トルンが登場した。

「君は……トルン!?。」

ツカサは驚きながらも、トルンの方に歩み寄った。

「まあ驚きますよね?。」

トルンは苦笑いしながら、答える。

「君がここに居るって事は、ここは意識内か……俺は意識を失ったのか?。」

ツカサが言った言葉を、トルンは首を横に振って、否定した。

「意識内の中はありますが、今回は状況が違います……。」

「状況が違う?どういう事?。」

顔を俯かせて、トルンはツカサの周りを歩きだす。

「私は、ロストロギアの中に取り込まれた精霊です……それは前に説明しましたよね?。」

トルンが確認を取るようにツカサに聞く。
ツカサはその言葉に頷いた。

「そして、アナタの胸にあるロストロギアは、生物を取り込んで力を増幅させるとも聞きましたよね?。」

ツカサは思った。

なぜ、前に聞いた事をあえて話してくるんだろうと。

トルンは暗そうな顔でツカサを見据えた。

「そしてアナタは偶然に、ロストロギアを取り込んで同化した……
…しかし、限界がきたのです。」

その言葉と共にトルンは目を強め、前にあつた弱々しいイメージをなくすような口調で言い放つ。

「ツカサ・ラグーン……アナタはこのままではロストロギアに取り込まれ、死んでしまいます。」

「え…?。」

ツカサは一瞬、思考が止まった。

死んでしまうと言われ、急に頭の回転がなくなってしまったのだ。

「このロストログア、ビーストは生物を取り込ませたあと、人間に取り込ませます。そして大きな力を与える……だが…。」

トルンは足を止めて、ツカサに身体を向けた。

「強すぎた力は、身を滅ぼします。私を前にとりこんだ人間もそうやって死んでしまいました。」

ツカサは、目を見開いてその事実には驚く。

「マジかよ……じゃあ、死ねのか?…俺は……。」

トルンはツカサの方に歩み寄って、指を突き出した。

「しかし…助かる方法は、一つだけあります。」

「え?。」

ツカサは俯いていた顔を上げて、トルンを見た。

「ツカサさんが助かる方法は、私の力を抑えればいいんです。つまりは私に勝てばいいんです。」

そしてトルンが手をかざした場所から、剣が出て来た。

「アナタはこれから、私の力を押さえる為に戦うのです…しかし、生きるか死ぬかの二つだけです。」

ツカサは考えこむように俯いていた。

トルンからは顔が隠れて、どんな表情かはわからなかった。

少しして、ツカサはため息を吐きながら、剣の方に向かった。

「せっかく、トルンと久しぶりに会ったから、前にできなかったエツチ出来るかなと思ったのに……まさか、戦う事になる何てな……。」

ツカサはそんな事をほざきながら、剣を取ってトルンの方に向いた。

「ふふ…アナタは相変わらずですね……では……。」

トルンは笑いを止め、構える。

周りには、灼熱の炎が浮かび上がった。

チリチリとした熱気にツカサは怯みながらも、剣を構える。

「…行きます!!。」

今、ツカサの生きるか死ぬかの戦いが始まった。

「みんな…準備出来たか?。」

マントの中にある、大剣がギリリと光っている。

大剣を持つ男、エリア・スクアルは後ろに確認を取るように言った。

後ろにはプリス、ライン、レイス、ギルクがたっていた。

「ぷっちゃんともみんな居るよ。真剣モードバリバリだよ!。」

ピースをして、ウインクをするプリスに、エリアはため息をつきながら前を見る。

「行くぞ…管理局から、ロストログアを奪う………作戦開始だ!。」

ワールド・ザ・マジック22（後書き）

今、戦いの扉が開こうとしていた。

ワールド・ザ・ミュージック23(前書き)

さあ、いよいよ展開が動きます。

みんな、応援お願いします！

ワールド・ザ・マジック23

「ロストログアの運び出し、完了しました!。」

職員の格好をした男が、魔道師の人達に敬礼をしていた。

その横には、ロストログアの入った箱が積み上げられていた。

「ロストログアと確認!! 運んでいただき感謝します!。」

一人の魔道師が荷物の中身を確認し、それがロストログアと確認をして、職員の男に敬礼する。

そして、その魔道師の後ろに居た、数名の魔道師に指示を出して、ロストログアをトラックまで運ぶように言った。

トラックの周りにも魔道師達がいて、その中にはなのは達の姿もあった。

「ロストログア、運ばれてきたぜ。」
「ヴィータがそう言っと、なのは達はトラックに積み込んでいるロストログアを見る。」

「いよいよだね。みんな気を引き締めよう!。」

なのははその様子を見て、みんなに気合いを入れる。

「はい!!。」

なのはのカツが入ったのか、気合いの籠もった声が響く。

「じゃあ、私達も頑張らないとね。」

なのはは、ヴィ タ達にも同じように微笑む。

「わかってるよ、行こうぜなのは。」

ヴィ タは頭で手を組みながら、トラックの横にある車に向かった。

「じゃあ私達も行くね。」

今後はフェイトとシグナムがその反対側にある車に、向かった。

それに続いて、シャマルとザフィーラは後ろにあった車に向かう。

他の魔道師達も、周りの様子とロストロギアを積んだトラックを確認し、車とトラックに乗り込んだ。

エンジンのかかる音が響き、砂煙が舞いながらタイヤが動き出す。

そしてトラックが発進したタイミングで、護衛についている三台の車も動き出した。

「さてと、動き出したか…気を引き締めないとな。」

車の中では、ヴィ　タがなのはに話かけていた。

しかしなのはは、窓の外を眺めていて、ヴィ　タの言葉には反応しなかった。

「……………おい!。」

ヴィ　タは無反応のなのはに眉を寄せながら、軽く小突いた。

「うにゃ!?! な、何するのヴィ　タちゃん!。」

「うるせー！ボケツと窓の外見てやがって！しっかりしろ！」

ヴィ タの勢いのある怒りに、なのははショボンと肩を落とす。

「…………ツカサの事が心配か？」

「……………」

なのはは黙る。

でも表情を見ると、凶星に近かった。

ヴィ タは溜め息を吐いて、やっぱりそうかと呟いた。

「ツカサが急に倒れて、シャルやテストロッサも元気が無くなってたからさ、もしかしたらと思ったが…………なのはもか……」

ヴィ タの言葉に更に顔をうつむかせる。
もう完全に凶星状態だった。

「心配するのはわかるが、今は任務中だ。気持ちが入ってないと何かあった時、危ないぞ！」

ヴィ　タはなのはが落ち込んでいても、お構い無しに言葉を発する。

だが、言っている事は正しい。

なのはもそれをわかった為、自分の顔を叩いて顔を上げた。

「うん…ありがとうヴィ　タちゃん。大丈夫だよ!。」

手をギュツと握って、笑顔を見せるなのは。

ヴィ　タはそれを見て、安心したように窓の外を眺める。

（とは言ったものの…私も心配なんだがな……。）

そんな心中を持ちながら、ヴィ　タは流れる景色を眺めていた。

熱い…体が焼けるようだ…

それに動かない。

鉛が自分の体にまわりついているようだ…
駄目だ…もう…身体が…動かない。

「……終わりですか？ツカサさん。」

ツカサの思考はトルンの言葉によって、遮られた。

「あ……………うあ……………」

ツカサは余りにも弱々しい声で呟いていた。

それもそうだった。

ツカサは今、炎により、手足が燃えていたのだ。
右手に至っては黒こげで、痛覚すらツカサには感じていなかった。

「残念です……………アナタなら…大丈夫かも知れないと…………どこかで、安心していたのに……………」

そう言ったトルンは、手から巨大な炎を出した。

「あぐ………うつう………」

ツカサは立ち上がろうと、動ける手足で立ち上がろうとする。

「さようなら………ツカサ・ラグーン……アナタとは、もう少しお話し
たかったです。」

トルンは、涙を流しながらツカサに突っ込んだ。

ごめんなさい。

小さい声で、トルンはそう呟いた。

「ん？溪谷か…。」

トラックと車が動くなか、シグナムはそう呟いた。

今、トラックと護衛車は広い溪谷に入ろうとしていた。

周りは大きな崖。

ゴロゴロとした石や岩が転がっていた。

「大きな溪谷だね…でも、ここを抜けたらあと少しで着くと思うよ。」

「

フェイトは辺りの溪谷を見ながら、シグナムに言う。

溪谷を抜ければ、すぐに目的地に着くだろう。

着ければ……

不意に車より前に出てたトラックがブレーキをかけて止まった。

「なんだ!？。」

シグナム達やなのは達の乗っている車もそれを見て、止まる。

「一体何が……。」

フェイトは外を見て、啞然とした。

トラックの方に岩が積み重なり、人の形のようになってできた物が突っ込んできたのだ。

その数は百を越えている。

「!？シグナム!。」

フェイトはシグナムに呼びかけ、ドアを開けて外に出た。

シグナムもフェイトのあとに続いて、外に出る。

なのは達や他の魔道師もすでに外に出ていた。

「おいおい!何なんだよあれ!？。」

ヴィ　タはデバイスを起動させながら、謎の存在に驚く。

「わからない……全魔道師に告ぎます！トラックを守りつつ、戦闘隊形に移って下さい！！。」

なのはの掛け声と共に、魔道師達はデバイスを発動させながら、陣形を作る。

「なのは、後ろからも来た！挟まれた！。」

フェイトからの声を聞いて、なのはは振り向く。

反対側からも同じような奴らが向かってきていたのだ。

「く……私とフェイト執務官、ミッド式の魔道師は遠距離射撃！シグナム、ヴィ　タ二尉達ベルカの人とは接近で対処をお願いします！」

なのはの指示で、魔道師達は一斉に攻撃を開始した。

「フォトンランサー。ファイヤ！」

黄色い魔力弾をフェイトは放つ。

岩の奴らはそれにうち抜かれ、崩れていく。

しかし、奴らは突っ込んでくる。

完全な人海戦術である。

「させん！ぬおおおお！！。」

フェイトの頭上をとびこえ、ザフィーラが叫ぶ。

「縛れ！鋼の区域！！。」

地面から白い魔力突起が奴らを突き刺す。

「ここは任せろ！テストロッサ！」

ザフィーラの言葉に、フェイトは頷いて後ろの魔道師達の援護に向かった。

「アクセルシュート！！。」

反対側でも、なのはや砲撃魔道師達が魔力弾をうち続けていた。

魔力弾が奴らを打ち砕いていた。
しかし数は減らない。

なのは達の前では、ヴィ　タ達ベルカ組が戦っていた。

「はあああああ！。」

連続攻撃でシグナムは奴らを切り裂く。
横ではヴィ　タも奴らを破壊していた。

「くそ！何なんだ、コイツラは！！。」

ハンマーで潰しながら、ヴィ　タは愚痴るように喋る。

「口を動かす暇があったら、手を動かせ！数で押し切られるぞ！」

シグナムはヴィ　タと背中合わせになりながら、ヴィ　タに言い放つ。

「わかってるよ!。」

ヴィ　タは加速して、奴らをなぎ払う。

「前方のみんな!私とフェイトちゃんが砲撃を放つ!後ろに下がって!。」

なのはの新たな指示を聞いて、ヴィ　タ達は横に散れと言った。

「デイバイン!。」

「サンダ　…」

フェイトとなのははそれを確認して、一気に砲撃を放つ構えを取った。

「悪いが…させないぞ。公務員…。」

だがその砲撃は上から着地した人間に、遮られた。

巨大な剣を携えた男、エリア・スクアルだ。

「あ、アナタは！」

フェイトは面識が有るため、反応がなのはより早かったが、エリアはそれよりも早かった。

「吹き飛ば！爆龍剣、爆炎の型！」

爆発と共になのは、フェイトと魔道師達が吹き飛ばされる。

岩の奴らごとだった。

どうやら、エリアに取っても巻き込んで支障はないようだ。

「なのはああ！」

「テストロッサ！」

シグナムとヴィ　タは叫ぶ。

爆発で状況はわからない。

「ぬがああああ！」

更に叫び声が響く。

ヴィ　タとシグナムが後ろを見ると、ベルカ組が倒されていた。

「ぷ〜チョコロいチョコロい！プリスちゃんの前では雑魚だよ〜！！。」

ウインクをしながら、プリス・キアルアがヴィ　タ達の方に歩み寄る。

「てめえ…。」

ヴィ　タは唸りを上げて、プリスを睨みつける。

シグナムもプリス相手に構える。

しかしシグナムの後ろで、爆発が起こる。

爆発でザフィーラが跳んできた。

「ザフィーラ、大丈夫か!。」

シグナムは跳んできたザフィーラに呼びかける。

「心配ない…もう一人が居るぞ。」

ザフィーラは反対側を見る。

そこには、エリア達の仲間であるギルクが立っていた。

「三人か…。」

シグナムの目には、エリア、プリス、ギルクが映っている。

「さあ…公務員達…俺達にロストロギアを渡して貰おうか…。」

今、ロストロギアをかけた、決戦が始まろうとしていた。

ワールド・ザ・マジック23（後書き）

溪谷での大決戦！

次回、最大のバトルがくり広げられる！

ワールド・ザ・マジック24（前書き）

渓谷での決戦。

エリア達となのは達の戦いが今、熱気を上げます！

ワールド・ザ・マジック24

「おおおおおおおー!」

叫びが響くとともに、ザヒィーラが突っ込む。

エリア達はザフィーラの突進をよける。

溪谷での戦いは入り乱れていた。

大半の魔道師達は動ける状態ではない。

ほとんどはエリア達に吹き飛ばされ、岩の奴らの数攻めで魔力が切れてしまった。

現状での戦いでは、ヴィ　タ達が粘っている状況だった。

「甘いぞ…公務員…爆龍剣、火閃の型!」

エリアは後ろに下がりつつ、炎の斬撃をザフィーラに放つ!

「ぬう!?!」

ザフィーラは反応が遅れて、攻撃がザフィーラに迫る。

「はあああ!。」

だが、エリアの攻撃は横から来た、フェイトに弾かれた。

「なに!?。」

エリアは驚きつつ、今度はフェイト目掛けて、斬撃を放とうとする。

だが、エリアの上空に影が出来ていて、それに気づいたエリアは上を見る。

「エクセリオン!。」

上には上空から、エリアを狙い撃つのがいた。

「バスタ　!!。」

そして放たれる砲撃魔法。

爆発音と共に当たりが煙に覆われる。

「エリア!。」

後ろに下がっていたプリスは、エリアの名前を叫ぶ。

「俺は無事だ…。」

上からの声にプリスは見上げる。

地面を滑るように、エリアが着地してきた。

「おゝ無事でしたか!良かったぶ〜。」

「当たり前だ…だが、あの二人の公務員が無傷には驚いた…。」

エリアはフェイトとなのはを見据える。

「良かった!二人共無事だったか!。」

一方のなのは達はヴィ　タ達と合流に成功していた。

「うん。ギリギリで防御が決まったから、何とかだったの。」

なのはの言葉にヴィ　タは安心したが、まだ気を抜けなかったので武器を強く握る。

「とりあえず、岩の奴らは数が減って少なくなった。残りの魔道師達でなんとかなる……問題はあの三人だ……」

ヴィ　タは目を細めて、エリア達を見た。

なのは達も視線を相手に向ける。

「ヴィ　タの言う通りだね……あの大剣の男と小さい女の子は無限書庫で対立したけど、実力は私より上だった。多分もう一人の男もかなりの実力かも……」

フェイトの言った情報は、遠まわしにここに居る魔道師達より強いと言う情報に近かった。

「とりあえず、気を抜くなよ……奴らをここで一網打尽にすんぞ……」

デバイスを構えて、ヴィタは言う。

その言葉に続いて、なのは達もデバイスを相手に向けて、構える。

「やる気だな…公務員…いいだろう。こっちから行ってやる…。」

エリアは体制を低くして、大剣を構える。

ドン！！

次の瞬間、地面を蹴る音と共にエリアがフェイトの方へ突っ込む。

「！アクセル…。」

なのははさせまいと、魔力弾をエリアに放とうとする。

「ぷっ！させないよ！。」

だが、プリスはそれをさせなかった。

地面から現れた布に、なのはの身体が締め付けられる。

「な！地面から！？。」

それによってなのはの動きは止められる。

「なのは！。」

ヴィータとザフィーラはそれを見て、なのはの救援に向かう。

だが、二人の前に影が遮るように現れる。

「悪いが・・・ません。」

影の正体はギルク。

二人の前に出てくるとともに、拳をヴィータに叩き込んだ。

「ぬが！！。」

デバイスでガードはするが、簡単に吹き飛ばされる。

「おおおおお！！！！。」

ザフィーラは再び白い魔力突起を地面から出し、ギルクに攻撃を仕掛ける。

「甘い…。」

しかしギルクは拳を地面に向けて、叩きつける。

一撃で魔力突起は粉碎され、ザフィーラは驚く。

「お前達の相手は、俺が勤める。」

ファイテングポーズの動きを取って、ザフィーラとヴィ　タに対して、宣戦布告をとる。

（くーヴィ　タとザフィーラが分断されたか！。）

シグナムは相手の早い動きに唇をかみしめながら、状況を把握する。

（高町はあの少女と戦っている。ヴィ　タ達は分断。一番近いのはテストロッサか。）

シグナムはデバイスを構えて、フェイトの方に跳ぶ。

（二対一か…しかも二人共剣士タイプか……面白い。）

エリアはフェイトに迫りつつ、シグナムが近付くのを理解して、ニヤリと笑う。

「テストロッサ！来るぞ！」

「はい！」

二人は動きを合わせ、同時にエリアに攻撃を仕掛けた。

「遅いぞ。」

エリアは手に付けた籠手と大剣で同時の攻撃を防ぐ。

「はあ！！。」

エリアは籠手を返し、一気にシグナムの腕を掴む。

（早い！！…）

シグナムが反応した時はすでにシグナムは投げ飛ばされる。

「シグナム!!…く!。」

フェイトは一旦離れ、加速を付けてエリアに切りかかる。

「うおお!。」

「はあああ!。」

エリアは大剣を曲芸のように使い、フェイトの攻撃を防ぐ。

フェイトは加速によるスピードでエリアの死角から攻撃を仕掛ける。

(私のスピードに追い付いている!?!。)

フェイトは驚きつつも、更に加速を上げる。

「…速い…。」

エリアはフェイトのスピードを見て眩く。

スピードは現段階でさっきまでよりも上がり、エリアには見切れて

いないようだった。

（よし！行ける！。）

一気に加速をしたフェイトは、エリアの後ろをとる。

「見切られないとも思ったか…。」

しかし本当はフェイトの動きは見切られていた。

「な！？。」

フェイトが切りかかる前にエリアは回し蹴りを与える。

「きゃあ！。」

フェイトは吹き飛ばされて、壁に激突した。

「ぬあああ！。」

反対側から、フェイトが吹き飛ばされたタイミングでシグナムが切

りかかる。

「まだ遅い!。」

エリアはきた攻撃を伏せて避け、大剣を切り上げる。

「ぐう!。」

肩に直撃したシグナムは後ろに吹き飛ばされる。

「まだだ。」

エリアは呪文を唱え、シグナムにバインドをかけて壁に貼り付けられた。

「く!バインドか!!。」

シグナムは貼り付けられ、身体が動かない。

完全に自由が奪われていた。

「さて…まずは一人…。」

エリアは大剣を、貼り付けされたシグナムに突きつける。

だが既にエリアの後ろには、フェイトが切りかかる体制になっていた。

フェイトは相手の集中がシグナムにいつているのを確認し、加速していたのだ。

（相手は気づいていない！今のうちだ！。）

フェイトは振りかぶって、エリアに斬撃を放つ。

「残念…私がいま…。」

だが斬撃は目の前に現れた者に止められた。

「！？。」

フェイトは避けようとするが、顔を掴まれてしまう。

「マインドコントロール発動…精神操作開始。」

その人物は、以前になのはを倒したライン・レイフォードだった。

「あ……あう……」

フェイトから目の輝きが消え、地面に落ちる。

以前になのはが食らったのと同じ技だった。

「さあ……記憶の闇に溺れなさい……」

ラインはエリアの背中越しに降り立った。

「よくやった……ライン。」

「いえ……アナタの指示したタイミングが良かっただけです。お陰で簡単に技が決まりました。」

そして、その状況になのは達が気づく。

「な！？フェイトちゃん！！。」

なのはの叫びが響く。

ヴィ　タは今の状況を見て、唇を噛んだ。

（くそ！最悪の展開だ。あたしとザフィーラは足止めさせられ、なのはもあのガキに止められる！シグナムはバインドを掛けられ、テスタロッサもやられた！。）

ヴィ　タは流れる汗も気にせずにデバイスを強く握りしめていた。

それが、自分達の余裕のなさを表している。

「終わりだな…公務員…。」

エリアは大剣を構えて、シグナムに迫る。

なのは達は救助に向かいたいが、完全に足止めを食らっていた。

「もう少し楽しめるかと思ったが…所詮はこんなレベルか…。」

エリアは失望したように大剣を上に乗せた。

「さらばだ……。」

一瞬だった。

風を切る音と共に、エリアの前に何が落ちた。

「なに！？。」

エリアは後ろに跳んで距離を取る。

何かが落ちた場所からは煙が出て、よく見えない。

しかし、足音らしき音が聞こえた。

「……………だれだ?。」

エリアがそう答えた瞬間、煙が風に舞って晴れる。

「え?……………」

なのはは啞然と、声を上げる。

ヴィ　タも目を見開いて驚いた。

「……ツカサ?。」

煙が晴れた場所に立っていたのは、間違いなくツカサ・ラグーンだった。

ツカサは何も答えず、前に居るエリアとラインを見た。

「貴様は……。」

エリアはツカサの姿を確認し、大剣を構える。

しかしそれはラインによって、制止される。

「まってください…あんな相手、私がやります。」

ラインはゆっくりとツカサに近づきながら、手を広げる。

「アナタには一度、私の技が破られてましたからね……今ここでその借りを返してあげましょう。」

そう答えたあと、ラインは手を上げた。

「マインドコントロール発動…精神操作開…。」

技の発動をしようとしたラインだが、最後の部分が途切れる。

目の前には、ツカサがラインの腕を掴んで立っていたからだ。

「ば、バカな…。」

そして、ツカサの持っていたデバイスは炎を纏った剣のようになり、一瞬でラインを切り裂く。

「ライン！！。」

エリアがさけぶ。

何時も冷静沈着な姿ではなかった。

プリスとギルクも、目の前に居る敵を忘れるように、目を見開いていた。

しかしそれは、なのは達もだ。

今のツカサは余りに違い、雰囲気明らかに変わっていた。
外見では目つきも鋭くなり、髪も少し伸びていた。

「ツカサ…さん？。」

なのはの声にも反応しない。

回りの状況にも全く気にしないまま、ツカサはラインを投げ飛ばす。

そしてツカサは、口を動かした。

「ただいま……今、帰ったよ。」

そこには、何時も顔で笑うツカサの姿があった。

ワールド・ザ・マジック24（後書き）

ついにツカサが蘇った。

次回、ツカサの力が炸裂する。

ワルド・ザ・マジック25（前書き）

皆さん！遅れながら、新年あけましておめでとございます！

クリスマスと年末で小説を休んでいましたが、再開開始です！
今年もワルド・ザ・マジックを宜しく願います！

ワールド・ザ・マジック25

「みんな…ただいま…」

渓谷での戦い……

エリア達の猛攻撃により、なのは達はピンチに瀕していた。だが、そんなピンチの時に現れたのは意識不明で倒れていたツカサ・ラグーンであった。彼は優しい微笑みで、ヴィ　タ達にただいまと告げたのである。

「…アナタ…本当にツカサさん？」

なのはが確かめるようにツカサに言うが、ツカサは微笑んだまま、目の前に立ち尽くしているエリアを見据える。エリアの後ろではフ　イトと、エリア達の仲間であるラインが倒れていた。

「貴様……無限書庫であった奴か？一体何があった。ラインを一撃で倒すなど…」

「ああ…安心してよ…さっきの女性には峰打ちだから、無事だよ？」

ツカサの言葉にエリアは若干眉を潜める。

「…そんな事は聞いてない…貴様が何故そんな力がついたかのかを聞いている」

エリアの口調が少し強くなるが、ツカサは全く動じずに鼻で笑う。

「そんなに俺の力が知りたいの？知った所で、お前らじゃどうしようも出来ないけどな…」

明らかな挑発である。エリアだけではなく、なのは達と対峙していたプリスとギルクもムカツとした表情でツカサを見る。あんな挑発じみた事を言われれば、当たり前だ。まだ一番ちびっ子のプリスにいたっては顔が真っ赤になって怒りを表していた。

「ぷっ！！何様よ！私達より強いって言うの！？偉そうに！！」

「はは…そう言ったつもりだよ。お嬢ちゃん…気に触ったらごめんね…」

その瞬間、プリスの中で何かが切れた。

「あつたまきたああ！！先にアンタを潰してやるわ！！」

ドカツと地面を削りながら、プリスに付いていた布がツカサに襲い掛かる。布の形状は新聞を丸めて作ったような形になっており、先っぽも尖っていた。しかしツカサは迫り来るプリスの攻撃に全く動かずにいた。それどころか、プリスの攻撃に剣の形のデバイスを向ける。

「魔王…炎連撃!!」

剣に灯っていた炎は大きく跳ね上がり、ツカサはそれをプリスの攻撃に叩きつけた。

ドカンと巨大な爆発音と共に、炎が辺りに広がった。

辺りの岩や地面が吹き飛び、爆風がなのは達にかかり、髪やスカートが大きく揺れる。

「…わ、私の攻撃が……一撃で？」

プリスは驚愕した。自分の攻撃が、さっきのツカサの攻撃で一瞬で消え去った事が。

「何？そんなに驚いた？君の攻撃が俺に破壊されたのが。」

ツカサはほくそ笑んだような顔のまま、語りかける。その表情は明らかに余裕を表していて、汗一つすらかいていなかった。

「こんの……馬鹿にしゃがって……絶対にぶっ飛ばしてやる!!」

そんなツカサの態度に更に怒りを表すプリス。背中から更に多くの布を出して、ツカサの方に向ける。明らかな多さである。

「さあ！私の一斉攻撃を受けてみなさい!!」

「……………」

ツカサは無言のままにデバイスを構える。

「今度は絶対に抑えさせな……」

思いつ切り声を、張り上げていたプリスの声は途切れる。そしてその小さな身体は宙に舞い、渓谷の壁に叩き付けられた。

「が……………」

プリスは小さい悲鳴を上げて、崩れた岩に埋もれる。

あまりにも速いスピードだった。プリスや辺りに居たエリア達となのは達も何も見えていなかっただろう。

プリスを吹き飛ばしたのは、ツカサだ。最初にラインを吹き飛ばした時と同じ、プリスの目の前に現れ、プリスを攻撃したのだ。

「何をさせないって？」

ツカサは冷たい、けど少し怒りの感情がこもってるような声を響かせる。

なのは達は驚いていた。今のツカサは明らかになのは達が知っているツカサとは違いすぎていた。雰囲気や外見だけではなく、口調や接し方、相手に対しての絶対的な自信を出す気持ち。何もかもが変わっていた。そして何よりツカサが変わっていたのは、プリスとラインを倒したその力である。以前のツカサの力は並、普通の魔道師であり、なのは達の足下にも及ばなかった。暴走した時がかなりのパワーであったが、今のところツカサは暴走などしていない。つまりは暴走していない普通の状態でツカサはプリス達を圧倒していたことになるのだ。

そんな驚愕の力を見たなのは達は一步も動けずにツカサを見ていた。

敵であるエリアとギルクも動けずにツカサを見ていた。

「さて……あとはお前らだな……」

プリスを吹き飛ばしたツカサは、残っているエリアとギルクを見る。

「……公務員……どうやら俺は貴様を甘く見ていたようだ……」

エリアはゆっくりと大剣をツカサに向ける。

「貴様と戦うのは……無限書庫以来だな……」

「……確かにな……だが、その前に……」

ツカサがそう言うつと、音もなく消えてエリアの後ろに移動する。

「……速い……あの金髪の女より速いな……」

「……あ、そう……とりあえずフェイトを……」

ツカサは倒れているフェイトをお姫様だっこする。

「そのまま…逃がすと思っているのか？」

エリアは剣を構える。

「お前こそ、攻撃が当たるとでも思ってるか？」

ツカサの挑発の瞬間、ゴォと風を斬るようにエリアが大剣をツカサに振り下ろす。

ドゴォ！

地面をえぐる音が響く。しかし、その場所にツカサとフェイトの姿はない。

「！」

エリアは後ろをバツと振り向く。

ツカサはすでになのは達がいる方に移動していた。

「やあ…みんな…怪我は大丈夫かな？」

ツカサはニコリと笑顔のままに、なのは達の所まで歩いてくる。
なのは達はツカサのスピードに驚いて、目を丸くしていた。

「とりあえず、フェイトはなのはに…」

「え？あ…うん。ありがとう…」

なのははツカサにフェイトをゆっくりと渡す。

「さて…残りの敵を倒しますか…」

そしてツカサはまたエリア達の方に向く。そんなツカサにヴィ
タが袖をつかんで、引き止める。

「おい…待てよツカサ…」

「……何かな…ヴィタ。」

「何かなじゃね よ！一体何があったか説明しろよ！」

ヴィ　タは袖を掴む手を更に強くして、ツカサに質問をする。だが、実際の所はなのは達もそれを聞きたがっていた。

「……話はあとでいい？…今はアイツラを倒す。」

ツカサはそう言ってヴィ　タの手をどかす。

「んだよ…あたし達には話してくれないのか…」

ヴィ　タはムスツとした顔になり、後ろのなのは、シャルも顔を悲しいような表情をする。

「……大丈夫…必ず話すよ…俺を信用して……ヴィ　タ達は貼り付けられてるシグナムさんをお願い…」

ツカサは言い終わると、ヴィ　タの頭をポンと叩いて、エリア達の方へ歩きだす。

ヴィ　タ達はツカサに言われた通りにシグナムを助けに行く。

「さてと…勝負といこうか？ギザギザ頭とサングラス野郎…」

ツカサはピツと指をギルクとエリアに向け、ドスを聞かせた声を出

す。

「わかった……行くぞ……ギルク。」

「……ああ……」

ギルクとエリアはツカサに突っ込む。

「おい！シグナム、大丈夫か？」

一方のヴィ　タ達はバインドによって動きを封じられていたシグナムを助けようとする。バインドはなのはやフェイトが使うのと少し違うような物で出来ていて、解くのに少し時間がかかる。

「私は大丈夫だ……それより……」

シグナムは視線を、エリアとギルクと戦闘をしているツカサに向け

る。

「……あいつは…本当にラグーンなのか？」

「ああ…ツカサだ…全く持って変わってるがな…」

シグナムも明らかに変わっている状態のツカサに驚きを隠せていないようであった。

「ツカサさん…原因不明で意識不明になっていたのに…一体何があったのかしら…」

シャマルはシグナムの怪我を治しながら、ツカサに感じた疑問を述べる。シャマル自身、医者である為にツカサが意識不明の時、一番ツカサを見ていたのだ。だから、ツカサに異変があればすぐにわかったはずなのだ。だが、ツカサが意識不明の時は一切異変はなかった。

「とりあえず、シャマルさんはシグナムさんやフェイトちゃん。あと、怪我を負った魔道師達をお願いします。ザフィーラさんは倒れている魔道師達をここに運んで下さい。私とヴィー タちゃんはツカサさんの援護に向かいます。」

なのはの指示にみんなは頷き、移動を開始する。

「はあああああー!」

ギーン! キーン!

ツカサの雄叫びと金属音が響く。

エリアの大剣と、ツカサの剣がぶつかりあっているのだ。

ツカサは速いスピードで、一気にエリアの後ろを取りながら、攻撃する。しかしエリアはそのスピードに反応するようにツカサの移動する所に大剣を振るう。

ギーン! ギーン! キーン! ギーン!

更に早く、強く金属音が響き合う。

「あんた、凄いな…俺のスピードに追い付くなんて…」

「ふ……いいのか? 俺にばかり気が向いて…」

エリアの言葉にツカサはハツとする。上空から影がツカサの上に出て来ている。ツカサは地面を蹴り、後ろに跳んだ。

ドゴォ！！

ツカサが居た場所は地面がえぐれ、鋭利な岩の破片が飛び散る。ツカサは魔法障壁をはり、破片を防ぐ。

ツカサの居た場所に居るのは、ギルクだ。影の正体は上空から攻撃を仕掛けようとしたギルクである。

「…避けたか…」

「当たり前だつての！俺が避けないのは可愛い女の子の包容ぐらいだ！」

ツカサは叫ぶようにギルクとエリアに発言する。これだけを見ると、何時も通りのツカサに見える。

「ツカサさん！」

すると後ろから、ヴィタとなのはが駆けつける。

「なんだ？二人共来ちゃたの？」

「当たり前だ！いくらお前が強くなったからって、一人で戦わせるかよ！」

「……………ありがとう…だけど、大丈夫だよ…」

ツカサはヴィ　タの頭にポンと手を置いて、ゆっくりと前に出る。
ツカサの顔には何時もの笑顔は消えていた。
なのははツカサに手を伸ばし、止めようとするが、躊躇うように手を止める。

なのはには今のツカサの背中に「止めるな」と語っているように感じた。

「…さて…続きといこうか…」

「……………後ろの公務員は戦わないのか？」

「ああ…俺だけで充分だ。」

ツカサはデバイスを地面につけ、目を閉じる。
一瞬だが、周りの温度が上がった。

「炎の精霊よ…赤き魂が震え、大地が天が焦がれる時、その姿を魔とし、我に宿りて闇を払え…」

ツカサが呪文のような物を唱える瞬間、ツカサの周りを巨大な炎が包む。

「え!?!」

「な!?!」

なのはとヴィ　タは驚きの声を上げる。

そして炎はツカサを包むように小さくなり、はじけた。

ボンっ!!

炎がはじけ、中に居たツカサは……姿が変わっていた。

その姿は魔人…

まるで神話にでてくる炎の魔人、イフリートを思い出させる。

「……貴様……その姿は……」
エリアは大剣を強く握りしめ、ツカサに向ける。ツカサはニヤツと笑い、エリアに言い放つ。

「さあ……勝負といこうか……今度は本気で……」

ワルド・ザ・マジック25（後書き）

ツカサの力、新たな力で、全てを焦がす！

次回もツカサのパワーアップした力をまた見てなのは（＾Ｏ＾）

ワールド・ザ・マジック26(前書き)

溪谷の戦い最終局面え！見逃さないでね！！

ワールド・ザ・マジック26

ただ、目の前の光景に目が離せなかった。

高音の金属音が響き、その度赤い閃光と火花が散る。それはどこか綺麗に感じる。そう、まるで幻想的な光景だった。

ギーン！ギーン！

その中、更に強くなる金属音。溪谷の間を二つの人影が飛んでいた。

「……すごい…あれが、今のツカサさんの実力…」

なのはは、今繰り広げられていた戦いに驚いていた。あまりにも速く、そして力強い音を響かせているツカサとエリアの戦いに…

ギーン！ガキイ！ギーン！

ぶつかり合う剣。エリアとツカサの剣は共に赤く、紅蓮の炎のように燃え上がり、ぶつかる度に火を吹くように燃え上がる。更に二人の動きは炎と、ともに揺らめきながら剣を振るっている。正に炎と炎のぶつかり合い。同じ力を持つ者どうしの戦いと言える。

「はああああああ!!」

ツカサの雄叫びに感じる声は溪谷に響きわたる。一方のエリアは全く喋らずにツカサの攻撃を弾いている。

「公務員…貴様は叫ぶが……うるさいぞ…」

「なんだよ…俺の声にびびってんのか？」

ツカサはニヤリと笑い、更に攻撃を加速させる。

(この公務員…また速くなった…あの姿になって更に強くなった…)

エリアの見据える先、ツカサと戦っているはずなのにエリアには人外と戦っているイメージがわいていた。燃え上がる炎が巨大な形を作り、かなりの威圧感を出している。

「爆龍剣、双炎の型！」

だが、エリアは威圧させる事はなく、二つの炎をツカサに放つ。

「！」

ツカサは剣で二つの攻撃を弾く。

「甘いぜ！これぐらいしなきゃ…プロミネンス・バースト！！」

ゴォー！！

大きなうねりを上げた炎が今度はエリアに目掛けて飛ぶ。

「牙豪撃碎拳！！」

バゴォン！

しかしその攻撃は下から来た衝撃波に吹き飛ばされた。

「く…サン格拉斯の奴か…」

下から、ギルクが飛んでくる。衝撃波もギルクが出たものである。今の状態のツカサの攻撃を相殺させたギルクにも、かなりの実力があると思われる。

「大丈夫か…エリア…」

ギルクはサングラスをクイツと上げる。

「すまない…奴の力はかなり上がっている…」

「そうか…どうするエリア…」

エリアは顎に手を当てて数秒考えた。

「あれを使う…」

「あれか？しかしあれは…」

バツと手を出して、エリアはギルクを制した。そして大剣を深く構える。その大きな大剣をまるで、居合い抜きをするように構えた姿は何故かスキがなかった。

ツカサも、動かずにエリアの様子を見ている。

（……………アイツ…何するきだ…………）

ブシュ…

一瞬、何かの音が聞こえた。ツカサは疑問を浮かべた。一体何の音だと。それはすぐにわかった。自分の右肩に生暖かい感触と痛みが伝わってきたのだ。

「！？これは…」

ツカサは右肩に手を置く。

ビチャと確かに血の感触がした。

「どうした？公務員…」

エリアの声が聞こえた。ツカサはその声の方に向く。驚いた事にエリアの居た位置は、ツカサの後ろだった。さっきまでツカサの前に居たはずだった。なのに後ろにいたのだ。

「お前…いつの間に…」

「どうした？……自分のスピードより速かったのが…そんなに驚いたか？」

ツカサは眉をひそめた。確かに言つとおり今、ツカサ以上のスピードだったのだ。

「もう一回…行くぞ…」

エリアは再び、同じ構えをとる。

「!…」

ツカサは避けようとするが…

「遅い…爆竜剣…瞬爆の型…」

ブシュ!!

再び血しぶきの音が聞こえた。生暖かい感触が今度は左脇に感じる。ツカサは顔を歪めながら、傷口を抑える。今回もツカサにはエリアのスピードは見えてなかった。

「ちい…外したか…」

エリアは再び、ツカサの後ろに移動していた。

（く…明らかに早い…まさか…この状態の俺より早いとは…）

ツカサはエリアから目を離さずに距離をとる。

「いいのか？公務員…俺ばかりに目がいつて…」

エリアの言葉に…ツカサは目を見開く。

エリアに気を取られ、忘れたのだ。もう一人の存在…ギルクを…

「爆碎牙狼拳！」

ゴア！

風邪を斬り、魔力が籠もった拳をツカサに放つ。

（く…避けきれない！…）

ギルクの攻撃に反応出来なかったツカサは唇を噛んだ。

ガキーン！！

金属音が響くが、ツカサは自分の身体に痛みがない事を感じ、ギルクからの攻撃が来た方向を見る。

「まったく…一人で無茶するからだ…少しはあたし達を頼ってほしいもんだぜ…」

赤いゴスロリのスカートを靡かせ、ツカサとギルクの間にヴィタが入り、ギルクの拳をデバイスで抑えていた。今の金属音は拳の小手とデバイスがぶつかった音だ。

「ヴィ　タ…きたのか？」

「当たり前だろ？お前が強くなったって戦い方は素人だ！ほっておけるか…」

「……………ありがとう…」

ツカサはヴィ　タに微笑んだ。ヴィ　タも返すようにツカサに笑顔で返す。

「よそ見はするな……」

エリアは再び、ツカサの前に立ち、居合いの構えをとる。

「爆竜剣…瞬爆の型！」

ドゴオンー！！

再び神速と共に巨大な爆発音を出す。

しかし、エリアの攻撃はツカサ達に届かず、途中で止まったのだ。

（なに！？俺の攻撃を止めた？あの公務員ですら、とめられなかった攻撃を……）

驚くエリアの剣は白い服を纏った魔道師、高町なのはに止められていた。

「アナタの攻撃は確かに速い……だけど、その技は、見る限り連続で使えない……なら、動きや通る場所に先回りしていれば、見えなくても攻撃場所がわかる！」

なのはは、エリアにピンク色の輪っかを仕掛けた。相手の動きを止めるバインドである。

（し、しまった…ゼロ距離バインド…）

カチャ！

バインドを仕掛けた瞬間、なのはは一気にデバイスをエリアに向けた。

「ディバインバスタ　！！」

ドゴオン！！

なのはによるゼロ距離の砲撃魔法。エリアは破けたマントを捨て、なのはから距離をとる。

「く…ゼロ距離バインドにゼロ距離射撃か…侮った…」

エリアは空中で停止し、なのは達の方を見る。ギルクはヴィータと接近で打ち続けていた。なら、エリアは必然的なのはとツカサを相手にする事になるはずだ。

だが…そこにツカサの姿はなかった。

（いない！しまった！）

エリアは素早く後ろに振り向く。

「残念…こつちだ…」

ツカサの声は、エリアが振り向く前に向いていた所に出てきたのだ。

「くられ…ブレイジング・インフェルノ…！」

ズバァ！！

巨大な炎を宿した、ツカサの剣はエリアの服の下にあった装甲ごと切り裂いた。

「ぐう…」

エリアは斬られた衝撃と共に溪谷の壁に叩きつけられた。

「悪いな…俺の勝ちだ…炎の中で全て燃え尽きな…」

ワールド・ザ・マジック26(後書き)

ツカサ、なのは達と勝利を掴む！

次回も宜しくお願いします！

ワールド・ザ・マジック27（前書き）

お待たせしました！最近遅れ気味のアニメ冒険家です！

また遅れるかもしれませんが頑張っていきます！

では溪谷決戦：ラストへ！

ワールド・ザ・マジック27

「あとは…あんただけだ…」

ツカサは剣をギルクを向ける。ギルクは動じる事なく、サングラスを取る。目が赤く輝いていた。

「エリアをやるとは…貴様等…なかなかやるな…」

ギルクはサングラスをしまい、手をクロスさせるようなポーズをとった。ツカサ達は気を抜かず、ギルクの方に構える。

「はああああああ!」

ギルクが叫び出すと、髪が逆立って黒髪だった髪が、銀髪になった。手についていた装備からは、長い爪が飛び出し、クローのような形になったのだ。

「おいおい…まじかよ…あいつ本気じゃなかったのか…」

ヴィ　タはデバイスを強く握りしめながら、汗をたらした。

「大丈夫だよ…ヴィ　タ…三人で行けば何とかなるさ…」

ツカサはヴィ　タの頭を撫でながら、横にいるなのはに微笑む。ヴィ　タは照れながら頷いて、なのははツカサの微笑みに微笑む。

「貴様等…今の俺を甘く見るなよ………ガアアアアア!!」

ギルクが大きな雄叫びを上げた。雄叫びは周りの空気をビリビリと震わし、ツカサ達の所まで巨大な風が飛んでくる。

「ぬあ!…叫び声だけで何て風だ…」

ヴィ　タ達は風に吹き飛ばされないように、思いつきり踏ん張っている。

「食らえ……ウイング・クロー!!」

ゴア!!

風がギルクのクローに集まり、ツカサ達に風の刃を放つ。

「はぁ!!」

なのはは二人の前に立ち、大きなシルドを張る。

ガギイイイイン!!!

風の刃となのはの防御が、大きな音を立ててぶつかり合う。

「ヴィ　タ!行くぞ!」

「おう!」

ツカサとヴィ　タはなのはがギルクの攻撃を止めているのを確認し、両側から一気に加速をしてギルクに突っ込んだ。ギルクは二人の動

きを見ながら、クローを構えて体制を取る。

「トリッヒ・シユラ　クー！」

「ファイヤーブレイドー！」

ヴィ　タとツカサは両側から、技を決めようとデバイスを振るう。

「ふんー！」

ガキンー！！

それでもギルクは、二人からの両側の接近攻撃をクローで止める。
しかも片手だけである為、かなりの怪力だとわかる。

「まだまだ！」

「終わりじゃないぞ！獣野郎！」

二人は防がれながらも、一旦離れて再び切りかかる。

ガキン！キン！ガギイイン！ガキン！

ヴィタ、ツカサ、そしてギルクの接近の打ち合いは火花を散らして激しくなる。流石に二人相手は辛いのか、舌打ちをしながらギルクは眉をひそめる。

「ぐぬ！……ブレイククロー！！」

ギルクは後ろに下がりつつ、クローの大きさを変え、魔力の籠もったクローで二人を貫こうとする。

ギン！

「ぐー！」

「ちい……」

二人は防御に成功しながらも、後ろに吹き飛ばされる。

「はは！俺のパワーは仲間の中でも一番だ……エリアよりもな……貴様等のようなひ弱な力では俺は抑える事など……」

ガギン……

ギルクが喋っている最中、鍵を使って何かを閉めるような音が聞こえた。

「なん…だと？」

ギルクは自分の身体を見て驚く。両手両足には、ピンク色の輪っかが付いていて、ギルクの動きを止めていた。

「成功だな…」

ヴィ　タはデバイスをトントンと肩におきながら、そう言った。

「成功だと！？貴様等、一体何をした！」

ギルクが叫ぶと、不適な笑いをしながら、ツカサがヴィ　タの横に移動した。

「まだわかんないのか？俺達は単なる時間稼ぎさ…なのはが防御を

ドゴォン！！！！

なのはの放ったエクセリオンバスタ　が、ギルクを包み込む。

「……やったか……」

ヴィ　タが目を凝らして、ギルクの様子を確認しようとする。

「……残念だったな……公務員……」

「！？」

すると、煙の中から声が聞こえた。だがその声はギルクのものではなかった。煙が晴れると、エリアがライン抱えて立っており、その横でプリスも立っていた。

「くそ……てめえら……」

ヴィ　タはデバイスを強く握りしめながら、エリア達に向ける。ツカサも同じように剣を向け、なのははツカサ達の元に駆け寄る。

「おっと…悪いが…もう戦う気はないぞ…公務員…」

「なに？」

ツカサが疑問に思いながら、ちょうど目に入ったのが、プリスの抱えている黒い箱だった。

「おい…なのは…あれって…」

ツカサがプリスの抱えている箱を指差しなのはに言った。なのははそのツカサが指差すところを見る。その瞬間、なのはが目を見開いて大きく驚く。

「な！？…あれはロストログアの入ったケース！！」

「なに！？まじかよ……いつの間に……」

三人は驚く。プリスはそんなツカサ達を見て、子供っぽい、イタズラが成功したような顔をする。なのははプリスを見た瞬間、ハッと気づいたようにプリスが倒れていた場所を見た。そこには、穴が空いていたのだ。

「そうだ…あのプリスって子…私の動きを止めた時、地面から布を出していた……まさか…」

「察しの通りだ、公務員…プリスは俺達が戦っていた時、地面に穴を開け、下からトラックに侵入し…ロストロギアを取ったのだ…」

エリアはプリスの頭に手をおきながら、答える。プリスは嬉しそうに笑っていた。

「そうかい…だったら……奪い返すまでだ!」

ヴィタは加速をして、エリア達に攻撃をしようとする。

「だから言っただろう？公務員……もう…戦う気はないって……」

エリアが言った瞬間、エリア達の下に魔法陣が展開された。

「く……しまった!……」

「さらばだ……公務員……楽しかったぞ……」

その言葉を最後にエリア達はそこから姿を消した。

「……………」

「……………」

「……………」

溪谷に静かに風が吹いた。ツカサ達はそんな中、戦いには勝ったようなものの、ロストログアを奪われた敗北感で悔しそうな感じであった。

溪谷でのロストログアの争奪戦は、こうして静かに幕を降ろした。

ワールド・ザ・マジック27（後書き）

勝負に勝って、試合にまけた。ツカサ達！次回もよろしく願います！

また見てなのは（＾Ｏ＾）

ワールド・ザ・マジック28(前書き)

今回は溜書きしていたので、早くも更新しました！

ここから新たな始まり、よろしくお願いします！

ワールド・ザ・マジック28

「みんな…大丈夫か…」

ツカサは地面に着地し、倒れていりシグナム達を見渡す。当たりには傷ついた魔道師達をシャルマや医療魔道師達が、怪我を治している最中である。

「心配ない…シャルマ達が…治療をしている…」

「そうか…」

シグナムとツカサが会話していると上から残りの二人、ヴィータなのはが降りてくる。シグナムの横には眠っているフェイトと、それを見ているザフィーラがいる。

「なのはとヴィータも大丈夫だね？」

ツカサが二人に語りかけると、二人は少し暗い顔をしながらも大丈夫そうに微笑む。そして、ヴィータはゆっくりと近づいて、ツカサの前に立つ。

「おい、ツカサ…」

「……なに？ ヴィ タ…」

ツカサはヴィ タの様子を見て、ゆつくりと身体を向ける。

「じゃあ…教えて貰うか…お前はあの意識を失ってからは何があったんだ？…なんでそんな力を手にいれたんだ？」

ヴィ タは腕を組ながら、仁王立ちしてツカサを睨みつける。ツカサは頭をかきながら、溜め息をつく。

「説明は面倒くさいんだよな…とりあえず、寝ていた時に…色々あった…力を得たとしか言いようがないよ…」

ツカサはゆつくりと歩きながら、フェイトの寝ている横に近づく。

「おい！ だから、その色々を聞きたいんだよあたし達は！」

ヴィ タは握り拳を作りながら、ツカサにガミガミと言い続ける。今にも殴りかかろうとするのをなのはに止められている。

「とりあえず…今はフェイトの目を覚まさせないとな…」

ツカサの言葉に一齐にみんなが振り向く。今のツカサの言葉があま
りにも驚く内容であつたのか、みんな目を見開いていた。

「ツカサさん！？…フェイトちゃん…目を覚ますんですか？…クロ
ノ君だって…あのラインって人から受けた技で目を覚まさないんだ
よ？」

なのははツカサに語りかけるが、ツカサは心配ないようにニツコリ
と微笑む。

「大丈夫…前にラインとかと戦つてなのはがやられた時…目を覚
ました時があつたよな…どうやら…俺が無意識にあの技を解く技
をやっているみたいなんだ…」

ツカサはそう言うと同時に、フェイトの頭に手を触れて目を閉じる。

暗い、闇の中…一人の少女が膝を抱えて座っている。小さな身体に似合わない長く綺麗な金髪をした女の子。顔を隠しながら、泣き声を聞かせないようにしている。

その少女の存在はとても弱く、小さく見えた。そして少女の周りからは声が響いていた。

『アナタはいならい子なのよ…フェイト』

『犯罪者め…貴様は管理局にはいらない…』

『アナタはただの出来損ないよ…』

『クローンの分際で…』

『フェイト…私はね…アナタの事が…大嫌いだったのよ…』

憎悪や嫌悪の籠もった声が少女に降り注ぐ。少女はそれを聞く度、身体を震わせていく。

「うっ！…ひつく……ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…」

少女は怯えている。涙でグシャグシャになった顔を手で擦りながら、ひたすらに謝っている。とても見ていて痛々しい光景である。少女の目はあまりにも光と言う物がなかった。

「う……ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…」

「おい………」

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい………」

「おい……フェイト！…！」

「ふえ！？」

少女は自分の名前が呼ばれた事に驚いて、顔を上げる。さっきまで自分をせめる声だけが響いていた。それなのに、自分と呼んでる声は初めてだったのだ。

「あ…アナタは…だ…誰なの？…どこに居るの？」

「俺は…お姫様を助けにきたナイトかな…」

少女、フェイトの後ろから優しい声が聞こえた。フェイトは後ろを向くと、赤い炎に包まれた人影がいたのだ。

「あ…アナタが…私を呼んでたの？」

フェイトが恐る恐る聞くと、人影はゆっくりとフェイトに近づく。フェイトは身を守るように身体を堅くして、丸くなる。人影はそれでもゆっくりと近づく。

「！…！」

フェイトは目を閉じる。また怖い、憎しみや怒りが混じった声を聞くのかと思ったのだ。

だが、そんな声は聞こえない。フェイトは目を開けると人影は手を差しのばしていた。

「さあ……帰ろう……みんな待ってるよ……」

人影の顔がはつきりと見えた。その顔は優しく、フェイトに向かって向けられていた。

フェイトはゆっくりと差しのばされた手をとった。

温かく、安らぎを感じるようにフェイトは目を閉じた。

「フェイト……ちゃん？」

フェイトが目を覚ました時に見た光景は、仲間の存在。高町 なのは。ヴィ タ。シグナム。シャマル。ザフィーラ。そして、自分を抱えているツカサ・ラグーンの存在であった。

「みんな……あれ?? 私は……」

フェイトは自分に何があったかも解らないような顔のまま、辺りを見渡す。なのはは、フェイトの様子を見て、涙を流しながらフェイトを抱きしめた。

「フェイトちゃん!!」

「うわ…な、なのは?……えっと…」

フェイトはとりあえず、泣いているなのはを抱き留めたまま、頭を撫でる。シグナム達もホッと息をついて笑顔を見せていた。

「さてと…フェイトが無事で帰ってきたし…良かった良かった…」

ツカサは背伸びしながら、肩を回していた。ヴィータはそんなツカサに近づく。

「…じゃあツカサ…そろそろ説明してもらつか…一体何があつて、そんなに強くなったのかとか…テストロッサを簡単に覚まさせたそ

の力の事をな！」

「はいはい……わかったけど……説明は彼女にでもらうから……」

ツカサがそう言った瞬間、ツカサの身体から赤い閃光が現れて、人の形になっていく。ヴィ　タ達は驚きながらも、余りにも綺麗な光に少なからず、目を奪われていた。そして光は完全に人の形になった。

「はじめまして……魔道師の皆さん……私はロストロギアの炎の精霊……トルンと申します。」

ワールド・ザ・ミュージック28(後書き)

トルン登場！

まあトルンも活躍しますよゝ多分…

また見てなのは 〃 〃 (・ ・)

ワールド・ザ・ミュージック29（前書き）

お久しぶりです！皆さん！今まで更新出来なくて、すみませんでした（。 。 ;）

やっと更新ができました…戦いが終わってこれから、日常の話になります、何とぞよろしくお願いします！

では波乱の日常編スタート！

ワールド・ザ・マジック29

「とうわけなのです…ツカサさんにアナタ達に迷惑をかけてすみませんでした…」

今、現在の場所はア スラの司令室。はやてや、任務を終えたのは達がトルンの話を聞き終えた所であった。溪谷の場所で説明をしようとしたが、はやてがみんなゆくりと聞いた方がいいと思い、ア スラで話を聞く事になったのだ。

「そうなんや…なるほど…ロストログアの聖霊…そして力の暴走…精神世界か…だからツカサさんが気を失ったわけや…」

はやてはトルンから聞いた話を纏めて、話の内容を理解した…話を聞いていたシグナム達も同じように理解していた。

「あの…私はコレからどうすればいいでしょう…」

トルンは少し困ったようにはやてに答えた。

「うん…ツカサさんの精霊なら別に居てくれて大丈夫や…ただ、管理局に協力してくれるようにお願いします…」

はやてはニッコリと微笑む。はやての笑顔を見て、トルンはホッと一息ついた。

「それで…フェイトさんとツカサさんの姿が見えませんが…」

「ああ…フェイトちゃんはまだ検査などで病室におる…ツカサさんはその付き添いや…」

はやての言葉にトルンは頷く。そのトルンになのはが近付いて肩を叩く。

「トルンさん…とりあえず私がア スラの案内を致します。ついてきて下さい…」

「あ…はい、ありがとうございます…」

トルンはそのまま、なのはの後をついて行く。

「ほな…トルンさんの案内はなのはちゃんに任せて、シグナム達は自分の持ち場に帰るように…」

「はい！」

シグナムは敬礼をして、ヴィ　タ達もそれに続いて敬礼をし、その場を離れた。

「さて…仕事をやるか…ロストロギアの事があるしな…」

「フェイト…もう大丈夫？」

場所は変わって病室。フェイトはベッドで横たわっていた。ラインから食らった技、精神操作は少なくともフェイトに精神ダメージはある事から精密検査が必要であるのだ。ツカサはフェイトの体調が心配なので、よく体調を聞いていた。

「うん…大丈夫だよ。ツカサのおかげで…」

「そうか…なら安心だ…」

ツカサは微笑むとフェイトの頭を優しい撫で始めた。

「あつ…ツカサ…恥ずかしいよ…頭を撫でられるの…」

「あはは…悪いな…」

ツカサは撫でていた手を戻した。

「あ…そうだフェイト…クロノ艦長もそろそろ目を覚ますよ…」

「え？本当に!？」

「ああ…フェイトと同じ事した…だからもうすぐ目を覚ますよ…」

フェイトは嬉しそうに微笑んだ。クロノはあの日から目を覚まさなかった。クロノの妹であるフェイトはやっと心配から解放されたのだ。

「ツカサ…ありがとう…本当はお礼とかしたいんだけど…」

「いやいや…お礼なんて……でもそうだな…」

ツカサは顎に手を置いて、考える仕草をとるとニヤニヤと笑い出した。とても良い事を考えている顔とは思えない。

「どうしたの？ツカサ…」

「ん？いや……お礼とかだったら、フェイトのキスがいいな〜って思ってた…」

ツカサがキスと言う単語を出した瞬間、フェイトは顔を真っ赤にした。熱でもあるんじゃないかと思えるくらいだ。

「あ…あう？…キス？」

「あはは…冗談だよ…別にしなくても………」

ツカサが続きの言葉を言おうとした瞬間、ツカサの頬には柔らかい感触があった。

「え？…」

ツカサの頬にはフェイトが優しく唇を当てていたのだ。それはまさしくキスだった。

数秒後、フェイトは顔を真っ赤にしながら、唇を離れた。

「あ……フェイト？」

ツカサはキスされた事に目を丸くして、ポカーンとしていた。

「あ…あはは…お礼だよ？…それに、ツカサとはキスしちゃってたし…これぐらいなら…」

フェイトが恥ずかしそうに答える。ツカサはやっと、自分の意識を取り戻して、フェイトにキスされた事を実感した。

「えっと…嫌だった？」

フェイトは首を傾げて、ツカサに訪ねる。

「んなわけあるか！」

ツカサは一瞬でフェイトに抱きつく。

「ひゃあ！ツカサ！？」

フェイトが驚く暇もなく、ツカサに押し倒される。まるでおわずけを食らった犬のようだった。
素早くツカサはフェイトの胸を掴んだ。

「ふあ！？やあ…駄目！」

「フェイト…フェイト…」

ツカサはフェイトを押し倒したまま、フェイトのパジャマを脱がしてゆく。

「や…駄目！落ち着いて…ひゃ！」

ツカサはフェイトの下着を脱がして、一気に胸を揉む。フェイトは身体を震わして、シツを掴む。

「フェイト…可愛いよ…フェイト…」

ツカサは手を休める事なく、右手で胸を揉みながら、左手をパンツの方に伸ばす。

「ツカサ…駄目！…や、やめて…んあ！」

ツカサはお構いなしにフェイトの身体を弄る。息を荒々しく吐きながら、胸や下半身などを弄くりまわす。フェイトは目に涙が溜まって、身体が赤く火照っていた。

「フェイト…俺…我慢できない…」

「ま…待って…駄目…ツカサ…」

フェイトが手を前に出してツカサを制止させようとするが、ツカサは全く止まる気配はなかった。

「ふふ…フェイト…」

コンコン。

「フェイトちゃん…入っていい？診察の時間だよ」

すると扉を叩く音と共に、シャルルの声が聞こえた。フェイトはツカサをはじいて布団をかぶり、ツカサはあたふたと椅子に座った。

「フェイトちゃん…入っていいかしら？」

「あ…はい！大丈夫です…」

ガチャ

フェイトの呼びかけのあと、病室の扉が開き、シャルとヴィタが入ってきた。

「はい…診察の時間よ」ツカサくんは外に出ててね」

シャルは入ってくると同時にツカサの肩を叩いた。女性の診察をするのに男性が居るのは失礼である。

ツカサは先ほどそれ以上の失礼をしたのであるが…

「あはは…すいませんシヤマルさん…あ…ヴィ　タも悪かったな…」

「別に気にしてねえ…早く出る…」

ツカサはヴィ　タにも催促されて、見つからずに良かったとホツとしながら、病室の外に出た。

しかし、ツカサは気づいていなかった。ヴィ　タに外から全て聞かれていた事に…

ワールド・ザ・ミュージック29（後書き）

さあ…これから、どうなるか。皆さん！次回は早く更新しますので、
また見てなのは（ ）

ワールド・ザ・ミュージック30(前書き)

はい！かなり早めに投稿完了！

皆さん日常生活が一体どうなるか楽しんでください！

ワールド・ザ・マジック30

「お前ら…準備はいいな？」

大きな部屋の中、中世のお城のような部屋を思わせる場所、そこに大きな剣を携えて、エリア・スクアルが立っていた。

仲間のプリス達も椅子に腰かけて、エリアの話を聞いていた。

「ぷゝわかつてるよ…ちゃんと次の作戦も頭に入ってるよゝ」

プリスはただれたようにエリアに言葉は返した。何だか疲れているようにも見える。

「とりあえず…儀式の準備は完了してまいります…あとは儀式に必要な物を集めるだけです…」

レイスは本を読みながら、エリアに答える。プリスの様子にエリアが口を出そうとしたタイミングだった為、プリスを庇ったように感じる。

「すまない…儀式の事と言い、前の溪谷の岩人形達の事も、レイスには助かっている…」

エリアはレイスに頭を下げて、お礼を言う。

レイスは優しくエリアに微笑んだ。

「気にしないで下さい…私達は同じ目的を持つ仲間ですよ?」

レイスは本を閉じて、エリアに告げる。仲間と言う響きにはどことなく悲しみが混じっているようにも感じる。

エリアは下げた頭を上げて、全員と向き合ったように目を配る。

「よし…これより、儀式に必要な物を集める。管理局には悟られないように、作戦を実行していくぞ…」

エリアの言葉に全員が頷いた。

「よし！ラグーン…模擬試合はこれぐらいにしよう…」

トレーニングルームでシグナムの声が響く。シグナムの反対側にはツカサがデバイスを構えて、立っていた。

今、シグナムとツカサは模擬戦をしていたのだ。そこにトルンとなのはも二人の試合を観戦していた。

「あはは…シグナムさんありがとう…いい運動になったよ」

「いや…私は強くなったお前と戦ってみたかったからな…やはりすごかった…また頼むぞ…」

シグナムとツカサが手を繋いで、握手をする。なのはとトルンも試合が終わったのを確認してツカサに駆け寄る。

「はいツカサさん、お疲れ様」

なのははツカサにタオルを渡す。ツカサはありがとうと言いながら、

そのタオルをとった。

その時に軽く手が触れたが、ツカサは気付いていないのかそのままタオルを使い始める。逆になのは手が触れたのに気付いたのか少し顔を赤らめた。

「さて…模擬戦も終わった…ラグーン、そしてトルンも家に帰るぞ。」

「

その言葉にツカサは頷くが、トルンは目を見開いてびっくりした。

「あの…シグナムさん…私もいいんですか？」

トルンはオドオドをした感じで、シグナムに答えるがシグナムはそんなトルンを見て、優しく微笑んだ。

「何…大丈夫だ…今更一人ぐらい増えても我が主は気にしないさ…それとお前を家に住まわしてくれって言ったのはラグーンだぞ？」

「え？…ツカサさんが？」

トルンは驚いて、ツカサの方に向く。ツカサは笑顔でトルンに答え

てた。

「あはは、トルンだけが一人って寂しいよね…だから、はやてに頼んだんだ」

それを聞いたトルンは困ったような顔をした。

「えっと……その…本当にいいんですか？」

「ああ…構わん…」

シグナムがそう言つと、トルンは赤くなって下を向く。

「えっと…ありがとございます…二人共…」

トルンは深々と頭を下げてシグナムとツカサにお礼を言った。

この日トルンは八神はやて一家の家族として迎えられたのだ。

「おーやっと来たか…」

ア スラの出口付近、そこにはヴィ ダがいた。

トレーニングルームを出たツカサ達と合流する為に、待っていたよ
うだ。

「よう…ヴィ ター待っててくれたんだ」

ツカサはヒラヒラと手を振りながら、ヴィ タに近づく。
ヴィ タはツカサを横目で見たあと、すぐに顔を逸らした。

「じゃあ…皆さん私はフェイトちゃんのお見舞いに行くので…」

なのははヴィ タ達に手を降って、別れた。ツカサ達も手を降って
見送る。

「よし…じゃあ、ヴィ　タ行こう！トルンの歓迎会もしたいし！」

「ああ…」

ツカサはトルンの肩を叩いて、テンションマックスだがヴィ　タは
気力がないような返事をしたのだ。

ツカサはしかし気付いていない。

「よし…行こう！トルンに速く八神一家のお祝いをしなきゃ！」

「あ…ツカサさん…引つ張らないで…あわわ…」

ツカサはトルンの手を取りながら、一気に走り出す。ツカサのテン
ションの高さにシグナムは苦笑いする。

「全く…アイツは子供だな…ヴィ　タ…私達も早く行くぞ…」

「ああ…」

シグナムの言葉にもヴィ　タは空返事を返した。

シグナムはヴィ　タの様子に少し違和感を感じる。

（ヴィ　タの奴、どうしたんだ？何だか氣力が感じられん…）

シグナムは知らなかった。ヴィ　タがツカサとフェイトのやり取りを聞いてから、元氣がないようになった事を。

「みんなただいま」

ツカサ達はそのまま、八神一家に着く。ツカサのテンションは全く変わらない。

「はい皆さんお帰りなさいです！はやてちゃん達が料理を作って待ってますよ」

ドアを開けると、リインがエプロン姿のまま、ツカサ達をもてなす。料理の手伝いをしていたと考えられる。

「ありがとうさあトルン、入った入った！」

「あわわ…お、お邪魔します…」

ツカサがトルンを押して、家の中に入る。それに続いて、シグナムとヴィ　タも家に入る。

この時もヴィ　タは少し沈んでいた雰囲気だった。

「はやて…ただいま…」

ツカサが台所に一気に駆け抜けるように入る。中にははやての他、シヤマルとザフィーラも居た。

「みんな、お帰りなさい…そんなに慌てんでも、料理は逃げへんよ」

はやてはツカサとトルンの背中を叩きながら言う。
テ　ブルには中々の料理が並んでいて、とても美味しそうであった。

「うおゝ美味しそう！！流石ははやての手料理！早く座りなトルン！」

「うえ…あ…はい…」

トルンは戸惑いながらも、はやての指定される席に座る。

それに続いてシグナムとヴィ　タも荷物をおいてから、席に座る。

「ほなゝトルンの事もあるし、みんな今日は明るくやろうなゝ」

はやても残りのみんなも座って、祝う気満々のようだ。明らかに席がトルンを囲んでいるようであった。相変わらずヴィ　タは少し暗かった。

「えっと…いいんでしょうか…私がこんなふうにしてもらって…」

「ええんやええんや…気にしないでご飯一緒に食べよや…」

はやては気にしないようにみんなが席についたのを確認して、手を合わせる。

「ほな…新しい家族として来たトルンを迎える会や…みんな遠慮せずじャンジャン食べてしゃべってな…では、いただきます！」

はやてのいただきますの声に、みんなもいただきますと答え、ご飯を食べ始める。

リインとシャマルは慣れるようにと、トルンに優しく話をしている。リインはトルンと同じ精霊なので、話をしている時の顔はとても嬉しそうだった。

「ねえねえはやて…あの話どうなった？」

ツカサは肉を飲み込んで、はやてに訪ねる。

「ああ…ツカサさんとトルンを町に案内する話な」

「ええ？私とツカサさんですか？」

トルンは自分の名前が出てきた事に驚いたて、二人の方を向く。

「そや…二人はミッドしか見たことないやろ？だから案内しようと思

つてな」

「で…はやてか、シャルさんが案内してくれるの？」

「いや？私やシャルはちょうど駄目なんや…色々と忙しくてな…シグナムもや…」

「え？…じゃあ…」

「大丈夫や、なのはちゃんに頼んでみるわ…あとヴィ　タもお願いしたいんや」

はやてがそう言つてヴィ　タに顔を向ける。ヴィ　タは少し重いように手を動かして、食事をとっていた。

「？…ヴィ　タ？どないしたんや？」

「え？…ああ！いや？何でもないぜ！はやて！？」

ヴィ　タは慌てたように、はやての方に手を振る。はやては不審に思いながらも、ヴィ　タに再び問いかける。

「ほな…ヴィ　タにも、トルンとツカサの町の案内をお願いしたい

やけど…ええかな？」

「え……あたしがか？……別にいいけど……」

ヴィ　タは少し顔を下げながら言った。

「じゃあ決定だね！！トルン行くぞ　！！」

「え……お、おお　」

トルンは戸惑いながら、ツカサのあとに手を上げた。

トルンとツカサは町に繰り出す事に決定。

ワールド・ザ・マジック30(後書き)

さあ…次回…波乱の展開が！

ツカサ！どうなるか！

特別編・ツカサの妄想日記3（前書き）

ヤッホー！！大好評第三弾（多分）

ツカサの妄想日記始まります！

特別編・ツカサの妄想日記3

「よし！久しぶりの日記開始だ！」

ツカサの日記、それは妄想を膨らませたとてつもなく悲しみを帯びた日記なのである。

「うーん…よし！今日はヴィ　タでロリロリと書いてみますか！」

ツカサはゲヘへと気味の悪い笑いをしながら、ペンを動かし始める。

これから、ツカサの妄想日記始まります。

三月十二日

今日は疲れた。あまりにも多くの書類整理。やっとそれが終わって、八神家に帰る事ができたのだ。

そして、家に着くと同時にバタとソファに倒れる。
今日ははやて達も忙しく、家にいない。だから今家に居るのは…

「お、お帰り…仕事お疲れな…」

言おうとした先に現れたのは、ヴィ　タである。今家にはヴィ　タと俺しかいないのである。

俺はヴィ　タを手招きし、近づいてきたヴィ　タを抱きしめる。

「ふぁ！？い、いきなりなにすんだ！」

ヴィ　タは顔を赤くして、俺から離れようとするが、抵抗は弱くて本当に嫌がっているとは思えなかった。

とりあえず俺はヴィ　タを抱きしめる。今の俺には少しでも癒やしが欲しかった。

「は…離せよ！やめれよ！」

ヴィ　タからは少し汗に混じったような独特の匂いが発生されていた。身体を抱いてる分更に感じる。だが、俺にてはいいにおいを感じる。思わず、息を吸い込んでしまう。

「にゃ！？に、匂いを嗅ぐな馬鹿！！」

ヴィ　タは顔を更に真っ赤にして、俺を殴る。俺は気にせずさらにさらに匂いを嗅ぐ。

「ば、馬鹿やろ！！いい加減にしろ！！」

ヴィ　タは俺を突き飛ばして、奥に行ってしまう。

俺は溜め息を吐いて、仕方がないので風呂に入ろうと考えた。

風呂場についた俺はすぐ服を脱いで、風呂に入るようにする。身体を風呂に入れて、癒やされたいと思った。
しかし、みんな知ってるか？風呂って逆にストレスたまるんだって話だよ？

「お…おい…ツカサ。今風呂か？」

そんな豆知識を言っていたら、ヴィ　タが来た。
何だろうと思いつながら、俺はヴィ　タに居ると返事した。

「そつか……なら、私も入るぞ？」

ヴィ タはいきなりそんな事を言うと、ガラッとドアを開けて、風呂場に入ってきたのだ。

入ってきたのに驚いたが、ヴィ タの格好にも驚いた。

ヴィ タの格好は言わば、スクール水着にニーソックスを掃いた格好だったのである。

「な、なんだよ…背中流しにただけだ！それにお前が前読んでた本にこの格好が…あったから…その…やってみただけだ…」

ヴィ タが顔を赤くしてそんな格好をしている為、俺は完全に理性の糸が切れた。

俺は一気にヴィ タを抱きしめた。

「ああ！なにしやがる！？」

ヴィ タは抵抗するが、全く俺は気にせずにヴィ タを押し倒して、身体を弄る。

「ふあ！…や、やめ…ん！？」

俺はヴィ タの唇をキスして塞ぐ。

そして、スクール水着の間に手を入れて、ヴィ タの胸と下半身を揉むように触っていく。

柔らかな感触が俺手の平に伝わる。

「んん！…ちゅう…じゅる…くちゅう…」

俺は舌を絡ませながらのキスをし、ヴィ タの身体を抱き寄せる。

すでに裸だった俺は、ヴィ タのスクール水着をゆっくりと脱がし始めた。

白い肌があらわになっていくのが目に映る瞬間、更に俺の身体は熱を帯び、鼻息を荒くさせた。

「や…やめれよ…ツカサ…」

ヴィ タは抵抗する気力はなくなり、声が小さくなっていた。

スクール水着が崩れ、顔が真っ赤になってるヴィ タはすごく色っぽく、俺の瞳に焼き付いていた。

俺はもう獣のように、息を切らして、自分の身体の一部が破裂しそうにビンビンとしていた。

俺が優しくヴィ タに語りかける。

すると、ヴィ　タは口をとじて、覚悟を決めたように力を抜いた。

もう俺は我慢などは捨てた瞬間だった。

ヴィ　タのスクール水着を脱がし、足を広げさせ、大切な所に自分の大切な所を当てた。

「や、優しく…やれよ…」

ヴィ　タの言葉に俺は頷いて、それを…

「あれ？…ページ数が足りない？」

しかし、続きを書いていたツカサは日記のページ数が足りないのに気づいた。

「予備ない……オワタ…」

ツカサはそのままくずれおちました。

おしまい

特別編・ツカサの妄想日記3（後書き）

やっちゅんなゝ相変わらずゝ）（

ワールド・ザ・マジック31（前書き）

おっまたせしました！

かなり長い間お待たせしました！

ワールド・ザ・マジック、再開です（＜―＞）

やっこのこさ行けました！お待たせした事は誠に申し訳ございません！

出来れば、再開したので、またペースをあげていきたいです！！

では！これからもよろしく願います（ ）

ワールド・ザ・マジック31

「わあゝすごい…ビルとかが沢山あります…」

街に買い物にきたツカサ達は今、トルンの服を買いつゝデパートに向かっていた。

トルンやツカサは、地球が初めてなので、当たりをキョロキョロとして目を輝かせながら、驚きの声を上げていた。

なのははそんなトルンとツカサの様子を見て、優しく微笑んでいた。ヴィータはそのなのはの後ろをトコトコとついていた。その顔は俯いていて、笑顔がなかった。

「あ…みんな、デパートについたよ。トルンさんの服、可愛いの探さないかね」

「あ、はい！ありがとうございます…」

なのははニコツと笑顔をトルンに向けると、トルンは照れたように、頭を下げながらお礼を言う。

どうやらトルンは意外と照れ屋なんだろうが、思う場面でもあった。

「トルンには似合いそうな服多そうだな〜ヴィタ。」

「えー!?…あ、そうだな…ツカサ…」

ヴィタの反応にツカサは首を傾げるが、そのまま前に進む。
ヴィタも顔を下げながらついていく。

デパートに入ったみんなはとりあえず、
服を選ぶ。ツカサとトルンは気に入った服を選んで着ていた。

「えっと…皆さん似合いますかね?」

トルンは顔を赤くしながら、試着室から出てくる。
肩を出している上着に、ヒラヒラのロングスカートを穿いていた。

「うん!似合ますよトルンさん…」

「トルンはやっぱり可愛いね〜!」

「……似合ってるぜ…」

なのは、ツカサ、ヴィ　タは順番づつに答える。

トルンは更に顔を赤くして俯く。肩まで赤くなっているのがわかる。

「じゃあ…その服にして、次の居場所に行きましょう!」

なのははトルンの背中を押して、会計に向かう。ツカサもヴィ　タの手をつかみ、そのあとを追う。

「行くぜ! ヴィ　タ!」

「え? あ、ああ…」

ツカサに引つ張つられてながら、ヴィ　タはあとをついていく。

トルンとツカサの服を買ったあと、みんなは屋上に向かう。
このデパートはかなり広く、遊び場にもなっている。

「わあ…すごい…」

トルンは屋上につくと同時に子供のように目を輝かせながらトコトコと動きまわっている。

なのはそれを追い掛けていく。まるでお母さんみたいだった。

「あはは…トルンも子供だな…じゃあヴィ　タ、俺達も二人で回るか」

「え…わ、わかった…」

ツカサはまた、ヴィ　タの手を引つ張つり行く。

アイスクリーム屋について、二人分のアイスを購入し、二人はベンチに座る。

「うまいねゝアイス！」

「そつだな…」

ペロペロとアイスを舐めながら、ヴィ　タは元氣なく答える。ツカサも流石に氣になったのか、ヴィ　タの顔を覗き込む。

「大丈夫か？元氣ないぞ？」

「そ、そんな事ね　よ！あたしは元氣だ！」

ヴィ　タはぷいと顔を逸らして答える。ツカサも氣になりながらも、アイスクリームを食べる。

「そ、それよりツカサ…お前、身体とかは大丈夫なのか？」

そんなヴィ　タはチラツとツカサを見ながら、話しかける。
ツカサはアイスを食べるのを止める。

「…何でそんな事聞くの？」

「だってお前…あんだだけの力を手に入れて、身体に負担がないなんて事ないだろ？」

「…うーん…そうなんだけどさ……はあ……」

ツカサは溜め息を吐きながら、自分の左腕を捲ってヴィ　タに見せた。

左腕には呪文のような文字が刻まれていた。ヴィ　タは驚いて目を見開く。

ツカサはすぐ、腕を隠した。

「とりあえず、この呪文みたいなやつが、胸のロストログアから続いて身体に広がってるんだ…」

「…平気なのか？」

「さあ…わかんない…あんまり他の人には言わないでね…知ってるの、ヴィ　タと身体調査してくれたシヤマルさんだから…」

ツカサがそう言うといヴィ　タが、ツカサの胸ぐらを掴んで睨みつける。

「お前な…そうやって隠す気かよ！仲間だろ！？心配かけさすような事するな！！」

ヴィ　タが怒ると、ツカサは優しく微笑んで、ヴィ　タの手を握った。

「悪い…心配かけたようだな…わかったよ、他の人にもちゃんと言う。心配してくれてありがとう…」

「べ、別に心配なんかしてねえよ！！」

ヴィ　タは顔を赤くして、顔を伏せる。

ツカサはそれを見て、頭を撫でる。

「ヴィ　タ…大丈夫。俺は命を捨てるような事はしない…」

ツカサの言葉にヴィ　タも黙った。

そしてなのはとトルンはアイスクリームを食べながら戻ってくる。

「ほむ…アイスクリームっておいひいですね」

アイスクリームをモグモグと食べながら、トルンは嬉しそうに喋る。急いで食べたから口元にはクリームがついていた。

「おいおい…口元についてるよ？」

ツカサは立ち上がって、トルンの口元をハンカチで拭く。

「ふあい…すみません…」

子供っぽいトルンにツカサもなのはも、暗かったヴィ　タも笑みをこぼした。

「にやはは。じゃあ、今度は違う場所に行きましょう」

なのはは、楽しそうにトルン達に言いかける。

トルン達も笑顔のまま、なのはのあとに続いた。

「はあゝ今日は楽しかったな」

ツカサはお腹をさすって満足そうに歩いていた。

みんなは夕食を済ませたようで、帰り道を通っていた。

「今日はおんがとな…なのは…なかなか楽しめたぜ…」

「いえいえどういたしましてヴィ　タちゃん。トルンさんもツカサさんも楽しめたし良かったよ」

「そうだな…」

「それにヴィ　タちゃんも、元気出たみたいだし」

「な!？」

ばれていた事にヴィ　タは驚き、顔を赤くして伏せてしまった。
なのはには隠し事出来ないかと痛感したヴィ　タだった。

「もう…大丈夫だね？ヴィ タちゃんが何で暗かったかはわからなかったけど…今はそこそこだしね。」

「あ、ああ…大丈夫…心配かけて悪かったよ…」

そう言うとなのはは、ニコニコと笑う。

「二人共々遅いぞ！」

前ではツカサとトルンが二人に対して手を降って待っていた。

「はい！今行きますよ！行こか、ヴィ タちゃん！」

「あいよ！」

二人は走り出した。

ヴィ タは顔を叩いて、シャツと目を開かせた。

さっきまでと違い、決意の帯びた目はツカサを見据えてた。

（あたしは…もうクヨクヨしねえ…ツカサを守る…それに、フェイ

トにやってた事…またやりだしたらぶっ飛ばす！……それでいい…
だってあたしは…)

ツカサが…好きだから…

ワールド・ザ・マジック31（後書き）

ヴィ　タは自分の気持ちに気づいた感じですよ！

恋愛は苦手で至らないかも知れませんでしたがい、これからよろしく願います！

ワールド・ザ・マジック32(前書き)

やったどおおおお！

1日で一気に仕上げました(<|>)
かなりサボっていた分頑張りました！

まあストーリーは出来たので()
では、これからもよろしくです(^| ^)()
v

ワールド・ザ・マジック32

「みんな、すまなかったね…クロノ・ハラウン、再び戻ってきたよ…」

クロノはビシッと敬礼を決めると、並んでた隊員達やなのは達もビシッと敬礼をした。

溪谷での決戦から六日後、ラインに精神操作の攻撃を受け、眠っていたクロノが目覚めたのだ。
めでたく、艦長代理だったはやても、その座から降りる事にもなった。

「ほんま、クロノ君が帰ってきてくれて助かるわ。これで私の負担も減るもんな。」

「はは…全くだ…はやてには感謝しなくてはな…頭の堅いお偉いさんの相手をしてくれたしね。」

ガシッと二人は握手しながらも、笑みをこぼしていた。
少しだが、場の雰囲気がよくなったようだ。
クロノが復活して指揮が上がったのである。

「ふふ…良かったね、フェイトちゃん。クロノ君が元気に復活して。」

「うん…本当に良かった…ツカサのおかげだよ。」

フェイトは笑顔でツカサに振り向く。

照ながらもまんざらじゃないツカサは嬉しそうに笑っていた。

「あ、そうだツカサ君。」

すると、なのはがひょこつと顔を出して、ツカサに呼び掛ける。

「ん？何、なのは？」

「ほら…ツカサ君が頼んでいたの出来たらしいよ？」

「え？本当に!？」

ツカサは驚いたように言うと、なのははニッコリと笑って頷いた。

「じゃあ…今すぐ取りに行かないとな…なのは、場所はどこ？」

「えっとね…第2コントロール室だよ。」

「あら、いらっしやい。ツカサ君だよな？」

第2コントロール室についたツカサを待っていたのは一人の女性だった。

彼女の名前はエイミー・リミエツタ。

最近に、ア スラに戻ってきた通信司令である。

ツカサとは面識は無かったが、クロノやなのは達とは昔からの知り合いらしい。

「ああ、はい！自分がツカサ・ラグリーンです。よろしくお願いします！」

「あはは、固くなくていいよ。とりあえず、これ渡すよ。」

そう言って、エイミーは懷から腕輪のような物を取り出した。

デバイスのようだ。

「おお！ありがとうございます！…すいません…わざわざ頼んで頂いて、渡して頂けるなんて」

「いいんだよ。クロノ君を助けてくれたんだし、これでチャラって事で…とりあえず、ツカサ君の新しいデバイス、起動させてみて。」

「はい。」

返事したツカサはすぐにデバイスを起動させた。
すると、前にツカサが使っていたデバイスとは違い、赤と黒で色を統一して、形も変わったデバイスが出てきた。

「これが…俺の新しいデバイス…」

「そうだよ。ICSストレートデバイス67型、それに君が頼んどいたカトリッジシステムも搭載だよ。」

そう、ツカサが頼んだのはなのは達も使っている最新のシステム、カトリッジシステムであった。

「はい…すごいです…助かりましたよ。」

「じゃあ、カトリッジシステムの説明に入るね。」

「あ、はい…」

ツカサはそのままシステムの説明を受ける。

少しして、説明の途中に扉が開いた。

「よおエイミィ、久しぶりだね。」

「ラグーン、デバイスの方は順調か？」

「んあ？ヴィタにシグナムさん？どうしたんですか？」

入って来たのはヴィタとシグナムだった。シグナムの肩にはリインもにこやかに座っていた。

「あら！久しぶりだね、三人共々元気そうで良かった！」
エイミィは嬉しそうに三人に手を振った。

旧知の仲と言うのは本当らしく、エイミィはシグナム達と仲良く話している。

「とりあえず、私はラグーンのデバイスが新しく出来たと聞いて、見たくなっただ…」

シグナムは不敵に笑うと、ツカサのデバイスを見る。
「なんだか、戦いようにウズウズしているようだった。」

「ヴィータはそれに気づいてるのか、はぁと呆れたように溜め息を吐いた。」

「あはは…じゃあ、シグナムさん。模擬試合やりますか？」

「お？お前から誘ってくれるとはな…いいだろう…やってやろう…」

シグナムとツカサにニヤリと笑いながら、謎の闘志を燃やしていた。

「リインもヴィータ、エイミィは苦笑いするしかなかった。」

「じゃあ、リインがシグナムとツカサの対決を実況するです〜！」

その中で、リインがクルクルと回って、嬉しそうに言った。

「じゃあ、私が模擬試合の設定するから、ヴィ　タも手伝いお願い
」

「あいよ」

エイミィとヴィ　タはコンピューターをいじり始めた。

シグナムVSツカサの試合が今、始まる。

「終わったか…」

とある惑星。巨大な魔物の蛇が倒れていた。その上に立っていたのは、エリアだった。

エリアはそのまま、懷から、ロストログアのビーストを取り出して、魔物に翳した。

すると、魔物はそのままロストログアに吸い込まれた。

「よし…此方は完了だな…すぐ、違う所でまた回収しなければな。」

バツとマント纏い、エリアはその場を去っていた。

「はぁ…はぁ…すごいな…ラグーンの新しい力は…」

「そ、それに互角以上戦えるアナタもすごいですよ…シグナムさん…」

模擬試合が終わった二人は、ボロボロになりながらも部屋から出て来た。

「二人共お疲れ様です！スポーツドリンクとタオルですよ」

大きくなったリインがツカサとシグナムにタオルとドリンクを渡した。

「ま…それにしても、バトルマニアのシグナムはともかく…ツカサ

が戦いを誘うとは思わなかったな…」

不思議そうにヴィ　タがツカサを見る。

「まあ…たまにはそんな事あるよ…それに…」

「それに？」

「試合あとの女性って、汗で服が透けてくれるんだよね」

ドガア！！！！

ツカサはヴィ　タとラインにダブルパンチで吹っ飛ばされた。

ちなみにシグナムも、胸の辺りを隠しながら、ツカサを睨みつけていた。

「全く…ラグーンは相変わらずだな…」

「ああ…情けなくなってくる…」

「ツカサ！エッチなのはいけないですよ！」

三人のお叱りの中、ツカサはすいませんと頭を下げていた。

（あはは…まあ…本当は、強くなったか…確かめたかったんだけどね）

ツカサはそんな事を思いながら、みんなにペコペコと頭を下げていたのであった。

新たな力が、ツカサを導くのかどうかは、自分次第だ。

ワールド・ザ・マジック32（後書き）

ツカサの新デバイス話ですね

エイミィさんを出すタイミングになったので良かった（＾|＾）v

このまま、話はどう展開させていききたいです!!

また見てなのは（＾O＾）

ワールド・ザ・マジック33（前書き）

はい！また素早く書きました！

今回は珍しくギャグ回です！

あんまりこういうの書かないので、少し駄目な点があるかも知れませんが、よろしく願います！

33話始まります！！

ワールド・ザ・マジック33

「はい。検査完了よ」

「ありがとうございます。シャマルさん…」

治療室での検査をしていたツカサは、上着を着ながら、シャマルにお礼を言う。

ツカサは今、ロストログアの検査をしていて、ちょうどそれが終わった所である。

「心身健康…いや、むしろ…有り余るくらい…」

「どんな感じにですか？」

「筋肉神経や伝達機能が上がって、やけに身体の肉やらがしつかりとついているし、魔力も前より上がってる…つまりは身体能力も魔力も上がってるって事よ…」

「はは…すごいや。まあ強くなってるなら大歓迎ですな…」

ツカサは上着を着ると、シャルムにお辞儀をして部屋を出て行った。

「…………ツカサ君…」

シャルムはそれを心配そうに見ていたのであった。

「ツカサさん…検査どうでした？」

部屋を出て、少しするとアスラの制服を着たトルンが待っていた。
トルンもちゃんと働くと言う事で正式に職員となったのだ。

ちなみにクロノ艦長の計らいである。

「あ、うん…大丈夫だったよ…ありがとうねトルン。」

トルンの頭を撫でながら、ツカサは優しくほえんだ。
トルンは顔を赤くして、照れたように下を向いた。

「じゃあ…お腹も空いた事だし、食堂にいくか。」

「あ…はい！」

ツカサはお腹をさすりながら、食堂の方に向かう。
トルンも慌てながらそのあとについていく。

食堂につくと人がなかり群がっていた。

ガヤガヤと騒がしくなつて、事件でも起きたみたいだった。

「何があつたんでしょうね？」

「さあ……ん？」

二人が不思議そうに眺めていたら、人ごみの中から、担架で運ばれくる者が数人いた。

まるで地獄を味わったように苦痛の表情を浮かべていた職員は、そのまま運ばれていった。

ツカサとトルンは人ごみを避けながら、現場にたどり着く。

「な、なんだ…これは…」

「ひゃあ…真っ赤です…」

そして、そこには真っ赤な色をしたカレーが並べられていた。まるでマグマのようにそのカレーはグツグツと音を垂れていた。

「あの…な、なんなんですか？あのカレーは？」

ツカサは横にいた職員に訪ねる。

「あれは…ミッドチルダに伝わる、伝説のマグマカレーだ…あれの辛さは以上で、食べた者の臓器を焼き尽くすらしい…」

「危なすぎだろ…！なんで、そんなカレーがここに？」

「うん…私も詳しくはないが…実は隊長達がこのカレーに挑戦するらしいのだ…」

「隊長って…まさかはやて達か！？」

「ああ…そうみたいだ…さっき食べてた職員達は、味見程度だったのだが…今の有り様だよ…」

ツカサとトルンは顔を見合わせ、一体どういう事？という感じで驚愕していた。

そして、そんな置いてきぼりの二人を差し置いて、外からはやて、シグナム、なのは、フェイト、ヴィタ、ザフィーラが堂々と入って来た。

その瞬間、観客からは歓声が上がった。

ツカサとトルンは慌てながら、はやて達の方に向かう。

「ちょ！みんな、何でこんな事をしてんだよ！？」

ツカサがそう言うと、みんなは困ったように顔を苦めた。

「えつとな…実はあの、伝説のカレーな…ある管理局のお偉いさんが作ったもんでな…あれを食べれば、色々と支援してくれるって話なんや…」

「それで…あたし達で完食する事にしたんだよ…」

はやてとヴィ タの言葉にツカサはポカーンと口を開ける。
もう言葉もでないようだった。

「だ、大丈夫だよ！私達でかかれれば何とかなるの！」

「う、うん…支援して貰えれば、クロノ艦長はやても楽出きるし
ね…」

「ああ…騎士にはやらねばならね時がある…そうだろ…ザフィーラ
？」

「ああ…我が盾…使う時がきたようだ！」

盾の使い道間違ってますから　！！と心の中で突っ込んだツカサを
後目に、はやて達は席につく。

「なあ…トルン…みんな大丈夫かな？」

「い、祈りましょう！」

トルンはギュッと手を握って祈るように掲げた。

ツカサは溜め息を穿きながらもみんなを見守る。

今、世紀の戦いが幕を広げた！

「……いただきます！」「……」

いただきますを合図にみんなはスプーンを取る。
そしてマグマカレーと睨み合う。

あまりの辛さなのか、マグマカレーと見つめ合っているのは達は、
すでに涙目状態になっていた。

「く……私は守護獣ザフィーラ！こんなもので怯んだりはせん！」

そんな中、高らかに声を上げたザフィーラはその勢いのまま、一気に
マグマカレーを一口食べた。

バタッ！

ザフィーラは白目になりながら倒れた。

「ザフィーラあああああああ！……！」

ツカサの叫びむなく、ザフィーラはそのまま運ばれて行った。

「そんな…ザフィーラがやられるなんて…」

「く…将として不覚！」

「シグナム！落ち込むんじゃねえ！！次はあたし達がやるんだあああああああ！！」

ヴィ　タとシグナムは目を輝かせ、二人同時に一気にマグマカレーを口に放り込んだ。

ドガア！！

ヴィ　タは頭をそのまま叩きつけた。

シグナムはスプーンを握りしめるようにプルプル震えていた。

「へへ…た、たたいた事ねえ…な…ま、まだまだ…いける…」

「こ、これしきで…我がけ、剣はお…ねね…」

二人はプルプルと立ち上がりながら、二口目を取ろうとするが、そのまま地面にゆっくりと倒れた。

「ヴィ　タあああああああ!!」

「シグナムさんんんんんん!!」

ツカサとトルンの声が響く中、シグナムとヴィ　タは燃え尽きたように真っ白になった。

「く…残ったはうちと…フェイトちゃん…なのはちゃんやな…」

三人は、さっきの惨劇をまのあたりにしたせいか、一步が踏み出せないでいた。

しかし、フェイトが決意したように、マグマカレーをすくった。

「フェイトちゃん!？」

「だ、駄目や!早まったらあかん!」

はやてとなのはフェイトを制止するが、フェイトはニッコリと微笑みかしてて、そのままグマカレーを口に入れた。

なのは…私ね…今まで幸せだったよ

バタッ！

フェイトは穏やかな顔のまま倒れた。

そして担架に運ばれた。

何だか、幻聴が聞こえた気がする。

「フェイトおおおおおおお！！」

ツカサは叫ぶ。何もできない無力な自分を呪いながら…

「なのはちゃん…やるしかないな…」

「うん…頑張ろ…はやてちゃん…」

二人は息を吐いて、目を閉じて祈った。

そして一気に目を開いて、スプーンでマグマカレーをすくった。

観客達が見守る中、二人はマグマカレーを食べた。

はやてはイスごと倒れて、そのまま動かなくなった。

なのはは耐えていた。汗がダラダラになりながらも、必死にスプーンでマグマカレーをすくう。

観客が驚きつつ、ツカサとトルンが見守りながら、なのはは二口目を口に入れた。

そして、ゆっくりとなのはは立ち上がった。

一体どうしたんだと思って、なのはを見ると、なのはは立ったまま気を失っていた。

その立ち姿はあまりにも輝いて見れた。

だが、結果は全滅。

もう終わった。

食堂の職員達はみんなそう思った。

「わ、私が食べます!!」

だが、その空気を打ち破ったのはトルンだった。

トルンはわれていく人ごみを歩いて、マグマカレーの前に立った。

「トルン！ムチャだ！やめろ!!」

「…ツカサさん…私は、皆さんの想いを無駄にしたくない！」

ツカサの制止にも呼びかけず、トルンは座ってスプーンを取った。

「いきます…私の全力全開！」

トルンはマグマカレーを口に含み、飲み込んだ。

「あれ？意外と美味しい…」

「ええええええええええええ！？」

思わず叫んでしまうぐらいの反応だった。

トルンはマグマカレーを物ともせず食った。

しかも全員分のマグマカレーをペロリとだ。

職員達は驚愕した。

可愛らしい女の子が笑顔でマグマカレーをほうばっていたのだから。

そして、全ての平らげたトルンは満足せうにしていた。

今日、伝説が生まれた。

ワ
ルド・ザ・マジック33(後書き)

マグマカレー…

どんな辛さなのか、想像してみてね)
(

ワールド・ザ・マジック34（前書き）

ふう…

素早く更新完了（＾―＾）v

今回は珍しくエリア達視点ですね～

エリア達が一体どうしてるか？と言った謎がわかります…

物語はかなり進んでいます！

これからもお願いします！

あ、そうだ！

これで、ワールド・ザ・マジックの人気投票したいので、感想で送って下さいw

まあ出来ればですがw

一応オリジナルキャラクターとなのはキャラクターでおねがいしますね～

出てる人限定です！

感想お待ちしてます！（＾―＾）v

ワールド・ザ・マジック34

「くらえ〜！ソニットブレイク〜！」

ドッ！ドッゴォン！！！！

巨大な音がし、辺りを埋め尽くす砂煙が舞う。

辺りは木に囲まれた森であった。

そこには横たわる魔物と、プリスとレイスが立っていた。

「プリスさん…あんまり激しくしたら駄目ですわ…」

「ぷ〜！いいじゃんか…少しぐらい暴れてもさ！」

プリスは頬を膨らまして拗ねる。

レイスは頭を抱えながらも、懷からロストログアのビーストを取り出した。

「では…」

そしてレイスはビーストを魔物に翳して、魔物をビーストに吸収させた。

「ふう…これで任務完了ですね…」

「うゝ私はまだ暴れたりないづゝ！」

「……帰ったらプリンを上げます。」

「えーマジで！？帰る帰る！」

プリスはスキップしながら、先に行ってしまう。

レイスはそんなプリスを優しく見つめながら、あとをついていく。

「ただいまゝ！」

プリスとレイスは転送魔法とともに本拠地らしき屋敷に戻ってきた。

「ああ…二人共、ご苦労様…」

一人、パンをかじりながら、机でエリアが本を読んでいた。

「レイス…どうだった？集まったか？」

「はい…出来るだけ集めてみました。あまり騒がれない程度に…」

「そうか…わかった。」

エリアはゆっくりと立ち上がって、部屋を出てった。

「エリア…もしかして…」

「ええ…彼女の場所に向かったのでしょうか…」

「ぷ」相変わらず…妹さんの事になると、無口になりますな…エリ

アは…」

「待たせたな… カリア…」

エリアはある部屋に入る。

そこは白いカ　テンが風で舞う、まるで聖域のように綺麗な部屋だった。

そして開いた窓から、車椅子に乗っている少女が外を眺めていた。

少女は白い髪を靡かせながら、エリアの方を向くとニッコリと笑った。

「ああ… エリア兄様… お帰りなさい…」

カリアと呼ばれた少女は、純粋な笑顔でエリアを迎えてた。

エリアもカリアに笑顔で返して、カリアの傍による。

「悪いな…あんまり来れなくて…」

「いいんですよ…兄様だって色々とお忙しいのですから…」

「ああ…まあな…」

エリアは一瞬ばつがわるそうな顔をした。

そして、カリアの頭に優しく手を置いた。

「カリア…もう直ぐだ…お前と…一緒に住める世界に連れて行ってやるからな…」

「ふふ…はい…待っていますわ…エリア兄様…」

そう言つて、エリアとカリアは外の風景を一緒に眺めていた。

「やつふゝみんなゝそっちの方はどうなってるぷゝ!」

その頃プリスとレイスは、違う場所に移動していた。

そこは機械やら、沢山の魔法陣がある部屋で、ギルクとラインもそこにいた。

「普通に進んでいる…まあ計画に支障はない…」

ギルクはコンピューターをいじりながら、プリスに答える。

「そっか…まあそれなら安心ぶ〜」

「こっちの方より、そっちの方は大丈夫なのか？プリス？」

「まあね！レイスと一緒にだからね〜！」

プリスはくるくると回って、レイスに飛びつく。

レイスは困った顔をしながらも、プリスの頭を撫でていた。

「それにしても大きいね…これ〜」

プリスは部屋の上に浮かんでいる巨大な青い宝石を見上げた。

それは神々しく光を出しながら、周りの機械によって固定されていた。

「まあそれはそうでしょう…しかし…これのおかげで私たちは計画通りうごけるんです…」

「だね…そして…ビーストの能力を使って…私は世界を支配する力を手に入れるぷ」

「ええ…世界を手に入れる力…ワルド・ザ・マジックを…」

レイスとプリスは何かを思いながら、青い宝石を見ていた。

「あ！そうだ…レイス…！私早くプリンが食べたいぷ…！」

「あ、ああ…そうでしたね…では、おやつにしましょう…ギルクとラインも何か食べますか？」

「……俺は甘納豆…」

「私はド ナッツで…」

ギルクとラインが小声でそう言うと、プリスは口を隠して笑う。

「ぶぶ…相変わらず意外なチョイスで吹くぶ」

「こ、こら…プリスさん…人の好みを笑ったらいけませんよ?」

レイスはプリスを叱る。

ラインとギルクは少し顔を赤くしているようだった。

そして、そんな話をしてる中、エリアがカリアの車椅子を押しながら、部屋に入ってきた。

「皆さん…お疲れ様です。」

「おお!カリアちゃん!カリアちゃんも一緒にプリン食べよう!」

プリスはダアとカリアに抱きついて、グリグリとぼつずりをする。

「く、くすぐつたいよ…プリスちゃん…」

カリアはくすぐつたそうに顔を歪めた。

「とりあえず…兄様も何か食べますか？」

カリアはプリスの頭を撫でながら、エリアに微笑む。

「ん…そうだな…俺もプリンにするか…」

「ぷぷ！エリアにプリンとかあわなすぎだぷ！」

「黙れ…」

エリアはプリスを軽く小突いた。

「では、いきましようか…直ぐに作業にも戻らないといけませんしね…」

「ああ…行こう…」

そう言つて、みんなは違う場所に移動し始める。

後ろ姿を見ると、とても仲良そうに話あっているみんながいた。

まるで家族のようだ…

「あ、ちなみにプリンは2つしかありませんよ?」

「な、なん…だと?」

プリスは目を開かせせ、一気にダッシュした。

「あー!こら!勝手に食いに行つてはいけませんよ!」

レイスは呼び止めながら、プリスを追いかけて行つた。

「ふふ…プリスちゃんらしいですね…」

「ああ…俺達も急ぐか…カリア…」

「はい…兄様…」

カラカラと少しペースを上げて、プリス達のあとをエリア達も続く。

エリアとカリアは微笑みながら進んでいった。

（カリア…その笑顔…俺がずっと守ってやる……だから…必ず手に入れる…世界…ワールド・ザ・マジックを…）

ワールド・ザ・マジック34（後書き）

妹さん登場です！

今回はエリア達視点で、とうとうタイトルが出てきましたw

話もいい局面を迎えていきます！クライマックスまでおねがいしますね（ （

ワルド・ザ・マジック35（前書き）

35話です）

今回は少しシリアス展開ですが、珍しい感じになってますね

まあ一気に進めたいので、よろしくお願いします！

あと人気投票は詳しくしてからやりたいと思いますw

ワールド・ザ・マジック35

「はぁ…いい天気だな…」

ツカサはア スラの看板で、大の字で日向ごっこをしていた。
天気は晴れ。太陽が強く照らされて、眠気をさそうポカポカ感である。

「はぁ…いい天気…本当に落ち着くな…」

「ツカサさん…」

「ん？…あ、なのは…」

すると、ツカサが日向ごっこをしている所に、なのはが来た。

なのははツカサの隣に座って、太陽の光を浴びる。
元々の顔も綺麗なのだが、更に綺麗に輝いているようだった。

「なのは…やっぱり綺麗だね…ドキドキしちゃっよ…」

「ふえ！？い、いきなり何を言っんですか！」

「いや…なのはは太陽の光みたいに眩しい美しさだになって…」

「や、やめてよ…恥ずかしいですよ…」

なのはは顔を真っ赤にして、ツカサから顔を逸らす。

ツカサはそんななのはを見て、微笑みながら空を見上げる。

「って…そんな事を言いに来たんじゃないですよ…」

「ん？…そうなの？じゃあなのはは何の用事で来たの？」

「うん……ツカサさん…今、隠してる事あるよね？」

「隠してる事？」

「……ツカサさんの身体…今、悪い状態なんですよね？」

「……何の事やら……」

「誤魔化さないで下さい！」

なのははツカサに詰め寄って、服の袖を捲った。
そこには呪文みたいな物がある。

「ヴィ　タとシャルさんから聞いたよ？」

「く…黙っててと言ったのに…」

「…ツカサさん…トルンさんも…フェイトちゃん達も心配してました…隠し事は駄目ですよ…」

「わかってるよ…」

「いや…わかってません…ツカサさん…アナタには、戦線から外れて貰います…」

それを聞いたツカサは、目を見開かせ驚いた。

「ちょ、ちょっと待ってよ！？なんでそんな事になるんだ！俺は戦える！」

「こんな身体の状態で、ツカサさんを戦わせる事なんて出来ません！」

なのはのはつきりとした言葉に、ツカサはなのはを睨み付けて胸ぐらを掴んだ。

「ふざけるな！俺は戦えるよ！そんな事するな！」

「駄目です！出来ません！」

「く……なのはー！」

ツカサは熱くなっただま、なのはの胸ぐらを掴んだまま壁におしつ

けた。

「俺は平気だ…だから…そんな事言っな…」

「う……」

壁に押し付けられて苦しいのか、何時もツカサの雰囲気じゃない圧に驚いているのか、なのはは目を細めて声を漏らす。

「つ、ツカサさん…苦しい…」

なのはの声にツカサはハツとなって、なのはから手を離す。

「い、ごめん……でも…俺は戦うよ……」

「…ツカサさん…」

なのはは、悲しそうにツカサを見つめる。

そして決意したように、ツカサに近づく。

「何となく…ツカサさんならそう言つたと思いました…」

「…そうかい…」

「ですが…私は…ツカサさんを戦わせる気はありません…」

「だったら…どうするの？」

「だから…決めましょう…どっちにするか…全力全開の勝負で…」

そう言うのと、なのははレイジングハートを出して、戦闘体制に入る。

「勝負か…それに勝てば…俺は戦っていいんだな？」

「…勝てればですけどね…」

なのはの挑発まじりの言葉に、ツカサも自分のデバイス、バルグニスを出した。

こっちも戦闘体制に入ったようだ。

そして、少しの睨み合いの中、ツカサとなのはは一斉に飛んだ。

デバイスで防護服を纏いつつ、一気に加速していく二人は、一直線に空を飛んで、雲を突き抜けて太陽が近くで光り輝き、雲が広がる真上に二人は到達した。

「かなり暑いね…一気に終わらせようか…」

「そうですね…でも…そう簡単には終わりませんよ?」

ツカサとなのはも、両者デバイスを向ける。
何時もツカサとなのはがやってる模擬試合とは違う、ピリピリとした空気が焦がれる。

「はあ!」

先に動いたのはツカサだ。

高速移動魔法を使い、一瞬でなのはの後ろを取った。

「よめてますよー!!」

ガキン!!!!

しかし、なのははツカサの動きを読んで、ツカサのデバイス打撃を受け止める。

「く!!」

ツカサは一旦後ろに下がり、カトリッジロードをして魔力を充電する。

「フレイジングバースト!!」

そのまま、魔力砲をなのはに放つ。

だが、なのははそのまま砲撃をよけて、左方向に一気に加速して飛ぶ。

「く!! 待て!!」

ツカサも加速し、なのはのあとを追いかける。

ツカサとなのはは移動しながらのバトルに入った。

互いに後ろを取り合うようにして、魔力弾を撃ち込みながら、移動している。

「アクセルシュ ト!!」

「フレイムシュ ト!!」

燃えているような魔力弾と桜色の魔力弾が互いにぶつかり合い相殺する。

しかし、なのはの桜色の魔力弾は、弾幕を切り抜けてツカサに当たる。

「ぬぁ!!く...」

ツカサはギリギリで防御するも、動きを弱められてしまった。

「ツカサさん…アナタは確かに強くなりました。身体能力も魔力運用、基礎能力も…だけど…例えば、魔力が私より上でも、私より体力があっても…私には勝てませんよ！」

「く…うるさい…やってみなくちゃ…わからないだろ…！」

ツカサは再びカトリッジロードをして、デバイスを剣にし、なのはに接近戦闘を仕掛けた。

「うおおおおおおおおお！！！」

「全く！あの二人は何してんや！」

その頃、コントロール室でのモニターで、はやて達がなのはとツカサの試合を見ていた。

「たく！なのはの奴、ツカサと話すだけだとか言ってたのに…バカが…」

ヴィ　タはかなりイライラしながら、二人の試合を見ていた。

「や、やっぱり止めないと…あの二人…熱くなってる…」

フェイトやトルンはオロオロとしている中、クロノ艦長は冷静に試合を見ていた。

「みんな…落ち着くんだ…とりあえずエイミィ…被害が出ないように辺り一体に防御膜を張ってくれ…」

そしてクロノ艦長の指示にエイミィはコンピューターをいじる。

フェイト達は驚いていたようにクロノの方を向く。

「クロノ！あの二人の戦い止めないの！？」

「フェイト…こればかりはやらせてやれ…二人にも思う事はあるだろう…」

「で、でも…」

「大丈夫だ…なにかあれば直ぐに止める。だから安心しろ…」

クロノの言葉に俯くフェイト。

トルンはとても心配な面持ちで、ツカサとなのはの試合を見ていた。

その顔はとてもつらそうに見えた。

ワ
ルド・ザ・マジック35(後書き)

ツカサVSなのは(< | >)

今回は互いに譲れない気持ちから始まるバトルです！

次回もよろしくお願いします(^ | ^) v

ワールド・ザ・ミュージック36（前書き）

はい！更新完了！

アニメ冒険家はとりあえず、行けるとこまでワールドを更新したいと思います！

で、今回はなのはVSツカサです！
よろしく願います！

ワールド・ザ・マジック36

「はあ！」

ガキン！キン！ガア！ガキン！

火花を散らせながら、ツカサはなのはに切りかかる。

だが、ツカサの攻撃はことごとく受け流される。

「ツカサさん！私が接近戦闘が苦手と踏んでいるでしょうが、そうではありませんよ！」

そして、ツカサの攻撃を受け止めると、なのはは一瞬でツカサをバインドに縛る。

「ぐ！こ、これはカウンターバインド！？」

「そうです…ただ、闇雲に攻撃すれば良いと言つ事はないんです。」

なのははツカサから距離を取って、デバイスを構える。

「エクセリオン…バスタ　！！」

そのまま至近距離でツカサに砲撃を撃つ。

ドゴオオオン！！

「うあああああ！！」

ツカサは防御ごと飲み込まれて、直撃を食らう。

ギリギリの所で止まりながらも、ツカサの防護服はボロボロになっていた。

「はあ…はあ…はあ…」

「ツカサさん…諦めて下さい…アナタでは、私には勝てませんよ！」

「うるさい！まだだ…まだ終わってない！」

「ラグーンの奴…やはり押されてるな…」

コントロール室では、試合を観戦しているシグナムがそう答えた。

「そりゃそうだろ…ツカサは確かになのはより、スペックは高いが…結局は実戦経験や戦闘技術とかに関してはなのはの足元にも及ばない…」

ヴィータはムスツとさながら、ツカサとなのはの戦いを解説している。

「しかし…なんでこんな事になってしまったんや…」

はやては頭を抱えて、はやては机に寄りかかる。

それをフェイトが宥めている。

「とりあえず…今は二人を見てるしかないね…」

「…そやな…フェイトちゃんだって心配だもんな…」

「……うん…心配…だよ…」

フェイトはギュッと手を握って胸を抑える。
その顔はかなり心配している。

「フェイトさん…大丈夫ですか…」

「あ…トルン…」

その手を握って、トルンはフェイトに語りかける。

だが、トルンもすでに泣きそうな顔をしていた。
それを見たフェイトは、トルンの頭を撫でたのであった。

「はああー!!」

ガキン!!

なのはとツカサのバトルはまだ続いている。

ツカサはさっきのカウンターバインドを学習し、なのはに対して、高速移動を生かしたヒットアンドアウェイの戦法に変えた。

なのはもそれに気づいていて、ツカサの動きを何とか読みながら、攻撃をいなしていた。

(く…やはりツカサさんは速い…フェイトちゃんより速い…でも!)

なのははアクセルシュタを使い、周りに桜色の魔力弾を出して、ツカサを牽制する。

「アクセルシュタ…シュト!」

なのはは魔力弾を精密にコントロールして、ツカサを追尾させる。

ツカサは魔力弾を振り切ろうとするが、魔力弾はツカサに精密について行く。

（駄目だ!全然振り切れない…やっぱりなのはすごい…でも…俺は負けられない!）

ツカサはなのはの魔力弾に対して、真っ正面に立って剣を構える。

（だから…全部叩き落とす!）

ボン!バシュ!ザシュ!

ツカサは来る魔力弾を、剣で一気に叩き落とす。

「よし…どうだ!」

「まだですよ！ツカサさん！」

ツカサの真上になのはの声が届いた。

なのは魔力弾を囿に使い、ツカサの死角を取っていたのだ。

「デイベイン…バスタ　！！」

「く！うおおお！！」

ツカサはなのはの砲撃を剣で受け止める。

やはりただの威力ではなく、ツカサも押し返される。

「ぐぐ…ま、負けて…た、たまるか！！」

ツカサはカートリッジロードをし、その勢いのまま、なのはのデイベインバスタ　を吹き飛ばす。

「はあ…はあ…」

「ツカサさん…アナタの負けです…諦めて下さい…」

なのはは、ツカサの前に立ち、ツカサにデバイスを向ける。

「…嫌だ…俺は戦う…絶対にだ！」

「いい加減にして下さい！もし、ツカサさんの身体に異変が起きたら、死んでしまうかも知れないですよ！？」

「…かもな…俺は…死ぬかもな…でも、それでも俺は…この力で戦いたいんだ…！」

二人は互いに気持ちをぶつけ合う。

互いに全く譲らない。

完全にぶつかり合う状態であった。

「やっぱり…話し合いでは決まらないですね…」

「ああ…みたいだな…行くぜ！」

二人は一気に構えて、互いにカトリッジロードをする。

「デイベイン…バスタ　…！」

「プロミネンス…ブレイザー…！」

強力な魔力砲がぶつかり合う。

辺りの雲が一気に吹き飛び、ツカサとなのはの砲撃が火花を散らす。

「はあああああ…！」

「うおおおおお…！」

ドゴオオオオオン…！！

ぶつかり合った砲撃は巨大な爆発を起こした。

爆発が消えた時、なのははすでに射程圏から離れていた。

「はぁ…はぁ…危なかった…ツカサさんは…どこに？」

なのははツカサを探す。

しかし、ツカサの姿はどけにも見当たらない。

「いない…どこに……！？」

なのはが上を見上げると、ツカサが上に居た。

でも、ツカサの姿は変わっていた。

炎を纏った防護服に巨大な炎の羽の広げた姿になっている。

「ツカサさん…その姿は…」

「悪いな…なのは…俺は負けられない！」

ツカサは一気に加速して、なのはに斬りかかる。

なのはも加速して、ツカサの攻撃に反撃する。

ガギン！ギン！キン！ガア！ガギン！

二人は一瞬の攻防を繰り返しながら激突する。

「ツカサさん！私は、アナタの無理を認める事は出来ない！飛べなくなる事や、死ぬ事になるんですよ！」

「わかってる！わかってても、俺はみんなと戦いたいんだ！！」

「みんなも、私も！ツカサさんをそんな事にさせたくないのです！レイジングハート、エクシードモード！」

なのはの掛け声と共にレイジングハートの形が変わり、なのはの防護服も変わる。

「なのはあああああ！！」

ツカサも更に赤い羽を大きくして、なのはに突っ込む。

「はあ！！！」

なのはもレイジングハートから、桜色の羽を出してツカサに突っ込む。

巨大な赤い光と桜色の光が空に輝きながら、ぶつかろうとしていた。

その時だった。

「二人共、そこまでだよ！」

ツカサとなのはの間に、フェイトが入り、二人の攻撃を止めたのだ。

勝負はそこで終わりを迎えた。

ワ
ルド・ザ・マジック36(後書き)

なのはとツカサ決着！

次回をお楽しみに（
）

ワールド・ザ・マジック37（前書き）

更新祭りだワッショイワッショイ！（。 。 ；）

と言っわけで、また更新ました！

ツカサとなのはのバトル決着し、どうなるか！
始まります！

ワールド・ザ・マジック37

「二人は反省をちゃんとするようにな！」

はやてはそう言つと部屋から出て行く。

部屋に残ったのは、気まずい空気を放っている、なのはとツカサだけである。

「……ツカサさん……私はまだ認めていませんよ……」

「しつこいな……俺は戦つよ……」

「なんでそんなに聞いてくれないんですか！」

「お前だつて、なんで認めてくれないんだよ！」

「だって、無茶しようとしてツカサさんが言うから！」

ガラッ!!

「二人共！ええ加減にせや！」

「……ごめんなさい……はやてちゃん……」

「すまん……はやて……」

戻ってきて怒るはやてに、二人はしょぼーんとうなだれる。
はやては、深い溜め息をつき困ったように頭を抱えた。

「二人共…私が良いって言うまで、ここからでたらアカンよ！」

はやてはそう言うと、そのまま扉を閉めて行ってしまう。

再び取り残された二人は、とりあえず向き合う。

「なあ…なのは…なんで…認めてくれないんだ？俺は…みんなと戦
いたただけなんだ…」

「…それは…わかってます…でも、駄目です。」

「…なんで？」

「……………」

なのはは黙ると、下を向きながら椅子に座った。
そして、重い口をゆっくり開いた。

「私は…一度…撃墜した事があるんです…」

「…え？なのはが？」

ツカサが驚くと、なのはは頷いた。
エ スと言われているのはが墜落したのは、ツカサにとってはかな
りの驚きだった。

「私が十二歳ぐらいの時です…ヴィ　タちゃんと一緒に部隊をつれて、違う世界に調査していた時…」

「…その時に…何が？」

「…調査の帰りに…未確認の起動兵器が襲ってきたの…私達は勿論対処した…」

「…未確認兵器か…」

「うん…その戦いで…私は、未確認兵器の攻撃で重傷をおいまして。」

「…そんなに強かったのか？」

「ううん…普通に対処できた敵だった…それなのに…私は落とされた…なんてだと思っ？」

「……………わかんない…」

「…その時ね…私の身体はもうボロボロだったの…」

なのはは、自分の身体をギュッと抱きしめた。

「ボロボロ？…なのはの身体が？」

ツカサの言葉になのはは頷きながらも、顔を歪める。
その顔は、過去のトラウマを思い出してるようにつらそうな顔をして
いた。

「私が魔道師になったのは九歳の時…そこから私はこの道に入った
…」

「…九歳…まさか、そんな年から…」

ツカサは更に衝撃を受けた。

魔道師になるのは、普通はそんなに若くはないからだ。

「それで魔道師になった私は…そこからずっと…命懸けの実戦をく

ぐり抜けたの…何度も…」

「まじか…」

「それで…私は戦いの中、何時も身体の事なんて考えないで戦ってた…だから、私には…知らない間にダメージが蓄積されていた…そして、未確認兵器との戦いの時…私の身体にあったダメージのせいで…一瞬だけ、私の動きが鈍った…」

「……それが原因で、なのはは撃墜した…」

「…正解…私が無理した結果、みんなに心配をかけたり…飛べなくなるかも…ってお医者さんに言われたの…」

なのは、全部の過去を言い切ると、ツカサの近くまで移動して、強い眼差しで見つめた。

「ツカサさん…無茶するのは…沢山の事を傷つけるんです…だから、やめてください…」

「……嫌だ……」

ツカサのきつぱりとした言葉に、なのはは怒るように詰め寄った。

「なんで！？ツカサさんの場合！戦うだけでも身体に負担なんですよ！？そんな人…戦わせられません！！」

「ああ…そうだね…でも、俺は戦いんだ…」

「ツカサさんの馬鹿！！」

パシン！！

なのははツカサに平手打ちした。

ツカサは避ける事なく、平手打ちをくらう。

「あ……」
「ごめんなさい……」

「いいんだよ…なのは…お前は悪くない…それに、お前は俺の事を
思っ言っしてくれてるんだもん…」

ツカサはなのはの頭を撫でて、優しく微笑む。

「なのは…俺はな…ただの魔道師だったんだ…ただ…魔力が少しあつて…ちよつと魔法が使えただけの人間だった…」

ツカサは遠くを見るような目でなのはに語りかける。
なのははそれを真剣に聞いていた。

「そして…偶然…ロストログアが身体に入つて…俺は今、なのは達みたいに強くなった…最初は怖かった。だけど、力を手に入れた時、凄く嬉しかった…俺は強くなったんだって思った。」

手を握つて、ツカサは自分の力を噛み締める。

「…世話になつたなのは達と…一緒に戦える…沢山の人を救えるつて嬉しかった…だから、戦うなって言われた時はショックだった…」

「ツカサさん……ごめんなさい……」

なのはは申し訳ないように頭を下げた。なのはもツカサの気持ちを理解したからだ。

「いって言ったろ？…でも、なのは…俺はみんなと戦いたい…みんなを守りたいんだ！だから、頼む！俺もみんなと戦わせてくれ！！」

ツカサは声を荒げ、なのはに懇願するように頭を下げた。

「……ツカサさん…頭を上げてください…」

ゆっくりとツカサが頭を上げると、なのははニツコリと笑っていた。

「わかりました…一緒に戦いましょう…でも、ツカサさんの身体に少しでも異変があったら、駄目って事で…」

なのは指を突きつけて、ウインクをする。

それを聞いたツカサは、嬉しそうに満面の笑みを零した。

「なのは…ありがとう…そして、ごめんな…」

「こっちこそ…ごめんね…」

二人は同時に頭を下げて、ゆつくりと上げた。顔を上げた二人の顔は、とても明るかった。さっきまでの暗い空気が、今ではもうない。

「それにしても、ツカサさんは頑固だよ…」

「お前もだろ？頑固なのはめ…」

「あゝひどい！」

ポカポカとツカサを叩くのは。
ツカサはなのは手を優しく握って微笑む。

「ほら…仲直りの握手ね…」

「にゃ、にゃはは…なんだか、恥ずかしいね…」

顔を少し赤くしながら照れるのは。

ツカサも少し赤くなった頬をかいた。

「じゃあ…私も、仲直りの印しにケ　キこ馳走しますね!」

「お…マジか…でも、俺はそれより…なのはを食べたい!」

「…私を…食べる? ……!!?」

ササッ!

少しポカーンとしていたなのはは顔を赤くして、ジト目になりながらツカサから離れた。

「ツカサさん…他の女性にもそんな事言って、エッチな事してるんですね…」

「ギクッ…なんで…知ってるのかな?」

「それも、シャルルさんやヴィ　たちゃん達から聞いた。」

ツカサは悔しそうに手を震わせた。
ヴィ　タ達にしてやられたからである。

「……はあ……じゃあ……ん……」

なのはは、少し抵抗しながらも、唇を突き出した。

「え……何？」

「何って……キス……一回だけならいいよ……」

「え！？まじでか？」

ツカサはびつくりしながらも聞き返す。
なのはは戸惑いながらも頷いた。

「だから…早くして下さい…」

「あ、ああ…わかった…」

ツカサは息を整え、ゆっくりとなのはにキスをした。
数秒間のキス、なのはにはかなり長く感じてたようだった。

「えっと…なのはの唇…柔らかいな…」

「…にや…そんな事…言わなくていい…」

なのはは、顔を真っ赤して涙目になりながら俯いた。
よっぽど恥ずかしがったようだ。

「と言うわけで…なのは、是非続きを！…！」

ツカサはバツとなのはに抱きつかうとしていた。

「調子にのんじゃねえ変態！」

バゴォ!!

しかし、入ってきたヴィ　タのハンマーで殴られた。

そしてそのまま引きずられて行つた。

「まあ…仲直り出来て良かったな…」

最後にヴィ　タはなのはにそう言つと、手をふりながら、ツカサを連れて出て行つた。

「にやはは……」

なのはは一人になって、ゆっくりと椅子に座つた。
キスの事があつた為か、まだ顔は赤い。

「
…私…ファーストキスだったな…」

ワルド・ザ・マジック37(後書き)

やっふゝ!きましたねゝ
ドッキドキだぜ!!

次回もよろしくお願いします(< | >)

ワールド・ザ・マジック38(前書き)

更新やりましたぜい)(

ワールド・ザ・マジック、とうとう最終決戦突入とさせていただき
やすぜい!

皆さん、これからもよろしくね!!

ワ
ルド・ザ・マジック38

闇が渦巻いていた。

大きな闇は渦巻きながら、男の周りを囲んでいた。

そして、その闇は炎のように燃え上がり、男にまとわりつく。

男は苦しみながら、闇の炎に焼かれていた。

闇の炎はあざ笑うように男を燃やす。

燃やす！燃やす！燃やし尽くす！

「ヒヤアハハハハハハハハハハ！オマエハキエルンダ！
ヤミニノマレテナ！！ツカサ・ラグーン！ヒヤアハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハ！！」

狂気にまみれた声が、闇に響いた。

それは、深く闇に包まれながらも、大きく響き渡っていた。

「うわあああああ！！？」

ベツトから一気に起き上った。ここはツカサの部屋である。ツカサは汗がべったりとついていて、息使いも荒くなっていた。

「はぁ…はぁ…夢か…嫌な夢だな…」

ツカサは立ち上がって、洗面所で顔を洗う。
息をついて、とりあえず落ち着く。

「全く…朝から嫌な夢みたな…まあとりあえず…みんなの所に行くか…」

ツカサは身体を延ばしながら、はやて家のリビングに向かう。

「やっと起きたか…遅いぞラグーン。」

ツカサがリビングに着くと、すでに八神家のメンバーが全員集まっていた。

だが、みんなは重そうに顔を俯いていて、暗そうな面持ちになっていた。

「あれ？みんな…どうしたの？」

「ん…ツカサくん…大変な事が起きてるんや…」

「大変な事？」

ツカサが聞き返すとはやては、ゆっくりと顔をあげた。

「ええ…さつき通信で聞いたばかりなんやけど、ロストログアの反応が出たんよ。」

「なんだって！？じゃあ、ビーストがまだあったのか！」

その言葉にはやては首を振って、否定した。

「いや…多分敵に取られたビーストや…反応が固まって現れたから…」

「そっか…じゃあ、一気に取り返すチャンスだな！」

「いや…そうもいかねんだよ…」

するとヴィ　タが横からツカサに言う。
ツカサは不思議そうに首を傾げた。

「なんでだよ…なんか理由でも…」

「私が説明するです。」

リインがツカサの近くまで来て、あるモニターを出した。

「ん…これは…？」

「はい…ミットチルダからある一定の宇宙の距離を表した表です」

「ミットチルダから…宇宙?!なんでそんな物が?」

「…宇宙から何です…ロストログアの反応があるのは…」

「え?...宇宙から?!」

ツカサは驚いて後ろに下がる。
ロストロギアの反応が宇宙からあると言う事は、敵であるエリア達も宇宙にいると言う事である。
流石に驚きは隠せない。

「い、いつ宇宙にあるってわかったの？」

「今日の朝からや…今、管理局は大慌てで対策を考えているんや…私達もすぐ行く予定や。」

はやては顔をキリッとして、眉を強めた。シグナム達もビシッとはやての方に向いて、目を強めた。

「ツカサさんは…準備大丈夫か？」

「…はは…大丈夫に決まってるって！みんなで宇宙で行こうぜ！！」

ビシッと拳を握り締め、笑顔で言うツカサ。
みんなは思わず笑ってしまうのであった。

「……来たな…ついにここまで…」

エリアは上を見上げて、呟いた。

エリアの真上には、以前にエリア達の居た場所にあった巨大な青い宝石があった。

「エリア…すごいな…今の状況！私達って宇宙に居るよね…！」

プリスはクルクル回りながら、窓らしき場所から外を眺めた。

外には黒い空間、星が輝きながら、下の方にミットチルダが見える
壮大な宇宙空間が広がっていた。

「ああ…そうだ。始まるんだ…世界の手に入れる…この城は、その
為の物だ…」

巨大な城。それが今、広大な宇宙に一つ佇んでいる。

ミットチルダを見下すように、その城へは異様な雰囲気放っていた。

「エリアは堅くなりすぎだぷ！ 私達は負けられないかもしれないけど、きっと大丈夫大丈夫！」

プリスはいつもの笑顔で、エリアに抱きつく。

エリアはため息を吐きながらも、少し穏やかな顔になって、プリスの頭を撫でていた。

「エリアにプリス。」

そんな時、後ろの扉から、レイスが入って来た。

レイスは普段とは違う雰囲気をしていた。エリアと同じかもしれない。

「なんだ、レイス？」

「はい…管理局が動き始めました。多分、儀式が終わる前に戦い始める事になるでしょう。」

「そうか…まあ予想通りだな…」

エリアはプリスを離して、ゆっくりと歩き出す。

覚悟を決めたような眼差しは遠くを見つめるようにしていた。

「レイス、他の奴らにも連絡。そして、管理局を迎え撃つ準備だ。」

「ええ、わかりました……エリアはもう覚悟してるのですね？」

レイスの言葉に、エリアはうなずいた。その様子を見たレイスは安心したように笑顔になって、部屋を出ていった。

「楽しみだね……エリア、妹は今どうしてるぶ〜？」

「ああ……あいつは部屋で寝ている。本当はこんな場所なんかに来て来たくはなかったがな……」

エリアは心配そうな面持ちで、宇宙を見つめていた。

エリアにとっては大切な妹が、大きな戦いになる場所に居ればその気持ちもわかる。

「まあ、仕方ないよね……地球を手に入れる為だもんね……だから、成功させないとね！」

「ああ……その通りだな……必ず……成功させなければ……」

エリアとプリスはある部屋についた。

そこには、ある台が置かれていた。
エリアはその装置に手をかざした。
すると、その台は赤い色となって輝きだした。

「よし…ギルクとラインがうまくやつてくれたな…」

「みたいだねー！じゃあ、行っちゃいますか！」

「ああ…作戦…開始だ！」

その言葉と、共に宇宙に浮かぶ城は動き出した。

ワールド・ザ・マジック38(後書き)

はい!!最終決戦は宇宙とさせていただきます!

これからどうなるか、楽しみにしてくださいね!

() ()

() ()

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4987n/>

ワールド・ザ・マジック

2011年10月25日08時12分発行